

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第356集

成谷遺跡発掘調査報告書

山形村道緊急地方道路整備県代行工事関連遺跡発掘調査

(財) 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

成谷遺跡発掘調査報告書

山形村道緊急道路整備県代行工事関連遺跡発掘調査

序

岩手県には旧石器時代の遺跡を始めとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があります。これら先人が残した貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私達県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も県民の切実な願いであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発の調和も今日的な課題であります。当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、二級村道川井線の緊急地方道路整備事業に伴って、平成11年度に行われた調査結果をまとめたものであります。

調査によって、縄文時代後期と平安時代の竪穴住居跡、土坑等の遺構や縄文時代早・後期の土器や石器、平安時代の土師器等の遺物などの貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力とご支援を賜りました久慈地方振興局、山形村教育委員会をはじめとする関係各位に心より感謝申し上げます。

平成13年1月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 千葉 浩一

例　　言

1. 本報告書は、岩手県九戸郡山形村大字川井第2地割字外山38-2ほかに所在する成谷遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、二級村道川井線の緊急地方道路整備事業に伴い、久慈地方振興局の委託を受け、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した緊急発掘調査である。
3. 岩手県遺跡台帳に登録される遺跡番号はJF46-1066、発掘調査時の略号はNY-99である。
4. 発掘調査面積は2,240m²であり、発掘調査期間と調査担当者は次のとおりである。

　　発掘調査期間　　平成11年9月1日～11月11日

　　調査担当者　　文化財専門調査員　菊池貴広・佐々木進悦

5. 室内整理期間と整理担当者は次のとおりである。

　　室内整理期間　　平成11年11月12日～12年3月31日

　　整理担当者　　菊池貴広・佐々木進悦

6. 本報告書の執筆は、I・II・III章は佐々木　進悦、IV～VI章は菊池貴広が執筆し、編集は菊池貴広が行った。

7. 委託機関は次のとおりである。

　　基準点測量　　株式会社　藤森測量設計

　　空中写真撮影　　東邦航空株式会社

　　現況地形図作成　　株式会社　ハイマーテック

　　炭化材の樹種同定　　岩手県木炭協会　早坂松次郎

　　石器鑑定　　花崗岩研究会

　　鉄製品保存処理　　岩手県立博物館

8. 発掘調査や室内整理・報告書の執筆にあたり、次の方や機関からご指導・ご協力をいただいた。

　　川向石造・田端正治（山形村教委）、長内三蔵（山形村）・宇部則保（八戸教委）久慈地方振興局
　　土木部（順不同敬省略）

9. 本遺跡の調査で得られた一切の資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序	
例言	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	1
1. 遺跡の位置	1
2. 遺跡の周辺の地形と地質	1
3. 基本層序	5
4. 周辺の遺跡	6
III 調査の方法と室内整理	11
1. 野外調査の方法	11
2. 室内整理の方法	12
IV 検出された遺構と遺物	13
1. 縄文時代の竪穴住居跡と出土遺物	13
2. 住居状遺構	18
3. 平安時代の竪穴住居跡と出土遺物	20
4. 土坑	38
5. 柱穴状ピット群	42
6. 縄文時代早期中葉の土器・石器集中区	42
V 遺構外出土遺物	51
1. 土器	51
2. 石器	52
VI まとめ	63
1. 竪穴住居跡	63
2. 出土遺物	65
3. おわりに	65

図版目次

第1図 岩手県全図	2
第2図 周辺地形分類図	3
第3図 遺跡位置図	3
第4図 遺跡周辺地形図	4
第5図 土層柱状図	5
第6図 周辺の遺跡位置	8
第7図 遺構配置図	9
第8図 凡例	12
第9図 3号竪穴住居跡	14
第10図 4号竪穴住居跡	15
第11図 5号竪穴住居跡	17
第12図 6号竪穴住居跡・1号住居状遺構	19
第13図 1号竪穴住居跡(1)	21
第14図 1号竪穴住居跡(2)	22
第15図 1号竪穴住居跡(3)・2号竪穴住居跡(1)	24
第16図 2号竪穴住居跡(2)	25
第17図 2号竪穴住居跡(3)	26
第18図 2号竪穴住居跡(4)・7号竪穴住居跡(1)	28
第19図 7号竪穴住居跡(2)	29
第20図 7号竪穴住居跡(3)	30
第21図 8号竪穴住居跡(1)	32
第22図 8号竪穴住居跡(2)	33
第23図 8号竪穴住居跡(3)	34
第24図 9号竪穴住居跡(1)	36
第25図 9号竪穴住居跡(2)	37
第26図 土坑(1)	40
第27図 土坑(2)	41
第28図 柱穴状ピット群	43
第29図 縄文時代早期土器・石器出土状況	45
第30図 遺構内出土遺物(1)	46
第31図 遺構内出土遺物(2)	47
第32図 遺構内出土遺物(3)	48
第33図 遺構内出土遺物(4)	49
第34図 遺構内出土遺物(5)	50
第35図 遺構外出土遺物(1)	53

第36図 遺構外出土遺物(2)	54	第39図 遺構外出土遺物(5)	57
第37図 遺構外出土遺物(3)	55	第40図 遺構外出土遺物(6)	58
第38図 遺構外出土遺物(4)	56		

写真図版目次

写真図版 1 遺跡全景	69	写真図版14 8号竪穴住居跡	82
写真図版 2 遺跡全景	70	写真図版15 9号竪穴住居跡	83
写真図版 3 3号竪穴住居跡	71	写真図版16 9号竪穴住居跡	84
写真図版 4 4号竪穴住居跡	72	写真図版17 土坑	85
写真図版 5 4・5号竪穴住居跡	73	写真図版18 10号土坑・柱穴状ピット群	86
写真図版 6 5・6号竪穴住居跡	74	写真図版19 繩文時代早期土器出土状況	87
写真図版 7 6号竪穴住居跡・1号住居状遺構	75	写真図版20 遺構内出土遺物(1)	88
写真図版 8 1号竪穴住居跡	76	写真図版21 遺構内出土遺物(2)	89
写真図版 9 1・2号竪穴住居跡	77	写真図版22 遺構内出土遺物(3)	90
写真図版10 2号竪穴住居跡	78	写真図版23 遺構内出土遺物(4)・遺構外出土遺物(1)	91
写真図版11 2・7号竪穴住居跡	79	写真図版24 遺構外出土遺物(2)	92
写真図版12 7号竪穴住居跡	80	写真図版25 遺構外出土遺物(3)	93
写真図版13 8号竪穴住居跡	81	写真図版26 石器	94

表 目 次

表1 周辺の遺跡	7	表2 柱穴状ピット規模一覧表	44
表3 遺物観察表	59		

I 調査に至る経過

成谷遺跡は二級村道川井線の緊急地方道路整備（市町村代行）事業に伴って、その事業区域内に存するところから発掘調査を実施することになったものである。

二級村道川井線は、九戸郡山形村中央部に位置する道路で、村道川井関線を経由し小国・関集落と国道281号線を結ぶ生活関連道路であるが、平均幅員4.0mで車両のすれ違いが困難であり、また、未改良（砂利道）であるため、県の代行事業として整備するものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成8年4月に岩手県教育委員会に対し分布調査を依頼した。その後岩手県教育委員会の回答を得、平成8年10月に試掘調査を依頼し、同年11月に成谷遺跡を含め3箇所試掘調査を実施した。その後、成谷遺跡については、平成10年11月再度試掘調査を行い、その結果、本調査が必要であるとの回答を得、同年12月に岩手県教育委員会、（財）岩手県文化振興事業団、久慈地方振興局土木部の3者で現地立会を行い、現地確認、今後の日程等を協議した。その後（財）岩手県文化振興事業団と久慈地方振興局の間で平成11年8月31日に契約を締結し、9月1日から発掘調査を実施した。

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

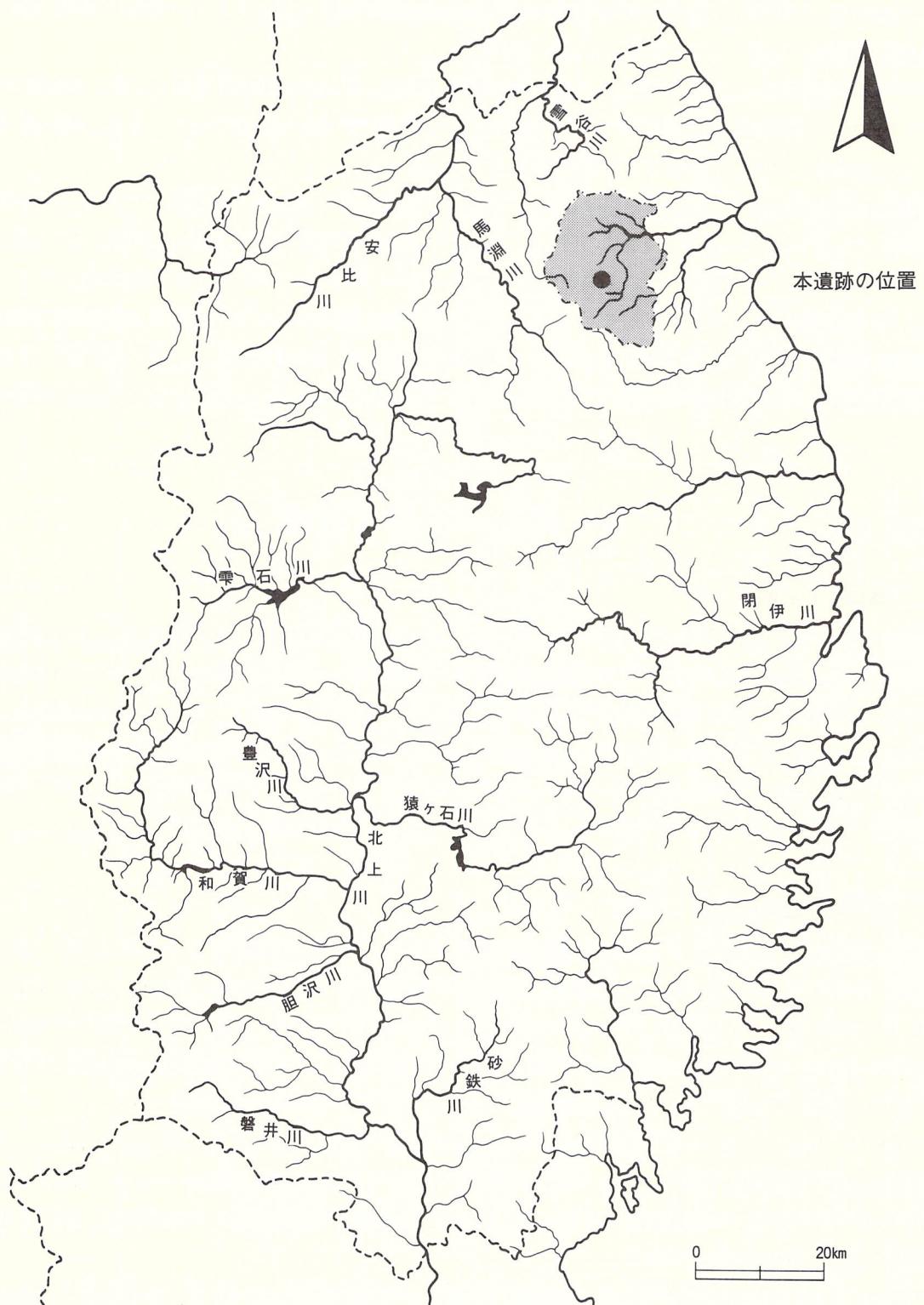
成谷遺跡は、九戸郡山形村大字川井字外山地内に所在する。山形村役場から東へ約1.5km、国道281号東側からに位置し、遠別川左岸の低位河岸段丘上に立地する。遺跡から北約1.5kmの上位段丘には旧石器が発見された早坂平遺跡がある。遺跡の所在する山形村は、岩手県の東北部に位置し、北は軽米町・大野村、東は久慈市、西は九戸村、南は葛巻町・岩泉町の6市町村に接している。面積295.61km²のうち約95%が山林で占められている。平地は河川の流域にわずかに点在しているにすぎない。国土地理院発行の5万分の1地形図「陸中関」(NK-54-18-8)の図幅に含まれ、北緯40度07分58秒、東経141度35分37秒付近にあたる。

2. 遺跡周辺の地形と地質

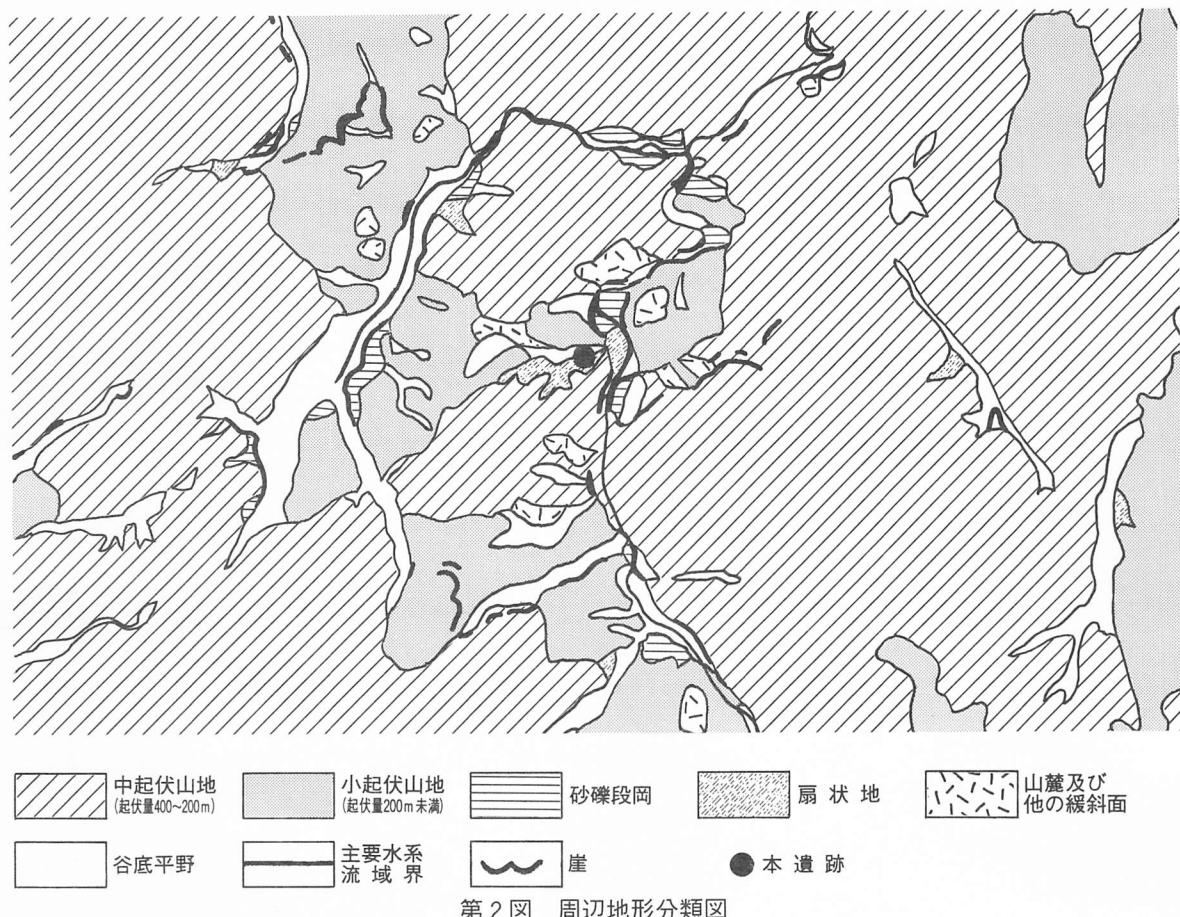
遺跡の所在する山形村は、北上山地の北端部にあるため、山岳が多く平地が少ない地形である。南西部の平庭岳(1060m)・明神岳(887m)・遠別岳(1241m)・蓬森(1174m)・遠島山(1262m)や中部のマネドコ山(867m)、東部の寒長根山(721m)などの高岳に源を発する遠別川や川井川は、合流して久慈川となり太平洋に注ぐ。また平庭峠の東側に源を発する瀬月内川は北流し、八戸市で馬淵川と合流し、やはり太平洋に注ぐ。集落や耕地はこれらの河川の流域並びに山間の緩やかな傾斜地に点在している。

本遺跡は、久慈市に向かって北流する遠別川の西側にあり、更に西側の段丘上には畠地が広がる。遺跡と川の間には村道川井線がある。調査区は斜面に広がる北部と平坦な中央部、南部からなる。標高は約260～270mを測り、遠別川との標高差は2～8mである。遺跡の現況の北側は草地、中央が蕎畑、南側は荒れ地で周辺の地目は山林・畠地である。

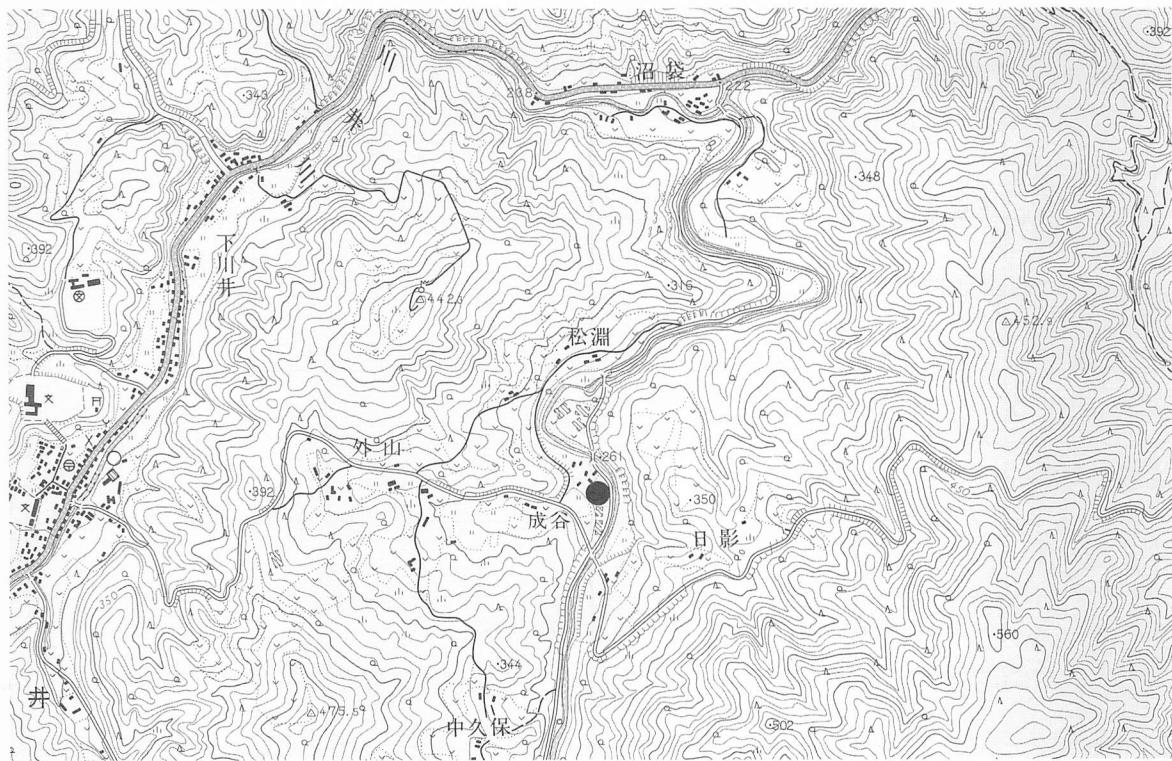
地質は、古生層が大部分を占め、他に中生層・第四紀層・花崗岩類等が分布する。古生層は北上山地北部型と呼ばれる砂岩・粘板岩・チャート・輝緑凝灰岩・石灰岩等から構成されている。また、土壤は淡色黒ボク、黒ボク、褐色森林、乾性褐色森林等の土壤で占められている。



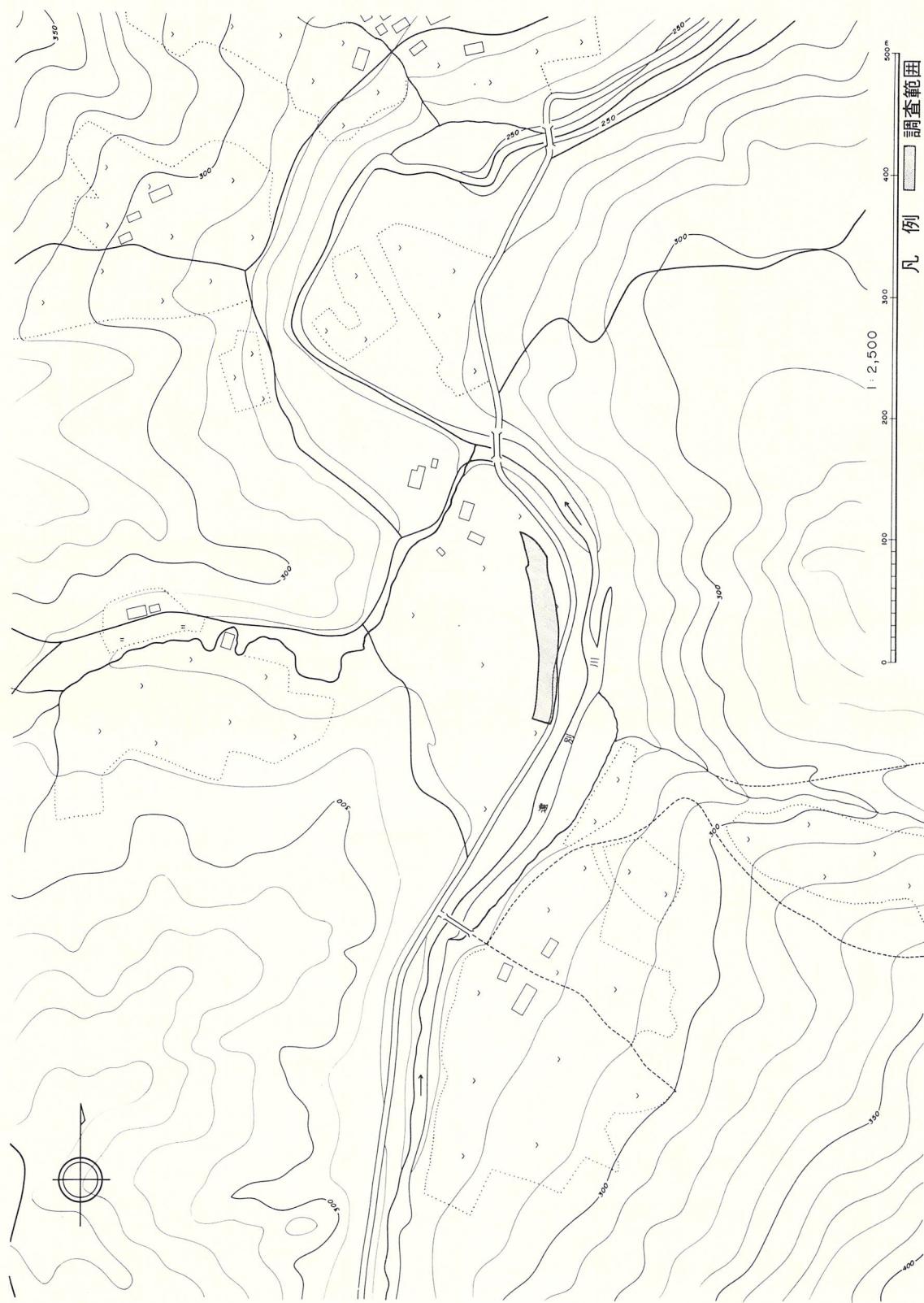
第1図 岩手県全図



第2図 周辺地形分類図



第3図 遺跡位置図



第4図 遺跡周辺地形図

地区ごとの地質分布は下記の通りである。

荷軽部	ローム、砂岩	日野沢	ローム、砂岩
戸呂町	泥岩、珪岩質岩	川井	砂岩、輝緑凝灰岩、石灰岩、泥岩、礫岩、砂岩
霜畠	泥岩、珪岩質岩石	小国	花崗岩質岩石、石灰岩
繫	輝緑凝灰岩		

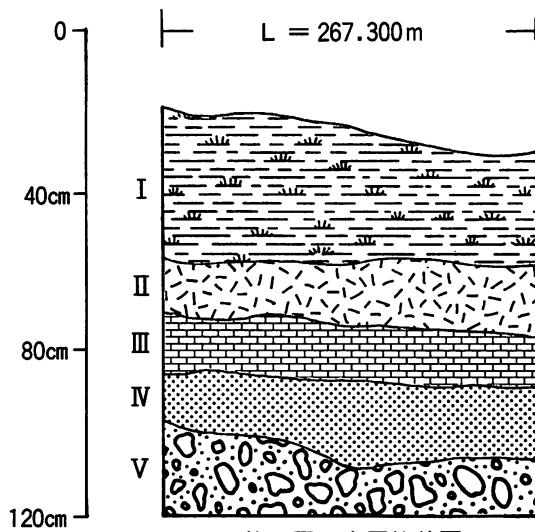
引用・参考文献

- 山形村教育委員会 1991 「山形村遺跡分布調査報告書2」山形村埋蔵文化財調査報告書3
岩 手 県 1972 「北上山系開発地域 土地分類基本調査 陸中関」

3. 基本層序

調査区域内では、基本的には第 図に示すような層序が観察される。本遺跡の基本層序は以下のように大別される。

- 第I層 黒色土 (10YR2/1) シルト粘性やや弱く締まり疎 (現表土・耕作土)
層厚30~40cm
- 第II層 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱く、締まり密 (明黄褐色土を含む。この層が大半の遺構検出面である。縄文時代後期の遺物が出土)
層厚14~20cm
- 第III層 明黄褐色土 (10YR6/8) シルト粘性やや強、締まり密 (黒褐色土を含む。縄文時代早期中葉の土器・石器が出土)
層厚12~18cm
- 第IV層 明黄褐色土 (10YR6/8) 粘土 粘性強で、締まり密 (上層で縄文時代早期の遺物が若干出土)
層厚14~24cm
- 第V層 褐色土 (10YR4/6) 砂質シルト 粘性弱、締まりは密である。
層厚14~22cm
- 第VI層 砂礫層・礫と砂の層である。
層厚不明



第5図 土層柱状図

4. 周辺の遺跡

山形村では平成元年度から3年間にわたって詳細遺跡分布調査が実施され、村内の埋蔵文化財の実態が明らかになってきた。同村でこれまでに行われた本格的な発掘調査例としては、早坂平遺跡、高屋敷遺跡、明通遺跡、丹内I遺跡、川井館跡などがある。

遺跡の分布を概観すると、縄文時代の遺跡は遠別川沿い、各地区の沢沿いの斜面、山麓緩斜面にみられる。一方、製鉄関連遺跡は村内を流れる戸呂町川沿い、日野沢沿い、小国地区の山間部などに存在している。また、中世の城館跡は丘陵地に存在している遺跡が多いものの、その周囲は平野部に面している。分布の状況を地域的にみると、川井、繫の両地区で戸呂町、日野沢地区では、河川沿いに広く分布しているという特徴が見られる。

村内で発掘調査された遺跡で、後期旧石器時代の遺跡に早坂平遺跡がある。出土遺物は黒色頁岩製の石刃石核及び石刀、稜付石刀、中～大型木葉形尖頭器、その他剝片等の遺物、縄文時代前期の土器が出土している。調査報告書によると、遺跡は原石産地として位置付けられているが、環境の変化に対応する居住形態、石器製作の変化があったことも推測できるとしている。

縄文時代、奈良・平安時代の集落跡である高屋敷遺跡では、3年間の調査で縄文時代の竪穴住居跡36棟、奈良・平安時代の竪穴住居跡24棟、土坑44基、配石遺構5基、柱穴状ピット群1群が検出されている。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器、琥珀等多様で、村内の縄文、弥生、奈良、平安時代の生活を知る上で貴重な資料が出土している。

明通遺跡では、住居跡等の遺構は確認されなかつたが、焼土遺構4基が検出された。遺物は、縄文時代前期及び後期の土器、石器が出土している。

丹内I遺跡では、弥生時代の竪穴住居跡2棟、土坑6基、縄文時代の陥し穴1基、土坑4基が検出されている。遺物は縄文土器、弥生時代後期の土器、石器、近世陶磁器が出土している。

旧石器時代の遺跡では原石産地の早坂平遺跡、成谷遺跡、大戸の境久保遺跡が存在する。また、早坂平遺跡の対岸にある大平遺跡でも類似の剝片がローム層より出土しており、この遺跡も旧石器時代になる可能性がある。これらの遺跡により先住民が後期旧石器時代中葉期から居住していたことがわかる。

中世の遺跡としては、発掘調査された川井館、その他成谷館、小国館、日野沢館、荷輕部館などが遺跡分布調査によって確認されている。

また、3年にわたる調査で71ヶ所もの製鉄関連遺跡が確認されており、近世製鉄関連業の操業がいかに盛んであったかがわかる。

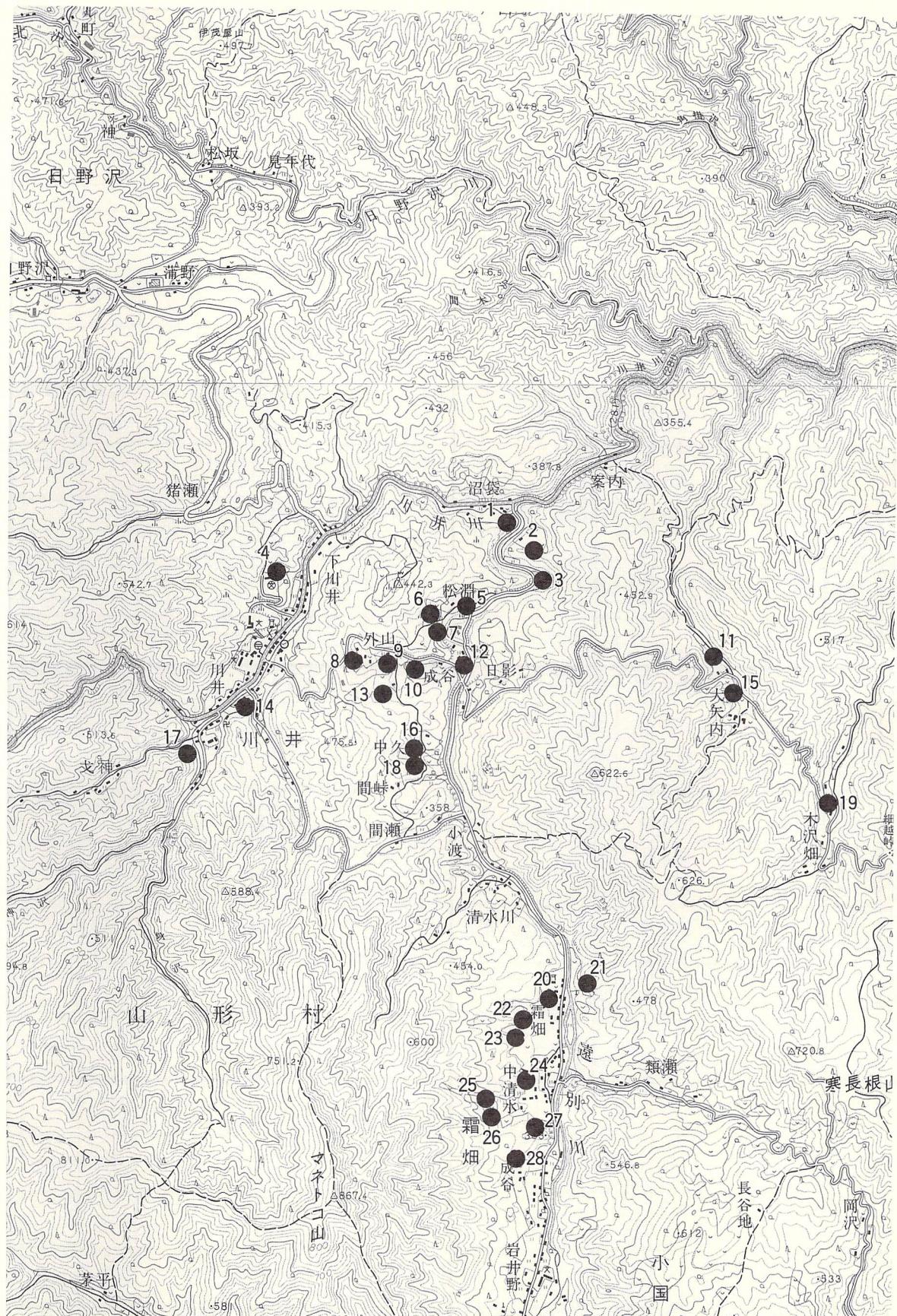
以上、村内における遺跡の概観について述べてきたが、山形村での遺跡の発掘調査が更に進むにつれ実態が明らかになっていくものと思われる。

引用・参考文献

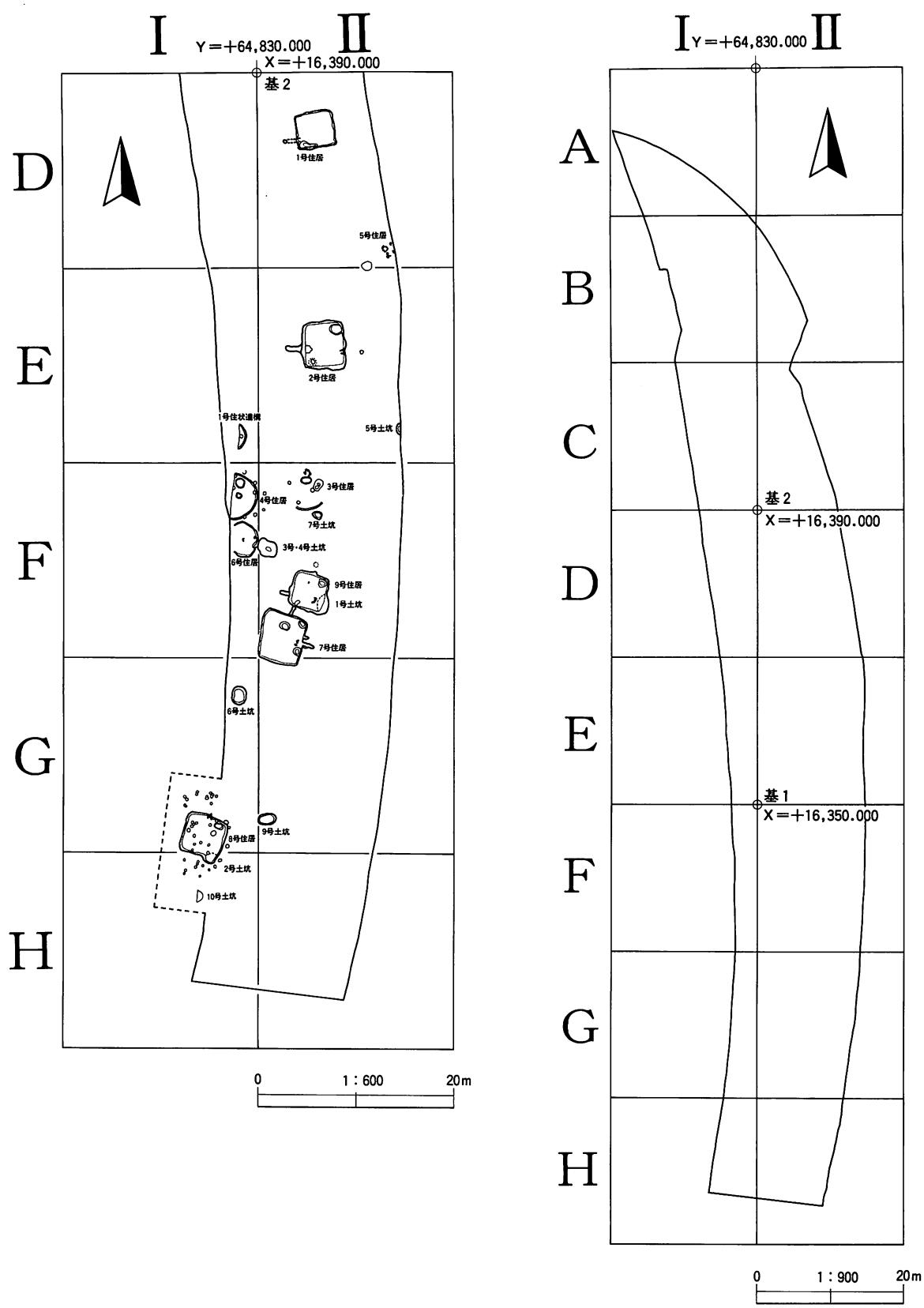
- 山形村教育委員会 1991 「早坂平遺跡—原石産地遺跡の研究—」山形村埋蔵文化財調査報告書2
山形村教育委員会 1995 「高屋敷遺跡」山形村埋蔵文化財調査報告書5
岩手県文化振興事業団 1993 「明通遺跡発掘調査報告書」岩埋文報告書第190集
岩手県立博物館 1997 「九戸郡山形村 丹内I遺跡発掘調査報告書」岩手県立博物館調査研究報告書第13冊
山形村教育委員会 1992 「山形村遺跡分布調査報告書3 山形村埋蔵文化財調査報告書4

表1 周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物等	備考
1	早坂平	散布地	旧石器・縄文	石器、縄文土器(中期)	沼袋と統合
2	大平	散布地	旧石器・縄文	縄文土器、石器	
3	松淵Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	
4	日当畠Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	
5	松淵Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	
6	柳久保Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	
7	柳久保Ⅰ	散布地	縄文・平安	縄文土器、石器、土師器	
8	外山Ⅰ	散布地	縄文	石器剝片	
9	外山Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	
10	外山Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器	
11	大谷内	散布地	縄文	縄文土器(晚期)、石器	
12	成谷	散布地	旧石器・縄文	縄文土器、土師器	
13	外山Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器、石器、土師器	
14	向畠	散布地	縄文	縄文土器	
15	大矢内	散布地	縄文	縄文土器(中期)、石器	
16	大石久保	散布地	縄文	縄文土器	
17	川井(中倉)	散布地	縄文	縄文土器(前期)、石器	
18	中久保	散布地	縄文	縄文土器	
19	上中居	散布地	縄文	縄文土器、鉄滓	
20	霜畠Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器、石器	
21	八幡橋	散布地	縄文・奈良・平安	縄文土器、土師器	
22	霜畠Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	
23	霜畠Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器(晚期)	
24	霜畠Ⅴ	散布地	縄文・奈良・平安	縄文土器、土師器	
25	中清水Ⅱ	散布地	平安	土師器	
26	中清水Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器(中期)	
27	成谷Ⅳ	散布地			
28	成谷Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	



第6図 周辺の遺跡位置図



第7図 遺構配置図

III 調査の方法と室内整理

1. 野外調査の方法

(1) 調査区の設定

本遺跡の調査では、調査区全体を平面直角座標第X系にのせてグリッドを設定することにした。調査区内に基準点1・2及び補点1・2・3を設置し、基準点1と補点1を結ぶ直線と基準点・補点を通りこれに直行する直線を基準線とした。基準点1、2及び補点1、2、3の成果値は以下のとおりである。

基準点1 X=16, 350. 000 Y=64, 830. 000 H=267. 179m

基準点2 X=16, 390. 000 Y=64, 830. 000 H=266. 101m

補 点1 X=16, 370. 000 Y=64, 830. 000 H=266. 813m

補 点2 X=16, 350. 000 Y=64, 838. 000 H=267. 303m

補 点3 X=16, 370. 000 Y=64, 838. 000 H=266. 781m

グリッドは起点を北西に置き1辺が $20 \times 20\text{m}$ の大区画と、大区画をさらに $4 \times 4\text{ m}$ の小区画に細分している。大区画は起点から北にローマ数字のI～II、西にアルファベットの大文字A～Hを、小区画は北から南へ数字の1～5、西から東へアルファベットの小文字a～bを付している。調査区の名称は、大区画と小区画の組み合わせでIA1a、IB2aというように呼称している。

(2) 粗掘・遺構検出

調査はまず雑物の除去後、調査区北部に $2 \times 2\text{ m}$ のテストピット8ヶ所設定し、表土を除去したところ砂礫層となっており、遺物・遺構は確認されなかった。調査区中央部で文化課が実施したトレンチのクリーニングを行い、それに直行するように 2 m 幅のトレンチを5本設定した。その結果、II層で遺物・遺構を確認したため重機でI層を除去後、人力によって鋤簾・両刃鎌等を用いてII層以下の遺構の検出を行った。遺物・遺構の検出面は、II層（黒褐色土）III層（明黄褐色土）で行った。

(3) 遺構の命名

検出した遺構には、通し番号で検出順に1号竪穴住居跡・2号土坑などと検出順に遺構名を付している。欠番になっている遺構は、調査中・室内整理中に遺構と確定できなかつたものを割愛した。

(4) 遺構の精査と実測

住居跡は4分法で、土坑・焼土等は2分法で精査し、必要に応じて使い分けた。実測は簡易造り方で行い、遺構の平・断面図は、20分の1の縮尺を基本とした。炉跡・カマドの断面図は10分1の縮尺で図面を作成した。

(5) 遺物の取り上げについて

遺物の取り上げについては、遺構内は遺構毎に埋土上位・中位・下位・床面として取り上げ、遺構外については、小グリッドごとに層位を記して取り上げた。縄文時代早期の土器が出土した集中区では平板を用いて、図面に出土地点を記して取り上げた。

(6) 写真撮影

野外での写真撮影は、35mm版2台（モノクローム・カラーリバーサル各1台ずつ）と $6 \times 7\text{ cm}$ 版モノクロームを使用した。メモ的にポラロイドカメラも使用した。遺構の断面・平面・遺物の出土状況等を状況により、遠近間の写真撮影を行った。調査終了前には、セスナ機による空中写真撮影を行った。

2. 室内整理の方法

(1) 遺物の処理

室内整理は遺物の水洗・注記から開始し、接合・復元の順で進めた。土器・土製品は報告書掲載用のものを選別後、登録作業・実測・拓本・写真撮影・トレースを行い、遺物図版を作成した。石器類は器種毎に登録し、土器類と同様に進めた。

(2) 遺構図面

野外調査で得られた図面類は、平面図、断面図の点検・標高値の確認等を行い必要に応じて合成した。その後トレース・遺構図版作成の順に進めた。

(3) 図版について

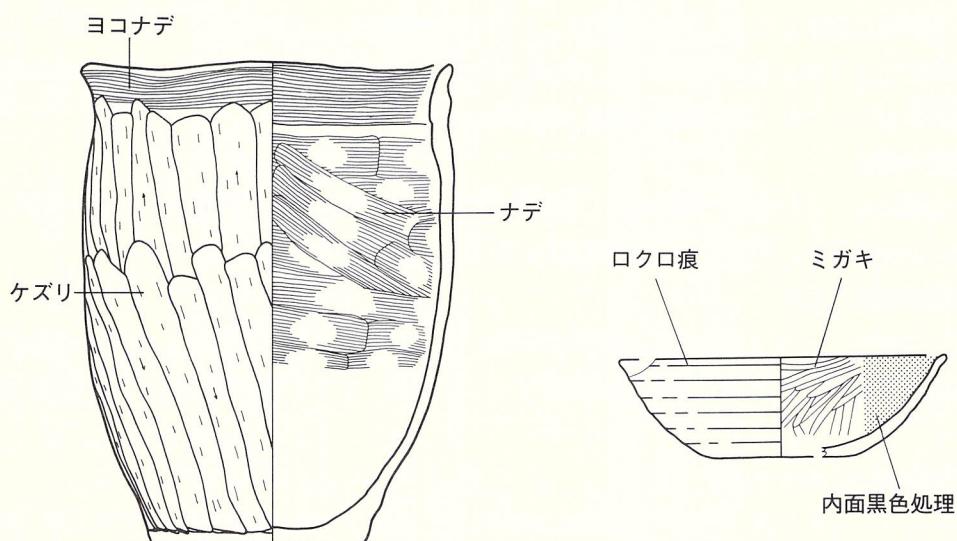
遺構図版は遺構の種類毎に掲載した。縮尺は平面図は原則として1:40としている。断面図は遺構の特徴により20分の1・40分の1としている。図版にはそれぞれにスケールを付している。方位は座標北を示している。

遺物図版は、遺構から出土した遺物については遺構ごと、遺構外からの出土遺物は分類基準によってまとめて掲載した。縮尺は土器実測図、拓影図、3分の1・石器は2分1で、各図版内にそれぞれのスケールを付している。遺構・遺物図版に使用したスクリーントーンについては下図の凡例として示してある。

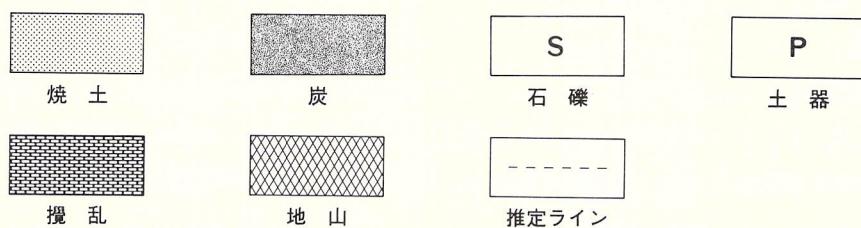
(4) 遺物写真図版について

遺物写真図版の縮尺は、土器は約3分の1・石器は約2分の1を原則としている。

遺物凡例



遺構凡例



第8図 凡例図

IV 検出された遺構と遺物

検出された遺構は縄文時代後期の竪穴住居跡4棟（3～6号）、平安時代の竪穴住居跡5棟（1、2、7～8号）土坑9基である。

遺構名の番号は順不同で、縄文時代の竪穴住居跡・平安時代の竪穴住居跡の順に記載した。

1. 縄文時代の竪穴住居跡と出土遺物

3号竪穴住居跡 遺構（第9図） 写真図版（3） 遺物（第30図）

（位置） II F1b グリッドに位置する。

（検出・精査状況） I層（耕作土）除去後、II層上面で石囲炉を検出した。壁を確認するために更に検出作業を行い、南側に若干の壁を確認した。炉の周辺部で縄文土器が出土。

（規模・形態） 削平により南側の壁がわずかに残存するのみで、平面形・規模についての詳細は不明である。残存する壁高は3～7.6cmである。

（床面） 概ね平坦で硬い床面を呈する。

（炉） 石囲炉である。石囲炉本体は若干の破損を受けていたため炉南側に礫が存在しなかった。炉に構築された石は西側に傾いているが、耕作時等の破損によるものと思われる。周辺で検出された石囲炉と考え合わせると、大小7個以上の平たい石を立てて構築されていたと考えられる。形状はほぼ方形で、規模は80cm×58cmである。炉を構築する際の掘り方が認められる。炉内には厚さ約7cmの焼土が形成されていた。

（埋土） 耕作による攪乱を受けていたため不明。

（土坑） 石囲炉周辺で土坑を2基検出した。1号土坑は炉検出時に確認された。炉の南東側に位置する。平面形は不整な小判形を呈し、断面形は皿状を呈する。規模は径116×80cmで検出面からの深さは約17cmである。土坑底面に2つの礫が確認された。本住居に伴うと考えられるが、性格については不明である。2号土坑は床面を確認した後、柱穴等の遺構・縄文時代早期の遺物が出土する可能性があることから、床面を掘り下げた段階で検出された。位置は炉の南側に隣接し、形状は平面形は卵形状・断面形は逆台形状である。規模は径103×67cm、検出面からの深さは33cmである。検出状況から炉構築以前の土坑と考えられる。本住居に伴わない可能性がある。

（柱穴） 埋土は黒褐色土の単層からなる。断面観察からは柱痕跡は確認できなかった。住居跡に伴うかどうかは不明である。

（出土遺物） 炉内から縄文地に沈線が施される波状の口縁部片（1）、炉周辺から粗製土器の口縁部片が出土した（2）。

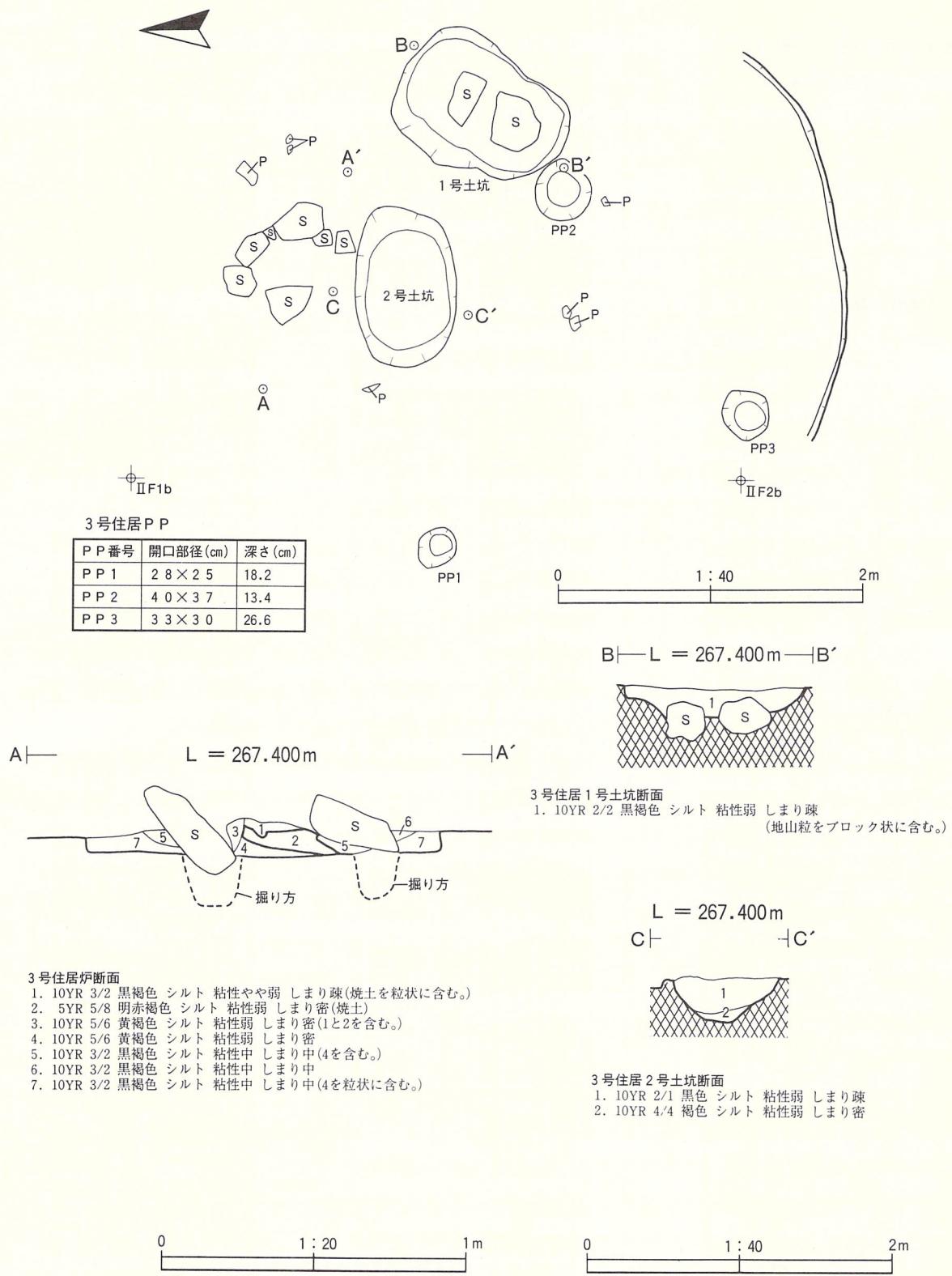
（時期） 縄文時代後期と思われる。

4号竪穴住居跡 遺構（第10図） 写真図版（4・5） 遺物（第30図）

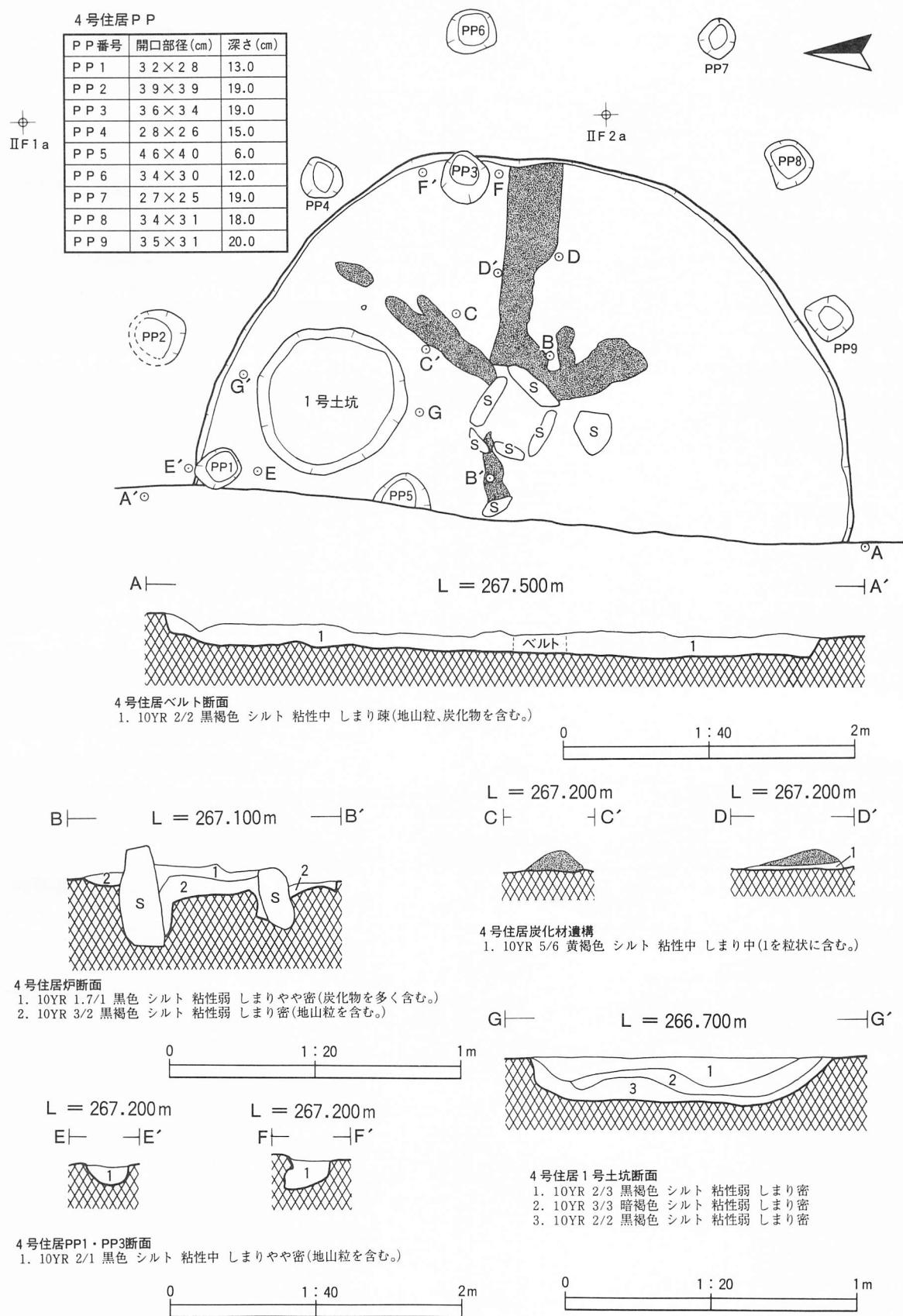
（位置） I F1e グリッドに位置し、6号竪穴住居跡北側に隣接する。

（検出・精査状況） I層（耕作土）を除去後、II層上面で検出した。

（規模・形態） 調査区境界で確認したため、平面形・規模についての詳細は不明であるが、調査区内に現存する半円形の形状から推定しておそらくほぼ円形を呈すると思われる。規模は、計測可能な部分で東西軸2.47m、南北軸4.5mである。壁は削平により、残存状況は良好でない。残存していた壁高は3～12cmである。



第9図 3号竪穴住跡



第10図 4号竪穴住居跡

(床面) III・IV層を床面とする。ほぼ平坦でかたく締まる。

(炉) 石囲炉である。床面から約16cm掘り込み大小5個の平たい礫を縦に埋め込んで構築されている。形状はほぼ方形である。規模は径55×53cmである。明確な焼土は形成されていなかったが、炭化物を含む黒色土が約8cmの厚さで形成されていた。炉構築時の掘り方も確認された。

(埋土) 炭化物を含む黒褐色土の単層からなる。

(土坑) 住居内北側で土坑を1基検出した。平面形は、ほぼ円形で断面形は皿形である。規模は径102×100cm、検出面からの深さ約15cmである。

(柱穴) 住居内及び壁周辺に10基の柱穴状ピットが検出された。住居内にあるピットは壁際に、壁の外は住居を囲む形状で検出された。埋土は黒色土の単層からなる。断面観察から柱痕跡は確認されなかったが、住居に伴う可能性が考えられる。

(炭化材) 床面に放射状に炭化材が横たわっていた。この炭化材は樹種同定により栗の木と鑑定され柱材の可能性がある。焼失住居の可能性が考えられる。

(出土遺物) 遺物の出土量は小型土器の底部が1点出土(4)。

(時期) 縄文時代後期と思われる。

5号竪穴住居跡 遺構 (第11図) 写真図版 (5・6) 遺物 (第30図)

(位置) II D5d グリッドに位置する。

(検出・精査状況) I層(耕作土)を除去後、II層上面で検出した。石囲炉のみの検出である。

(規模・形態) 村道建設・耕作時における削平により、壁が消失しているため不明である。炉の形態から4号竪穴住居跡と類似することから、平面形は円形を呈すると推定される。

(床面) 削平を受けているため詳細については不明である。

(炉) 石囲炉である。大小6個の平たい礫を床面から13cm程掘り込んで縦に埋め構築されている。平面形は、ほぼ方形である。規模は径60×51cmである。炉内には厚さ約4cmの焼土が形成されていた。

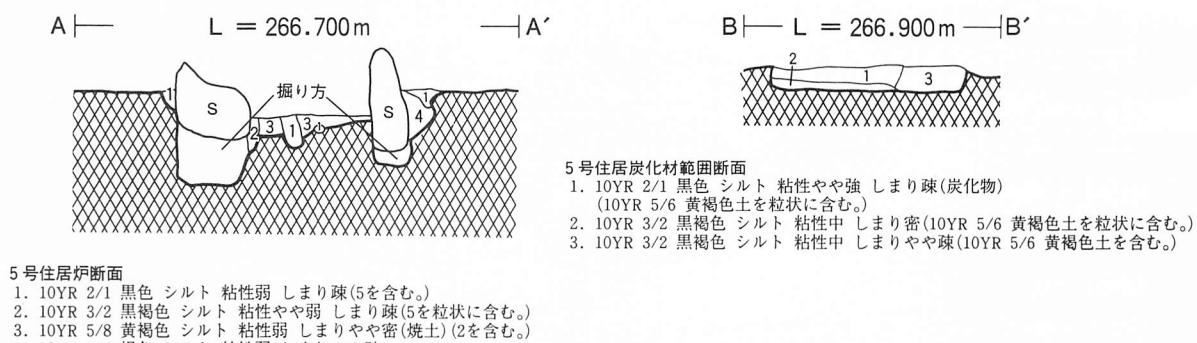
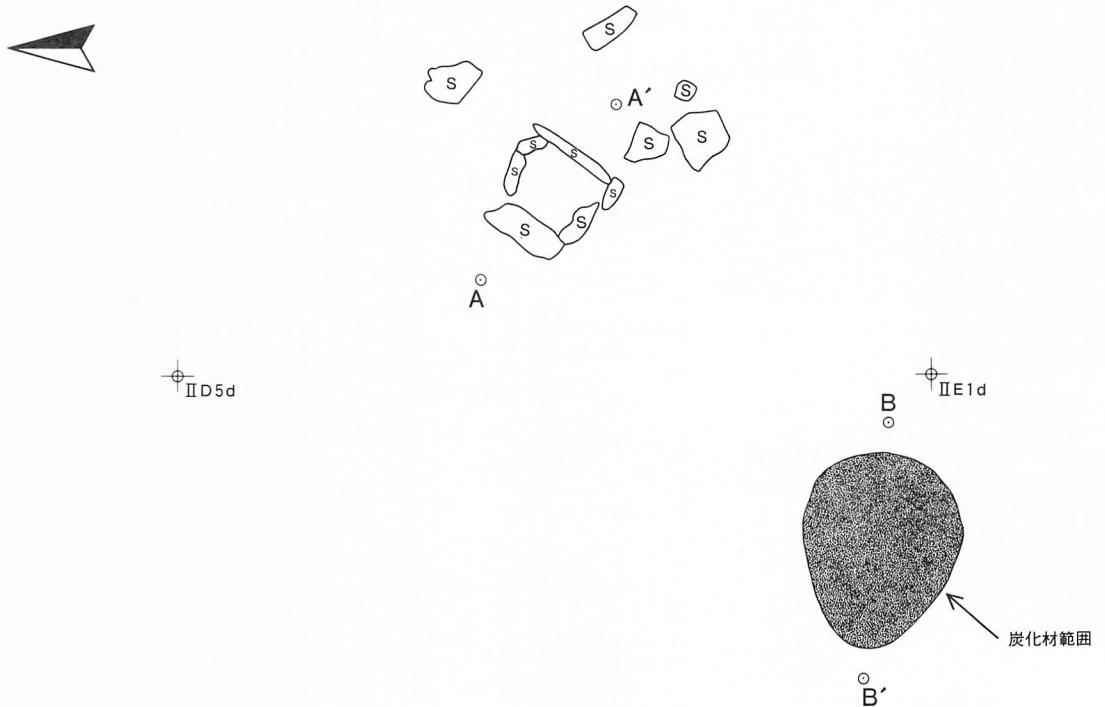
(埋土) 不明。

(柱穴) 検出されなかった。

(その他) 本遺構に伴うかどうか不明であるが、石囲炉から南西約2.5mの位置で炭化材が集中する範囲を確認した。検出面はII層上面である。形状は、ほぼ楕円形で規模は径85×69cmである。炭化物の厚さは9cmである。

(出土遺物) 縄文地に沈線・磨消縄文が施される土器片(5)、石囲炉内から撚糸文が施される土器片が出土(6)。

(時期) 縄文時代後期と思われる。



0 1 : 20 1 m

0 1 : 40 2 m

第11図 5号竖穴住居跡

6号竪穴住居跡 遺構（第12図）写真図版（6・7）遺物（第30図）

(位置) II F 2 e グリッドに位置し、4号竪穴住居跡の南側に隣接する。

(検出・精査状況) I層（耕作土）を除去後、II層上面で検出された。電柱構築時における攪乱により、床・壁の残存状況は良好でなかった。

(規模・形態) 攪乱により、平面形・規模についての詳細は不明であるが、平面形は、円形と思われる。規模については、計測可能な部分で南北軸3.4mである。残存していた壁高は4～12.4cmである。

(床面) 攪乱により凹凸する部分があり、詳細については不明である。

(炉) 攪乱により残存状況は良くないが周辺の炉と考え合わせると石囲炉と思われる。焼土は微量に形成されていた。炉内部と思われる部分では約5cmの厚さで炭化物を含む黒色土が形成されていた。

(埋土) 黒褐色土を主体とする。

(柱穴) 検出されなかった。

(出土遺物) 小型土器(7)・深鉢の胴部破片(8)が出土。

(時期) 繩文時代後期と思われる。

2. 住居状遺構

1号住居状遺構 遺構（第12図）写真図版（7）

(位置) I E 5 e グリッドに位置する。

(検出・精査状況) I層（耕作土）除去後、II層上面で検出した。

(規模・形態) 遺構は調査区境界面に接するため詳細については不明である。形状は4号住居と考え合わせると円形を呈すると推測される。規模については計測可能な部分で、南北軸2.37m、東西軸0.73mである。遺構中央部で加熱を受けた礫が埋土上面で確認された。

(壁) 直立ぎみに外傾して立ち上がる。壁高は10～13cmである。

(床面) ほぼ平坦でかたく締まる。

(埋土) 黒褐色土を主体とする。

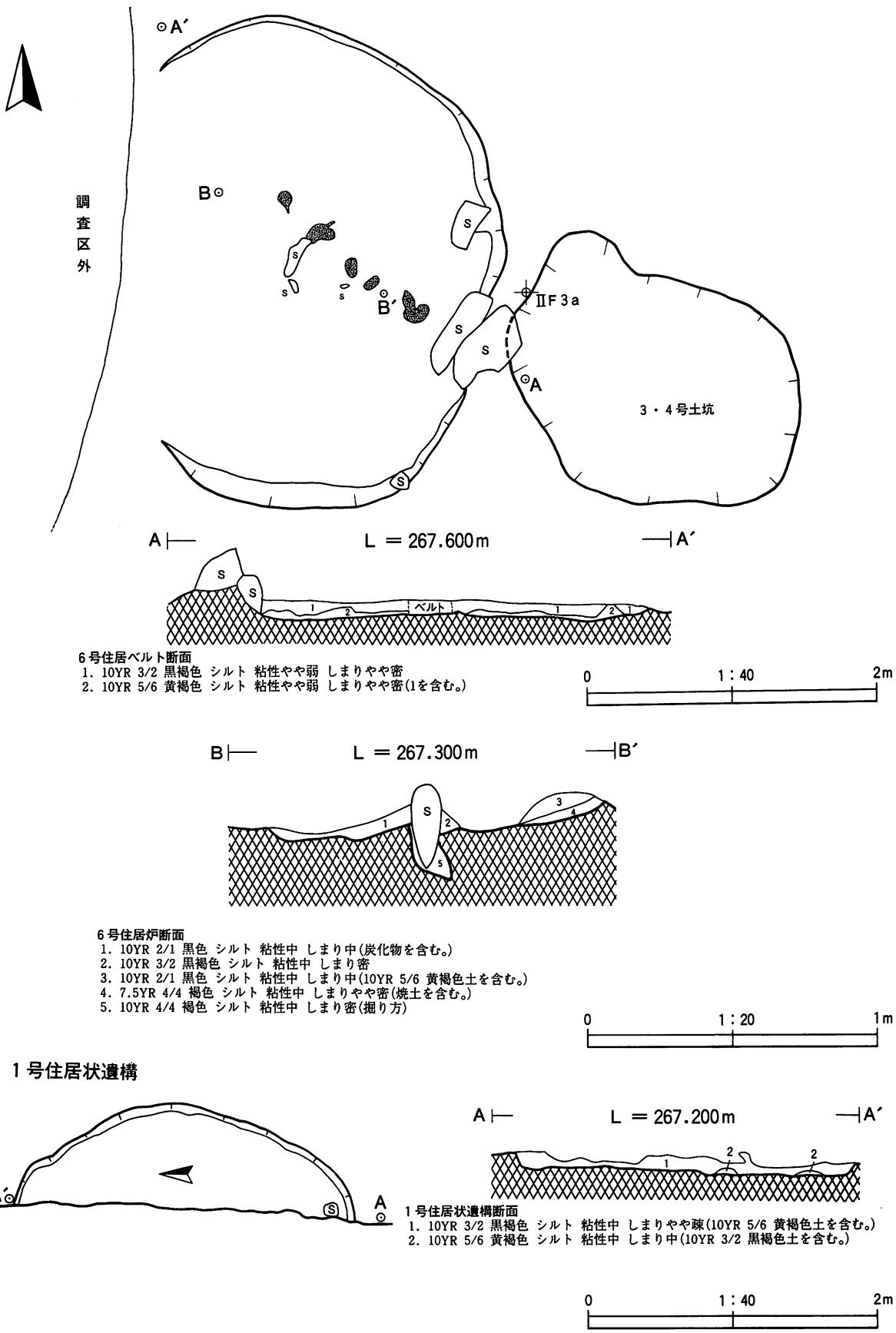
(土坑) 検出されなかった。

(柱穴) 検出されなかった。

(出土遺物) なし。

(遺構について) 調査区境界で検出されたため、炉の検出が出来なかつたが、周辺の遺構と考え合わせると竪穴住居跡の可能性は高いと考えている。

(時期) 検出面と周辺の遺構との関係から縄文時代後期と思われる。



第12図 6号竪穴住居跡・1号住居状遺構

3. 平安時代の竪穴住居跡と出土遺物

1号竪穴住居跡 遺構（第13・14・15図）写真図版（8・9）遺物（第30図 9～13）

（位置） II D2 b グリッドに位置する。

（検出・精査状況） I層（耕作土）除去後、II層上面で検出した。精査時に、住居中央部で不整形な焼土が確認された。

（規模・形状） 西辺3.29m、北辺3.20m、東辺3.32m、南辺3.32m、平面形はほぼ正方形を呈する。

（壁） IV層を壁とする。ほぼ直立ぎみに外傾する。壁高は18～38.3cmである。

（床面） IV層を床とする。床面は平坦でかたくしまる。ほぼ全面に貼床が施されている。

（カマド） 1基確認された。西壁中央部からやや南寄りに構築されている。本体は平たい礫を立てて袖部としている。燃焼部は焼土が約3cmの厚さで形成され、炭化物も散在する。規模は径100×80cmである。煙道は刳貫式で床面から約10度の下り勾配で緩やかに下る。燃焼部から煙出し孔の長さは約1.5mである。煙出し孔径は33×30cmのほぼ円形で底面までの深さは約50cmである。大小3個の石が入っていた。

（埋土） 黒色土・黒褐色土の2層からなる。

（土坑） 燃焼部下面で1基検出した。土坑は床面の南西隅に位置し、形状は平面形・断面形共に不整である。規模は南北軸約50cm東西軸約170cmで深さは約20cmである。西端に大小5個の石が入っていた。土坑が掘られた時期は、検出状況から、燃焼部使用以前の土坑と考えられる。

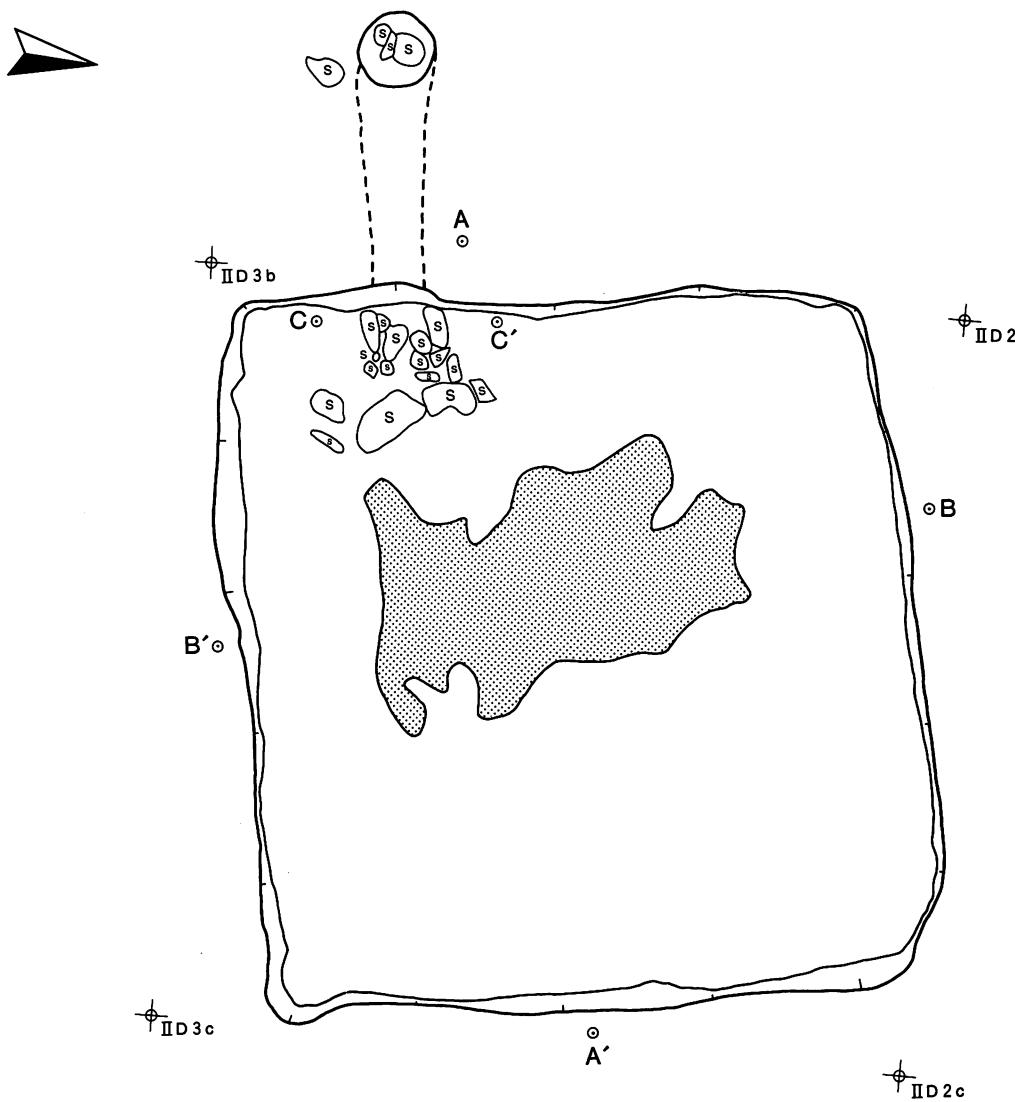
（柱穴） 検出されなかった。

（焼土） ベルトを設定して掘り下げる段階で確認した。平面形は不整形で規模は、南北軸約2.0m、東西軸約1.0mである。土層断面の観察から竪穴住居跡が廃棄された後、ある程度土が埋まった時点で形成された焼土である。2号竪穴住居跡・8号竪穴住居跡に比べると焼成は良好ではない。

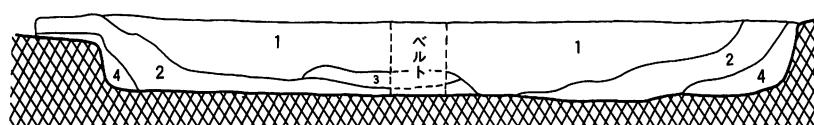
（出土遺物）

出土遺物はカマドからの出土で、土師器の甕の口縁部が4点、底部1点と煙道部から縄文土器が1点出土している。他の竪穴住居跡に比べ土器の出土量は極めて少ない。内外面共にヘラナデによる調整が施されている。

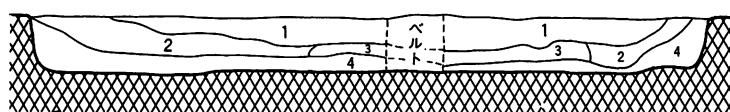
（時期） 平安時代



A | — L = 266.500m — | A'



B | — L = 266.500m — | B'



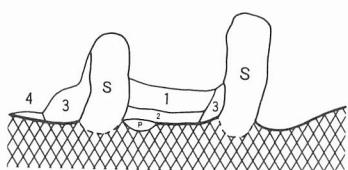
1号住居ベルト・焼土断面

1. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性中 しまり疎
2. 10YR 3/2 黒色 シルト 粘性中 しまり疎
3. 10YR 3/3 暗褐色 シルト 粘性中 しまりやや密
(焼土塊・焼土粒を多く含む。)
4. 10YR 4/6 褐色 シルト 粘性中 しまり疎
(黒褐色土粒を含む。)

0 1 : 40 2m

第13図 1号竖穴住居跡 (1)

C | — L = 266.200m — | C'

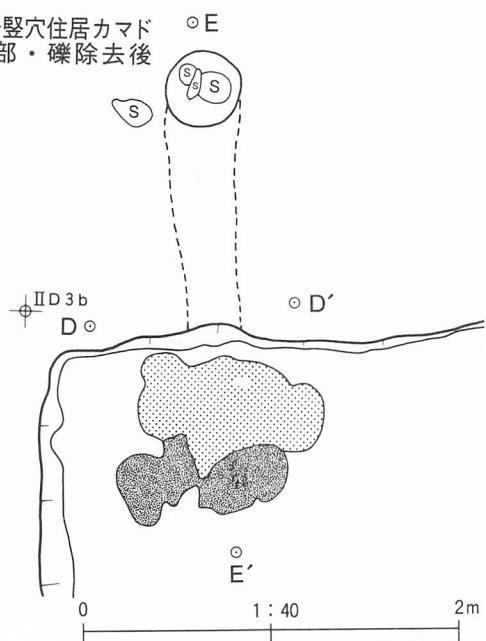


1号住居カマド埋土断面

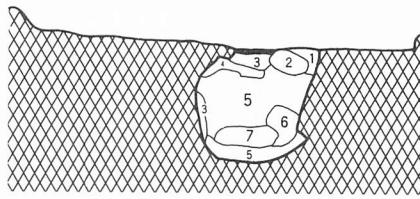
1. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性やや弱 しまりやや疎
(10YR 3/3 暗褐色 焼土、10YR 5/6 黄褐色土粒を含む。炭化物を多く含む。)
2. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト 粘性弱 しまりやや疎
3. 10YR 5/4 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性やや強 しまり密
(黒褐色土粒を少量含む。カマドの石を補強した土と思われる。)
4. 10YR 5/6 黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまり密(地山の明るい層)

0 1 : 20 1m

1号豊穴住居カマド袖部・礫除去後



D | — L = 266.400m — | D'

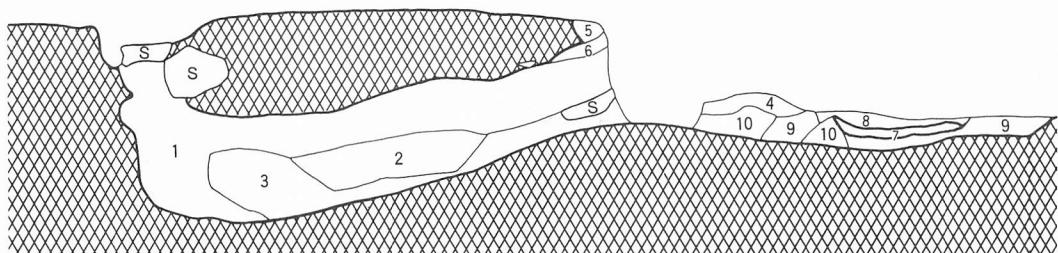


1号住居煙道断面

1. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎
2. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎(7.5YR 5/6 明褐色土粒を含む。)
3. 10YR 2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎
4. 5YR 4/8 赤褐色 シルト 粘性弱 しまり疎(焼土)
5. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎(地山粒、炭化物、焼土粒を含む。)
6. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎
(地山粒を多く含む。煙道の壁が崩れたものと思われる。)
7. 5YR 4/8 赤褐色 シルト 粘性弱 しまり疎
(地山粒、黒褐色土粒、炭火物を含む。)

0 1 : 20 1m

E | — L = 260.240m — | E'



1号住居煙道・煙出し・燃焼部断面

1. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎
(煙道崩落土、10YR 6/5 黄褐色土 地山)(炭化物を含む。)
2. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎(2より崩落土を多く含む。30%)
3. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎(3より崩落土を多く含む。50%)
4. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎(焼土粒を含む。)
5. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり疎
6. 5YR 5/8 明赤褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり密(地山、煙道部壁に加熱)
7. 5YR 4/8 赤褐色 シルト 粘性弱 しまり疎
8. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎(焼土、炭化物を多く含む。)
9. 10YR 6/8 明黄褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり密(地山)
10. 10YR 6/6 明黄褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり密(炭化物、焼土を含む。)

0 1 : 20 1m

第14図 1号豊穴住居跡 (2)

2号竪穴住居跡 遺構（第15～18図）写真図版（9～11）遺物（第30～32図）

（位置） II E 2 b・3 b グリッドに位置する。

（検出・精査状況） I層（耕作土）除去後、II層上面で黒色土の方形のプラン内に焼土粒・炭化物を確認した。十字にベルトを設定し4区画に分けて掘り下げていく段階で焼土塊・炭化物・炭化材を確認し、焼失住居と考え、焼土塊・炭化物・炭化材の範囲の図面作成後、床面まで掘り下げ精査を行った。

（規模・形状） 東辺4.55m、北辺3.76m、西辺4.07m、南辺3.84mのほぼ正方形を呈する。床面積は約16.5m²である。

（壁） IV層を壁とする。ほぼ直立ぎみに外傾する。壁高は14～39cmで西壁は他の壁より高い。西壁が他の壁より高いのは、当時の地形が西方から東方に下る地形であったことからであろう。

（床面） IV層を床とする。床面は平坦でかたく締まる。床中央部はIV層を床とし、壁周辺部は貼り床が施されている。

（カマド） 新旧2基のカマドが検出された。新しいカマドを1号カマド、古いカマドを2号カマドと称す。1号カマドは東壁中央部から南寄りに構築されている。カマド本体は、南側袖部が平たい礫を縦に埋め込んで袖部としている。北側袖部は礫によって構築されたものと思われるが、明瞭な状態では検出されなかつた。燃焼部の規模は径0.75×0.8m、厚さ約10cmで形成されていた。焼成は良好である。煙道は削平により詳細については不明であるが、約10度の上り勾配であることから、他の下り勾配の煙道とは形態が異なる。燃焼部から煙出し部までの長さは約2.0mである。

2号カマドは、西壁やや南寄りに構築されている。カマド本体は消失している。燃焼部の規模は径0.7×0.8mである。焼土は不整形で径80cm×73cmである。煙道部は、剝貫式で床面より約10度の下り勾配である。燃焼部から煙出孔までの長さは137cmである。煙出孔径は53×49cmである。

（埋土） 黒色土と黒褐色土の2層からなる。

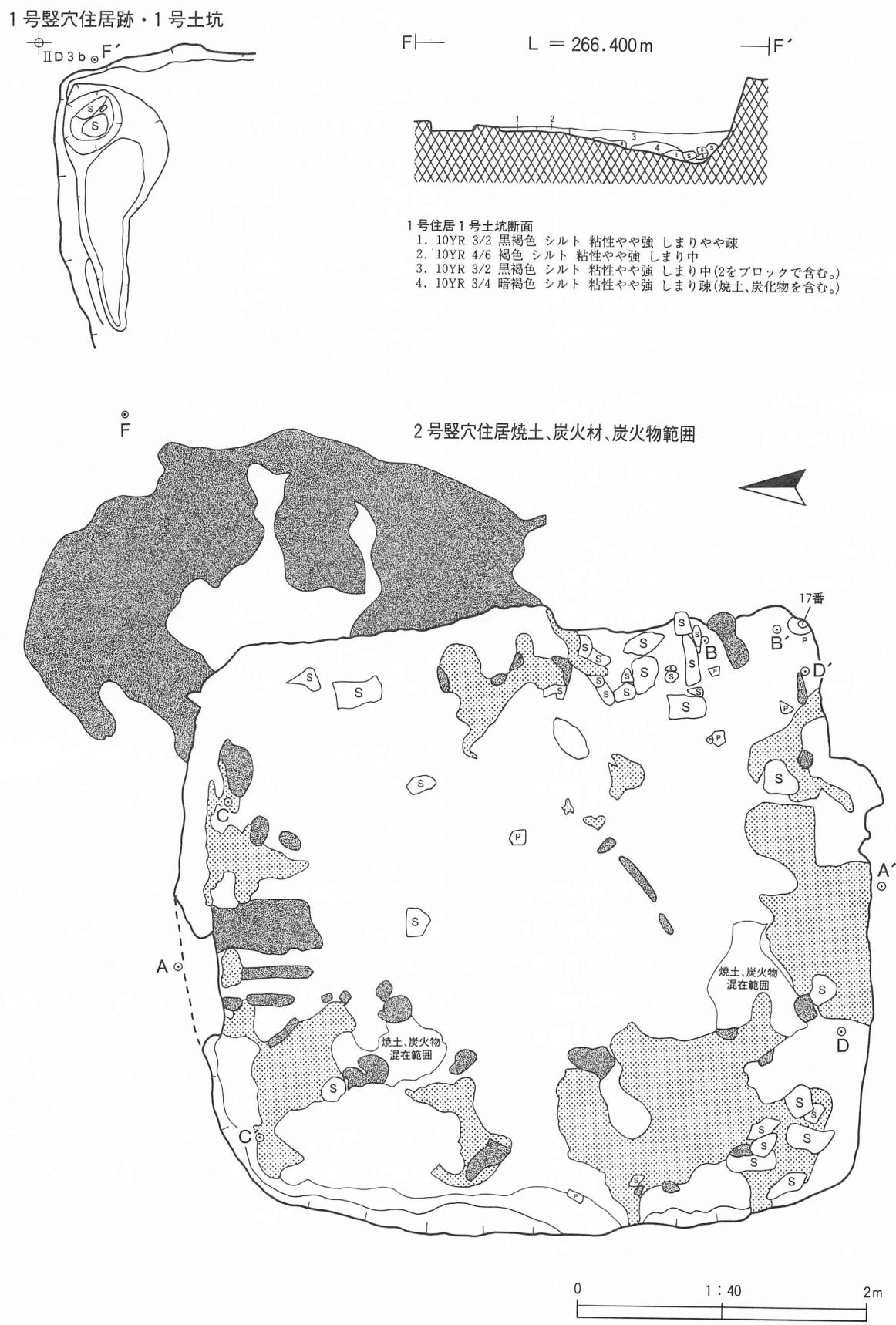
（土坑） 2基検出した。床面南西隅の土坑を1号土坑、北東隅の土坑を2号土坑と称す。共に形状は、不整な楕円形を呈す。規模は1号土坑が径78×73cm深さ16.8cmを測る。2号土坑は、規模は、径123×99cm深さ25cmを測る。

（柱穴） 検出されなかった。

（焼土・炭化物・炭化材） ベルトを設定して掘り下げる段階で確認した。住居壁際に散乱して検出された。焼土・炭化材の範囲と焼土と炭化物が混在している部分がある。北壁に垂直に3本ほど平行に横たわっている炭化材が確認された。大きさはそれぞれ50×8cm、38×8cm、20×4cmで樹種は栗の木である。住居外北東には炭化物がおよそ径3.5×1.5mの範囲で検出された。当時の地形が西方から東方に下がる地形と推測できることから、火災の際北東方向に家屋が倒れた可能性も考えられる。

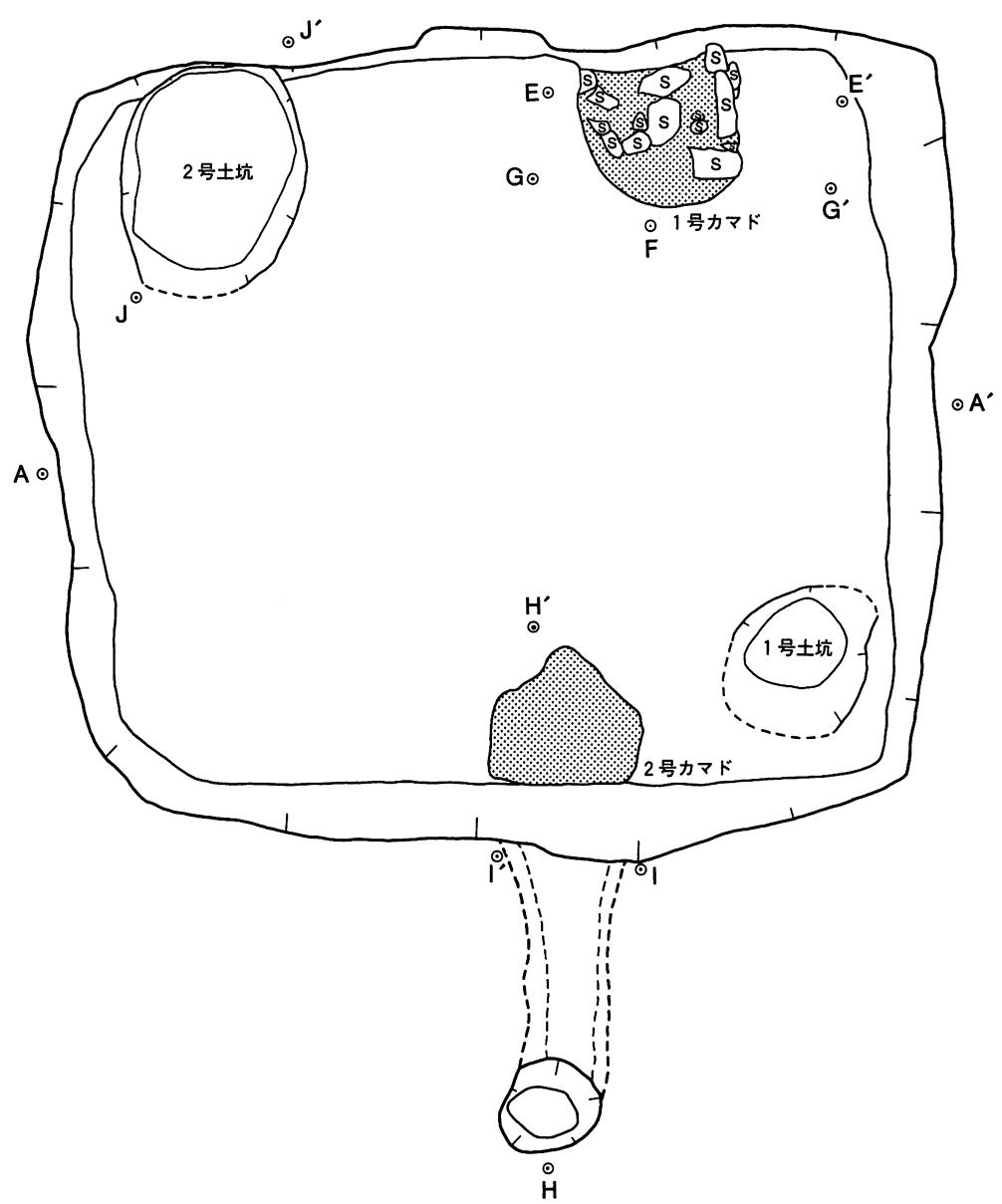
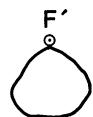
（出土遺物） 出土した遺物の重量は2,300g（不掲載遺物含）である。1号カマド本体・床面からの出土が大半を占める。本遺跡の平安時代の竪穴住居跡の中で遺物の出土量がもっとも多い。種別・器種は土師器の甕が大半を占める。壺は5点出土している。縄文時代早期の土器が出土している。28は1号カマド燃焼部の下。36は床面の貼り床から37は埋土上面から出土。出土状況・器面に摩滅が著しいことから流れ込みによると思われる。それぞれ縄文時代早期中葉に位置づけられる土器と思われる。

（時期） 出土遺物から10世紀後半に位置づけられる。



第15図 1号竪穴住居跡（3）。2号竪穴住居跡（1）

2号竪穴住居



0 1 : 40 2m

第16図 2号竪穴住居跡 (2)

2号住居ベルト断面

A | —

L = 267.100m

—| A'



2号住居ベルト断面(北・南)

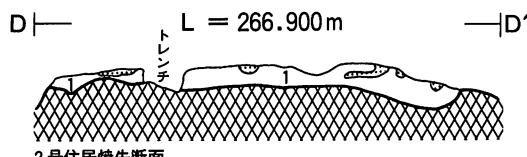
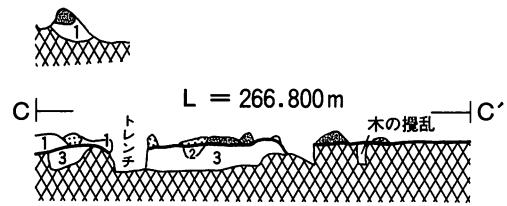
1. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎
2. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり疎(10YR 2/2 黒褐色土を含む。)
3. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎(焼土粒、炭化物を含む。)
4. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎(地山粒、焼土粒を含む。)

0 1 : 40 2m

2号住居焼失断面

L = 266.900m

B | — B'



2号住居焼失断面

1. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや疎
2. 10YR 6/6 明黄褐色 粘土質シルト(地山ブロック)
3. 10YR 3/1 黒褐色 シルト 粘性やや弱 しまりやや密
(地山ブロックを多く含む。貼床)

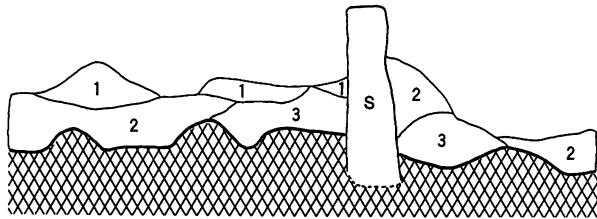
0 1 : 40 2m

2号住居 1号カマド

E | —

L = 267.000m

—| E'



2号住居 1号カマド断面(北・南)

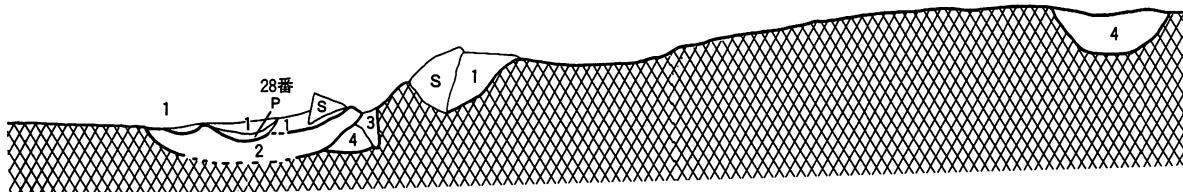
1. 10YR 3/3 暗褐色 シルト 粘性中 しまりやや密
2. 10YR 4/4 褐色 シルト 粘性やや強 しまりやや密(石を補強した土)
3. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密(地山ブロックを多量に含む。)

2号住居 1号カマド

F | —

L = 267.000m

—| F'



2号住居 1号カマド断面(西・東)

1. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中
2. 5YR 5/8 明赤褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密(焼土・燃焼部)
3. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密(地山ブロックを多量に含む。)
4. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまりやや疎(炭化物、地山ブロックを多く含む。)

2号住居 1号カマド燃焼部

G | —

L = 266.700m

—| G'

2号住居 1号カマド燃焼部断面

1. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中
(地山粒、焼土粒、炭化物を含む。)
2. 5YR 5/8 明赤褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密(焼土・燃焼部)

0 1 : 20 1m

第17図 2号竪穴住居跡 (3)

7号竪穴住居跡 遺構（18～20図） 写真図版（11・12） 遺物（第32・33図）

（位置） II F 4 a・5 a グリッドに位置する。9号竪穴住居跡と隣接する。

（検出・精査状況） II層上面で検出した。鶏遺骸（現代）処理による攪乱が著しい。方形のプランとカマドを確認した。

（規模・形状） 東辺4.46m、北辺4.13m、西辺4.87m、南辺4.1m、ほぼ正方形を呈する。床面積は約18.2m²である。

（壁） 直立ぎみにやや外傾する。壁高は11.3～24.4cmで南壁が高い特徴をもつ。

（床面） IV層を壁とする。床面はほぼ平坦でかたく締まる。

（カマド） 3基確認された。部分的に貼床が施される。東壁中央部を1号カマド、東壁中央部からやや北寄りを2号カマド、北壁を3号カマドと称す。新旧関係については、カマドの残存状況から1号カマドが2・3号カマドより新しいと考えられる。2・3号のカマドの新旧関係については不明である。1号カマドの本体については、残存状況が良好でないことから、詳細については不明であるが、精査時に礫が「ハ」の字状にカマドを覆っていた。礫はカマドの天井部・袖部を構成するものであると思われる。礫を除去後土器が燃焼部に残存していた。使用したものを持たままだったのか、また、カマドを構成する土器の可能性が考えられる。土器を除去後、明確な燃焼部と袖部が確認された。粘土質の土を床面より高く盛り上げその上に礫を埋め込んだと推測される。燃焼部の規模は径61～76cm、厚さ約5cmで形成されていた。煙道は攪乱をうけ破壊されている。燃焼部から煙出部の長さは約1.6mである。

2号カマドは、カマド本体は残存していなかったが、燃焼部規模は径53×53cm厚さ5cmの焼土が形成されていた。煙道は床面から約10度の上り勾配である。

3号カマドはカマド本体は残存していなかった煙道は床面から約5度の下り勾配で、長さは110cmである。埋土・煙道部壁部分の燃焼を受けた雰囲気が本遺跡の剖貫式と似通っていることから、剖貫式の可能性があると考えている。2号カマドについては他の1・3号カマドより煙道部が短い。住居の建て替え・拡張の可能性も考えられる。また2号カマドには燃焼部が確認されたが、3号については確認されなかつたことから3号カマド使用時は、検出時の床面より高かった可能性が考えられる。

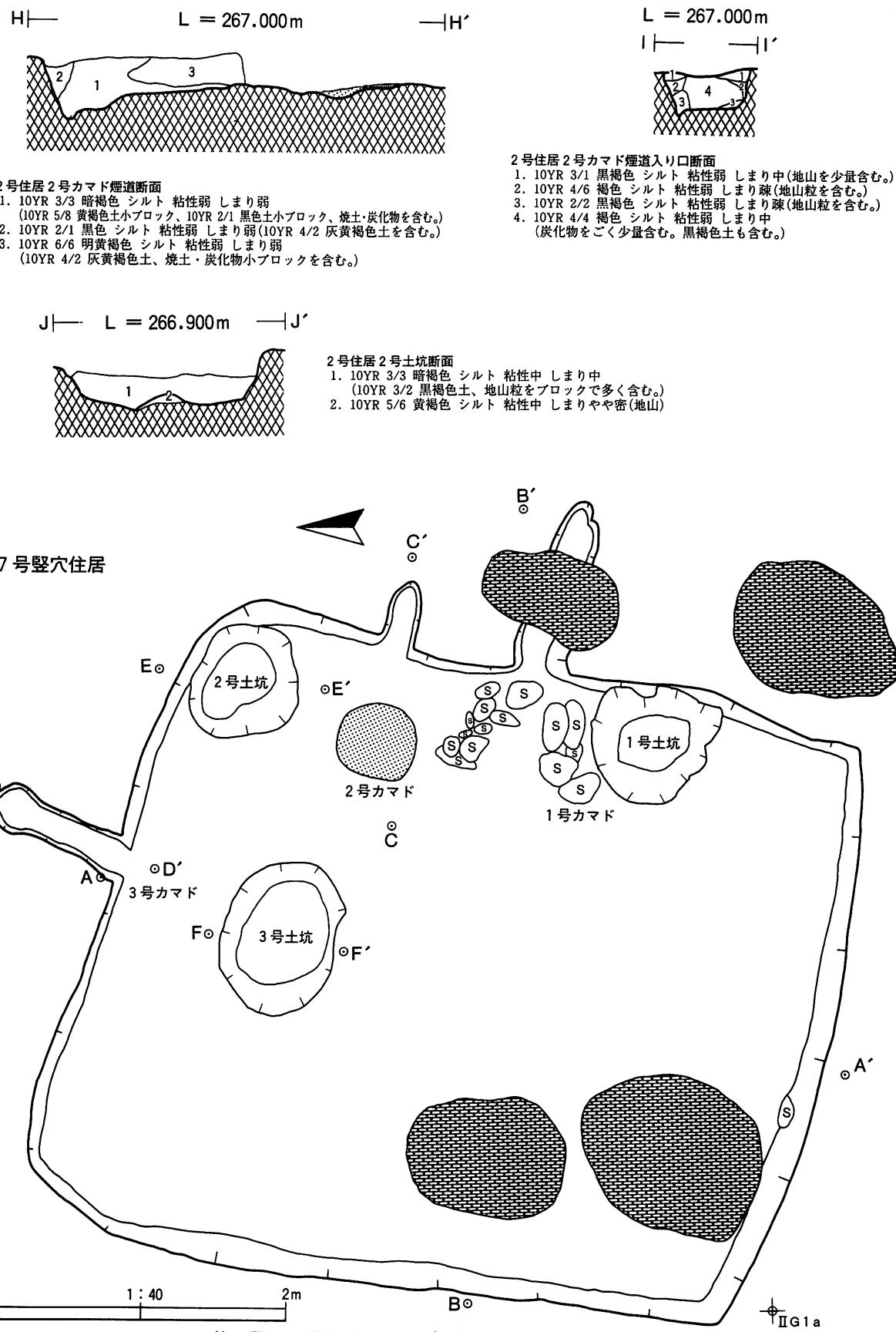
（埋土） 黒色土と黒褐色土の2層からなる。焼土粒と地山粒を含む。

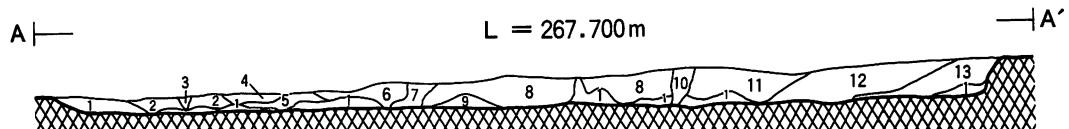
（土坑） 3基検出した。1号カマドの南隣に位置する土坑を1号土坑、壁北東隅の土坑を2号土坑、床面中央部から北寄りの土坑を3号土坑と称す。新旧関係は精査状況から1号土坑が1号カマド構築以前と考えられる。1・2・3号土坑の形状は不整略楕円形で断面は皿形を呈する。規模は1号土坑が径83×80cm深さは16cm、2号土坑が径88×72cm深さは11cmである。3号土坑が径108×76cm深さは15cmである。

（柱穴） 検出されなかった。

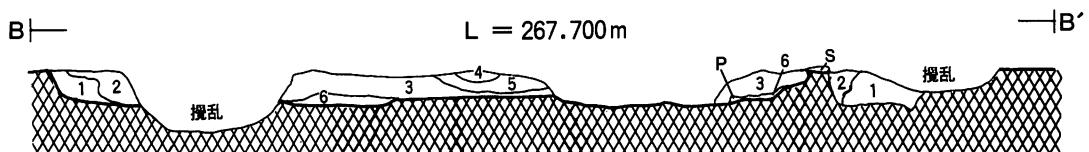
（出土遺物） 遺物出土総量は1,380g（不掲載遺物含）である。1号カマドからの出土がほとんどである。種別・器種は土師器の甕が大半で、坏は46の1点のみで床面から出土している。41は1号カマド礫除去後に燃焼部からの出土である。

（時期） 出土した遺物から10世紀後半に位置づけられる。





- 7号住居ベルト断面(北・南)
1. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり密(10YR 5/6 黄褐色土をブロックで含む。)
 2. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり密
 3. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性中 しまりやや密
 4. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性中 しまり中(炭化物を含む。)
 5. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり密(炭化物を含む。)
 6. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性中 しまり密(10YR 5/6 黄褐色土を少量含む。)
 7. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性中 しまり密(10YR 5/6 黄褐色土を少量含む。)
 8. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性やや強 しまり密
(10YR 5/6 黄褐色土粒、焼土粒を少量含む。)
 9. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまり密(焼土粒を含む。)
 10. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまりやや密(10YR 5/6 黄褐色土を含む。)
 11. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性中 しまり密
(10YR 5/6 黄褐色土を粒状に少量含む。)
 12. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまり密
(10YR 5/6 黄褐色土を粒状に多く含む。10YR 2/1 黑色土を少量含む。)
 13. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまり密
(10YR 5/6 黄褐色土を粒状に少量含む。)

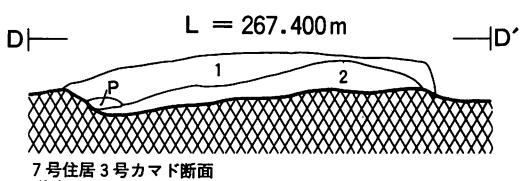


- 7号住居ベルト断面(東・西)
1. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまり密(10YR 5/6 黄褐色土をブロックで含む。)
 2. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性やや弱 しまり密
(10YR 5/6 黄褐色土を粒状に少量含む。)
 3. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性中 しまり密(10YR 5/6 黄褐色土を粒状に少量含む。)
 4. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまり密(10YR 5/6 黄褐色土を多く含む。)
 5. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性中 しまり密
 6. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまりやや密(10YR 5/6 黄褐色土を多く含む。)

0 1 : 40 2m



- 7号住居2号カマド断面
1. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまり中
 2. 5YR 4/2 赤褐色 シルト 粘性弱 しまり密(燃焼部)
 3. 10YR 5/6 黄褐色 シルト 粘性弱 しまり密
 4. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまり密(3を含む。)
 5. 10YR 5/6 黄褐色 シルト 粘性やや弱 しまり密(10YR 3/2 黑褐色土を含む。)



7号住居3号カマド断面
注記不明



- 7号住居3号土坑断面
1. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまりやや密(地山ブロックを含む。)

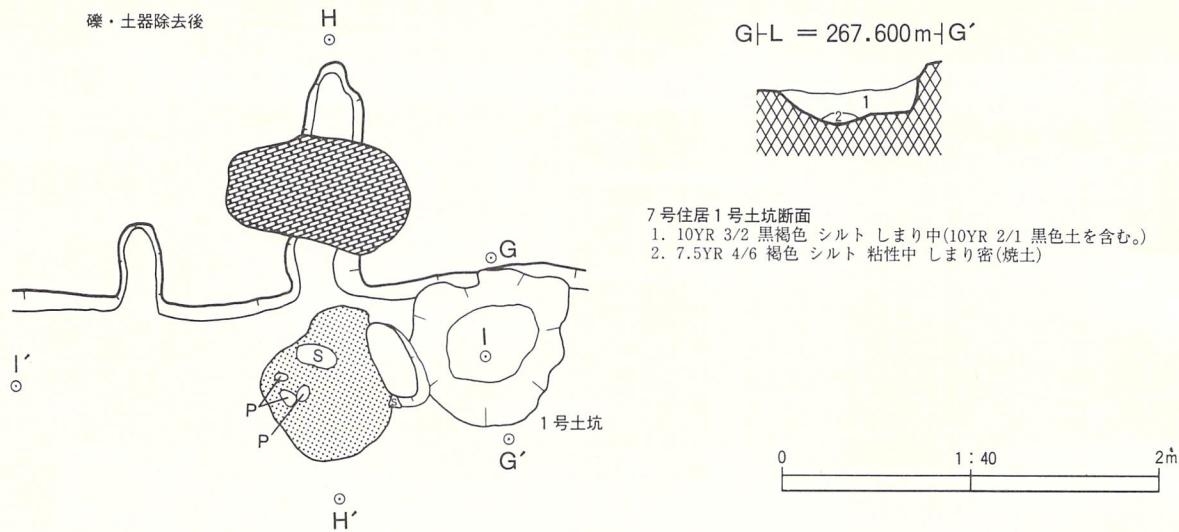
- 7号住居2号土坑断面
1. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性中 しまりやや密(10YR 3/2 黑褐色土を含む。)
 2. 10YR 4/4 褐色 シルト 粘性中 しまり密(10YR 5/6 黄褐色土を含む。)

0 1 : 40 2m

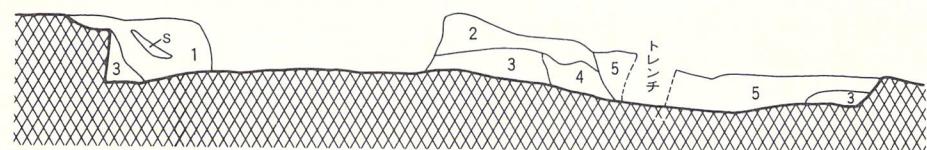


第19図 7号竪穴住居跡 (2)

7号住居 1・2号カマド然焼部

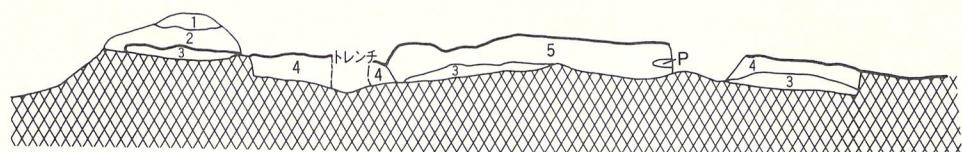


H | — L = 267.400m — | H'



- 7号住居 1号カマド断面
1. 10YR 4/6 褐色 シルト 粘性中 しまりやや密(10YR 3/2 黒褐色土を含む。)
 2. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中(10YR 5/6 黄褐色土を含む。)
 3. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中(7.5YR 3/4 暗褐色土・燒土を含む。)
 4. 10YR 4/4 褐色 シルト 粘性中 しまりやや密(10YR 5/6 黄褐色土を含む。)
 5. 10YR 3/3 暗褐色 シルト 粘性中 しまりやや密 (燃焼部)

I | — L = 267.400m — | I'



- 7号住居 1・2号カマド断面
1. 10YR 4/4 褐色 シルト 粘性弱 しまり密
 2. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり密(地山粒を含む。)
 3. 地山(床面)
 4. 10YR 5/8 黄褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり密(床面・燃焼部)
 5. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中
(地山粒を含む。貼床)

0 1 : 20 1m

第20図 7号竪穴住居跡 (3)

8号竪穴住居跡 遺構（第21～23図）写真図版（13・14）遺物（第33・34図）

（位置） 調査区 I G 4c・5c グリッドに位置する。

（検出・精査状況） I層（耕作土・整地層）を除去後、II層上面で検出した。精査の段階で住居床面に焼土、炭化物が検出された。

（重複関係） 柱穴状ピット・2号土坑が本遺構より新。

（規模・形態） 北辺4.0m、東辺4.15m、南辺3.7m、西辺4.02mのほぼ正方形を呈する。床面積は約16.6m²である。

（壁） IV層を壁とする。直立ぎみにやや外傾する。壁高は11.2～31.4cmで北壁が高い。

（床面） IV層を床とする。床面はほぼ平坦であるが東側がやや高くなる。貼床はほぼ全面に施されている。

（カマド） 1基検出した。北壁ほぼ中央部に構築されていた。検出時カマド上部に数個の礫が確認された。天井石等のカマドに伴う礫と推定される。東側袖部は粘土質の土を床面より高く盛り上げて構成されている。西側袖部は、粘土質の土を床面より盛り上げ、その上に礫をのせ構築されている。燃焼部は焼土が約8cmの厚さで形成されていた。

（埋土） 黒色土と褐色土及び黒褐色土の3層からなる。黒褐色土に炭化物が含まれる。

（土坑） 3基検出した。カマド東隣の土坑を1号土坑、中央より北東寄りの土坑を2号土坑、西壁よりの土坑を3号土坑と称す。1・2・3号土坑の形状は、平面形は橢円形・小判形状を呈し、断面形は皿状を呈する。規模は、1号土坑が径85×58cm、深さ11cm、2号土坑が径29×29cm、深さ18cm、3号土坑が径70×56cm、深さ40.6cmである。

（1号焼土） 1号カマド燃焼部からやや南側に位置する。径は53×60cm厚さは、約5cmで形成された。焼成状態は良好である。

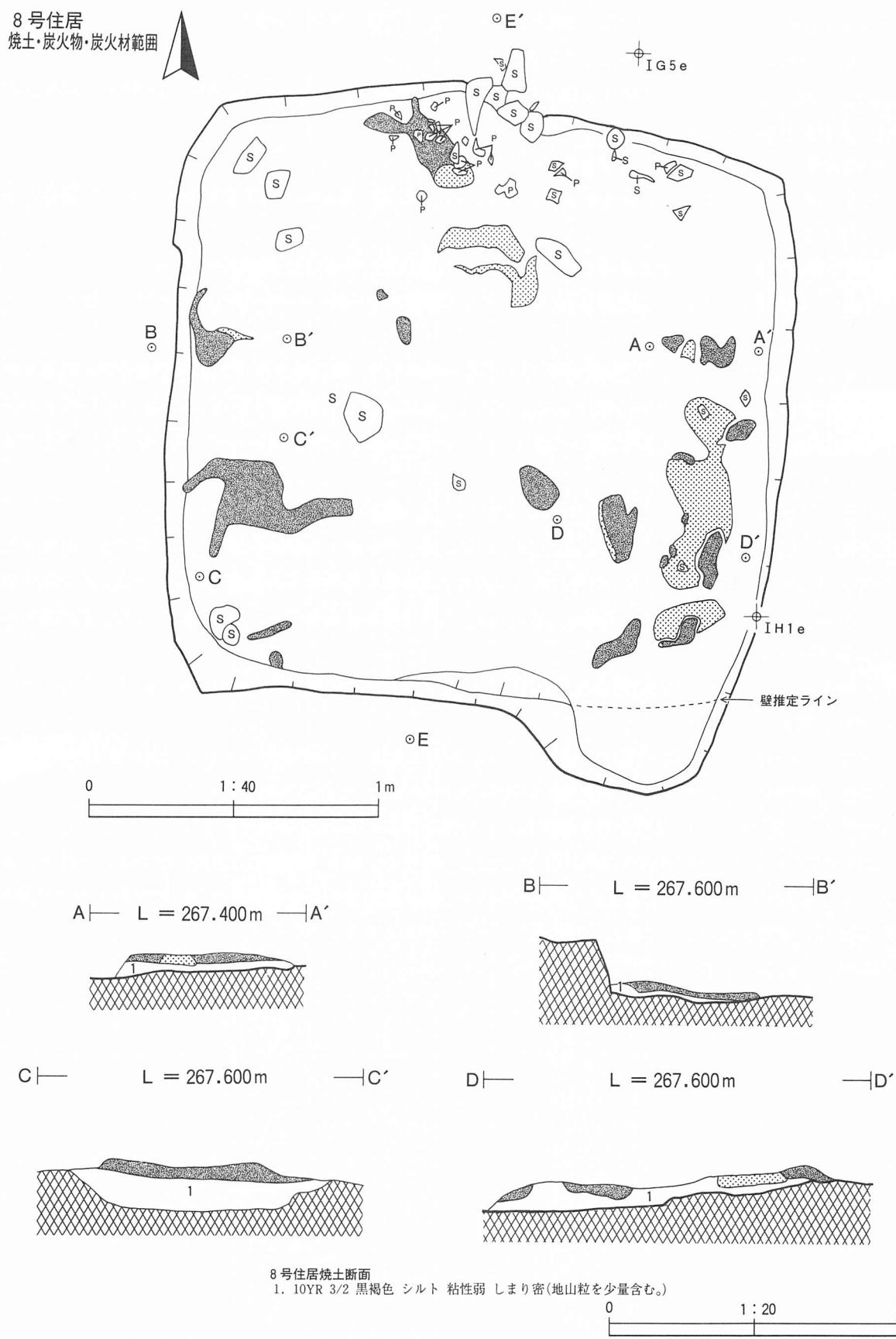
（柱穴） 住居に伴う柱穴は確認されなかった。本遺構より新しい柱穴状ピットが床・燃焼部を切る。

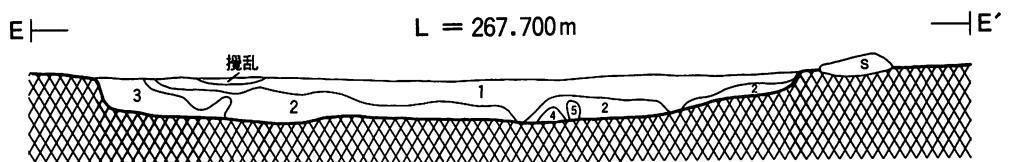
（焼土・炭化物） 住居床壁際に焼土塊・炭化物が検出された。消失住居と思われる。

（壁溝？） 壁周辺を中心に部分的に確認された。明確な掘り方は認められなかった。

（出土遺物） 遺物の出土量は1,340g（不掲載遺物）である。種別・器種は土師器の甕である。カマドからの出土が大半を占める。埋土下位から52の鉄製品が出土した。53の出土遺物は胎土に纖維を含む、縄文時代早期末葉～前期初頭の土器である。流れ込みによると考えられる。

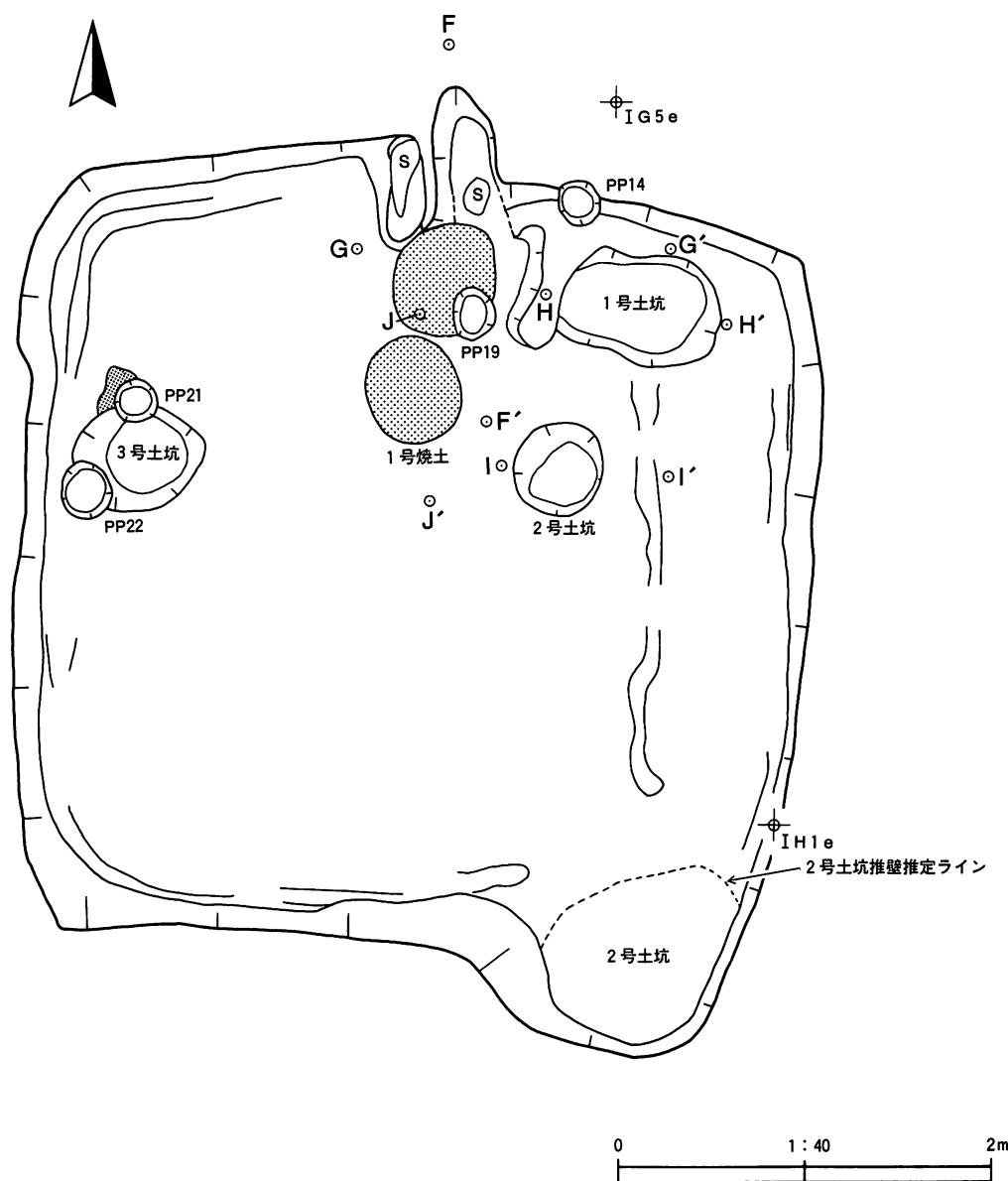
（時期） 出土した遺物から10世紀後半に位置づけられる。





8号住居ベルト断面

1. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性中 しまり中(10YR 5/6 黄褐色土粒をわずかに含む。)
2. 10YR 4/4 褐色 シルト 粘性中 しまり中
(10YR 3/2 黒褐色土を含み、10YR 5/6 黄褐色土粒をわずかに含む。炭化物ブロックを少量含む。)
3. 10YR 3/1 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中
(10YR 5/6 黄褐色土ブロックを含む。炭化物ブロックを少量含む。)
4. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中(炭化物大ブロックを含む。)
5. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性中 しまり中(10YR 5/6 黄褐色土粒を少量含む。)

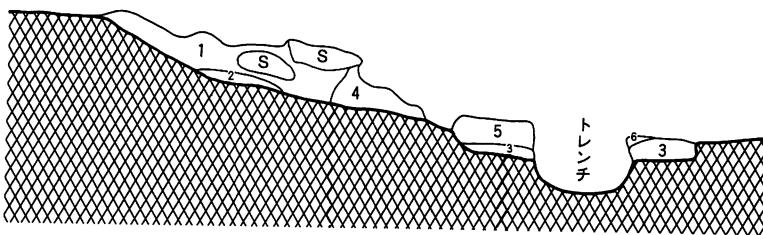


第22図 8号竖穴住居跡 (2)

F|—

L = 267.500m

—|F'



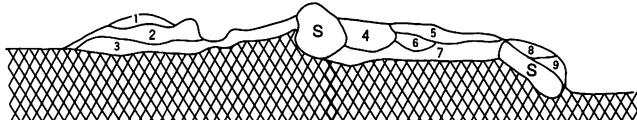
8号住居カマド断面(北・南)

- | | |
|-----------------------------------|--------------------------------------|
| 1. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり密 | 3. 10YR 5/6 黄褐色 シルト 粘性中 しまり密 |
| 2. 5YR 4/4 にぶい赤褐色 シルト 粘性中 しまり密 | 4. 5YR 4/4 にぶい赤褐色 シルト 粘性中 しまり密 |
| (10YR 3/2 黒褐色土、10YR 5/6 黄褐色土を含む。) | (燃焼部) |
| 5. 5YR 5/8 明赤褐色 シルト 粘性中 しまり密 | 6. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり疎(焼土を含む。) |

G|—

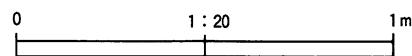
L = 267.000m

—|G'



8号住居カマド断面(西・東)

- | | |
|------------------------------------|--|
| 1. 7.5YR 4/4 褐色 シルト 粘性やや強 しまり中(焼土) | 5. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまりやや疎(炭化物、10YR 2/1 黒色土を含む。) |
| 2. 5YR 4/4 にぶい赤褐色 シルト 粘性中 しまり密(焼土) | 6. 10YR 5/6 黄褐色 シルト 粘性中 しまり密 |
| 3. 10YR 4/6 褐色 シルト 粘性中 しまりやや密 | 7. 10YR 4/6 褐色 シルト 粘性中 しまり密 |
| 4. 10YR 5/4 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 しまり密 | 8. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまりやや疎(10YR 5/6 黄褐色土を含む。) |
| | 9. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまり疎 |

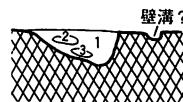


H|—L = 267.500m—|H'



L = 267.400m

|— I —|I'



8号住居2号土坑断面

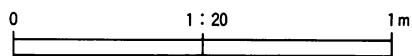
- | |
|---|
| 1. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり中 |
| 2. 焼土粒 |
| 3. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性弱 しまり密(焼土粒、地山粒を含む。) |

J|—L = 267.500m—|J'



8号住居焼土遺構断面

- | |
|---|
| 1. 5YR 4/8 赤褐色 シルト 粘性中 しまりやや密
(10YR 3/4 暗赤色土を上部に含む。) |
| 2. 10YR 4/4 赤褐色 シルト 粘性やや弱 しまりやや密 |



第23図 8号竪穴住居跡(3)

9号竪穴住居跡 遺構（第24・25図）写真図版（15・16）遺物（第34図）

（位置） 調査区ⅡF3bグリッドに位置する。7号竪穴住居跡の北側に隣接する。

（検出・精査状況） Ⅱ層上面で検出した。

（重複関係） 1号土坑が本遺構より新。

（規模・形態） 北辺3.22m、東辺3.45m、南辺3.5m、西辺3.22m平面形はほぼ正方形である。床面積は約11.6m²である。

（壁） Ⅳ層を壁とする。緩やかに外傾する。壁高は6.9～42.1cmで、北壁が高い。

（床面） Ⅳ層を床とする。ほぼ平坦で締まりがある。

（カマド） 3基確認された。住居中央からやや南東寄りのカマドを1号カマド、北壁ほぼ中央部のカマドを2号カマド、西壁やや南寄りのカマドを3号カマドと称す。

カマドの新旧関係は残存状況から1号カマドが2・3号カマドより新しいと考えられる。2・3号カマドの新旧関係については、カマド本体が消失しているため不明である。1号カマドは1号土坑の重複により、煙道部は消失している。位置も推定した壁のラインよりやや西寄りに構築されていた。礫により袖部・天井部を構成していたものと推測される。燃焼部の規模は径40×36cmである。約7cmの厚さで焼土が形成され、焼成も良好である。

2号カマド燃焼部の規模は径63×61cmである。焼土は約12cmの厚さで形成され焼成も良好である。煙道は剖貫式で傾斜は床面から上り勾配である。燃焼部から煙出孔まで底面はほぼ平坦である。長さは約1.7mである。煙出孔開口部径は43×41cmである。

3号カマド燃焼部は焼土が約5cmの厚さで形成され焼成は良好である。煙道は剖貫式で傾斜は床面から上り勾配である。燃焼部から煙出部までの底面はほぼ平坦である。長さは約1.5mである。

（埋土） 鶏遺骸の処理による攪乱が認められるが、概ね黒褐色土を主体とする。

（土坑） 2基検出した。北東隅にある土坑を1号土坑、南西隅にある土坑を2号土坑と称す。

1号土坑の平面形は不整形で、断面形は皿形である。規模は径86×83cm、深さ18cmである。

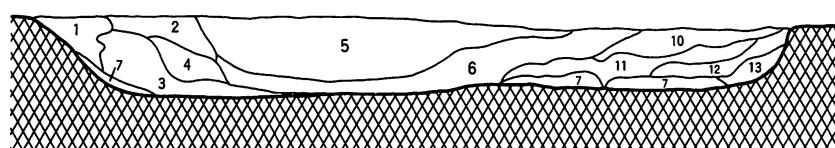
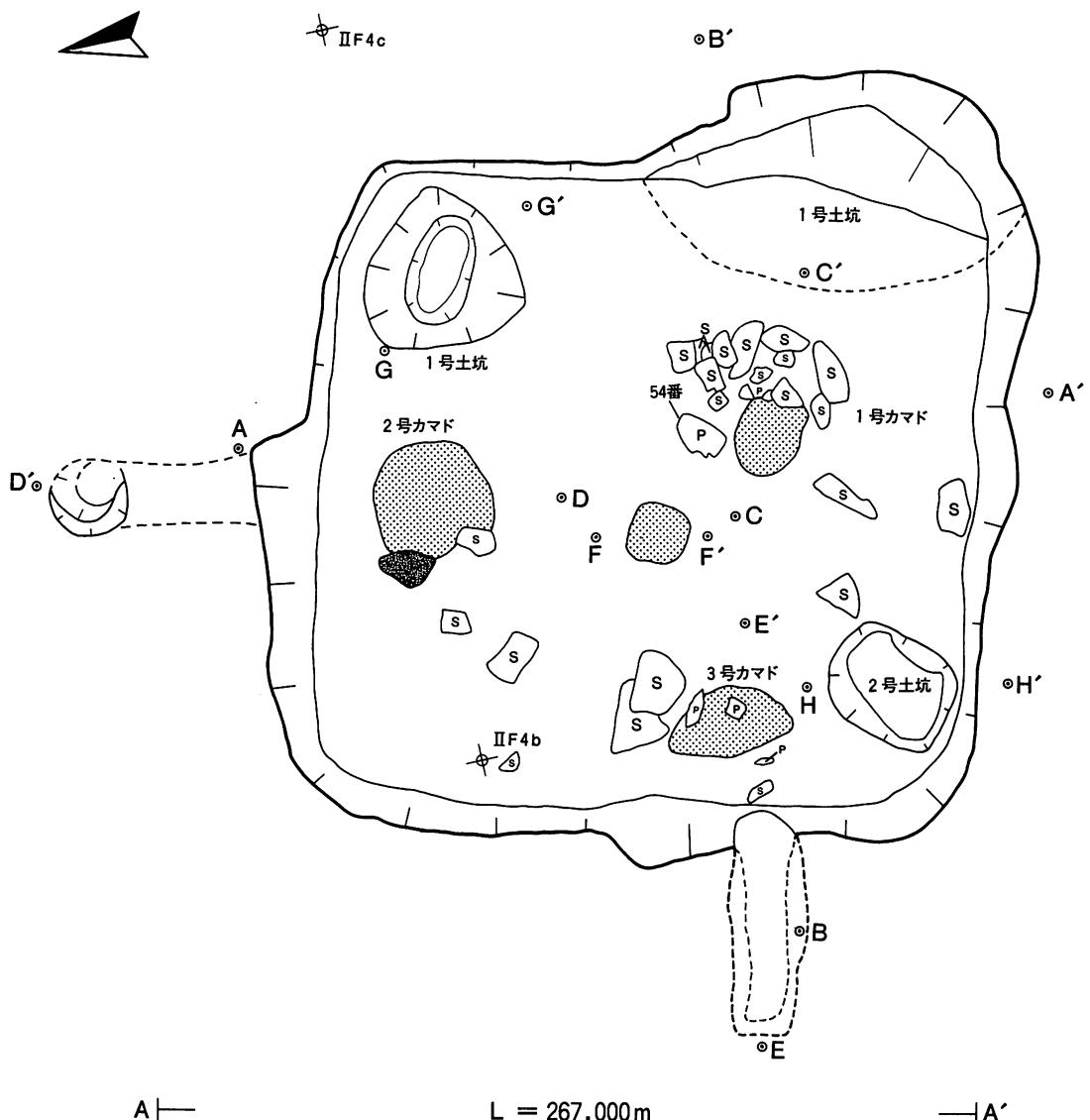
2号土坑の平面形はほぼ橢円形で断面形は不整形である。規模は径67×55cm、深さ26cmである。

（柱穴） 検出されなかった。

（焼土遺構） 住居のはば中央で焼土遺構を検出した。平面形はほぼ方形で規模は径30×30cmである。3cm程の厚さで焼土が形成されていた。焼成はほぼ良好である。

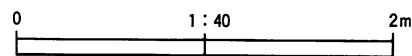
（出土遺物） 遺物の出土量は350g（不掲載遺物）である。種別・器種は土師器の甕が出土した。出土量は他の竪穴住居跡に比べ少ない。54は1号カマドに近接して出土した土器である。57は縄文時代後期初頭～前葉の土器である。58は竪穴住居跡内1号土坑から出土した。57・58は流れ込みと考えられる。

（時代） 出土した遺物から10世紀後半に位置づけられる。

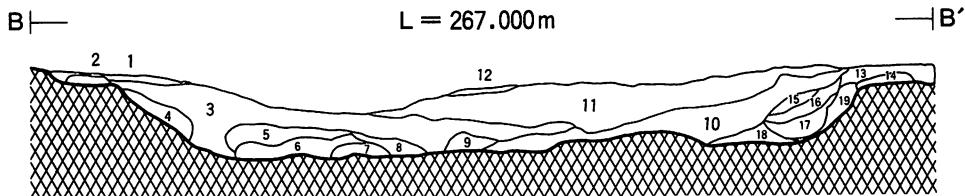


9号住居ベルト断面 (南・北)

1. 10YR 3/2 暗褐色 シルト 粘性やや強 しまり密(植物の根を含む。)
2. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性中 しまり密(植物の根を含む。)
3. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまりやや密(10YR 5/6 黄褐色土、炭化物を含む。)
4. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまりやや密(植物の根を含む。)
5. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまりやや密
(10YR 5/6 黄褐色土を粒状に含み、底部に鶏の骨を多く含む。)
6. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性やや強 しまりやや疎(底部に10YR 5/6 黄褐色土を含む。)
7. 10YR 5/6 黄褐色 シルト 粘性中 しまり中
8. 10YR 2/1 黑色 シルト 粘性中 しまり中
9. 10YR 2/1 黑色 シルト 粘性中 しまりやや密(底部に10YR 5/6 黄褐色土を少量含む。)
10. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまり中(10YR 5/6 黄褐色土を粒状に含む。)
11. 10YR 3/2 暗褐色 シルト 粘性やや弱 しまりやや疎(10YR 5/6 黄褐色土を多く含む。)
12. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性やや弱 しまりやや疎(10YR 5/6 黄褐色土を少量含む。)
13. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまりやや密(10YR 5/6 黄褐色土を多く含む。)

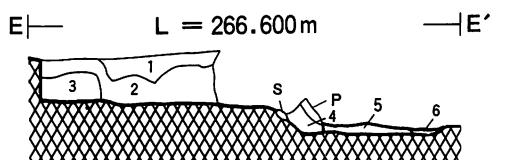
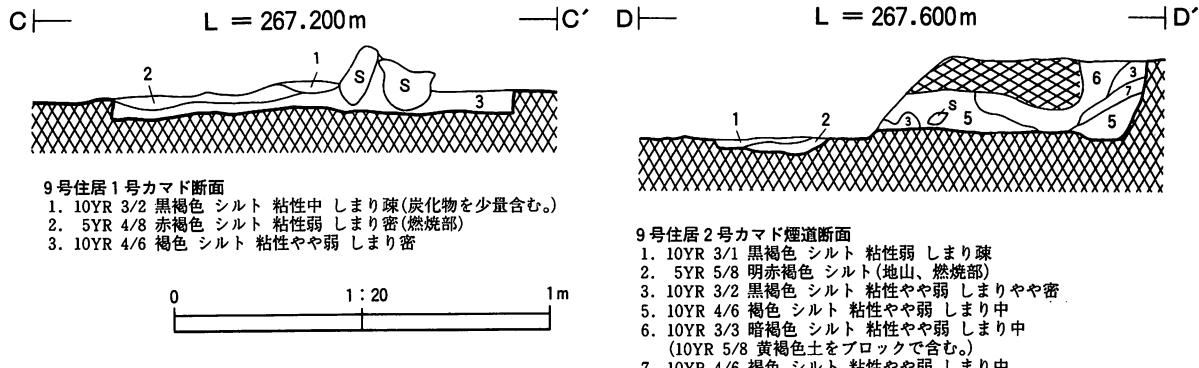


第24図 9号竖穴住居跡 (1)



9号住居ベルト断面（西・東）

1. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり密
(10YR 5/6 黄褐色土を粒状に少量含む。)
2. 10YR 5/6 黄褐色 シルト 粘性やや弱 しまり密(1を含む。)
3. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまり中(2を多く含む。)
4. 10YR 5/6 黄褐色 シルト 粘性中 しまり密
(10YR 2/1 黒色土をブロックで含む。)
5. 10YR 5/6 黄褐色 シルト 粘性中 しまりやや密
(10YR 2/1 黑褐色土を含む。)
6. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまり中
(10YR 2/1 黑褐色土、10YR 5/6 黄褐色土を含む。)
7. 10YR 5/6 黄褐色 シルト 粘性やや強 しまり中
(10YR 2/1 黑褐色土を少量含む。)
8. 10YR 5/6 黄褐色 シルト 粘性やや強 しまりやや密
9. 10YR 3/2 暗褐色 シルト 粘性中 しまり中
10. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性やや強 しまりやや密
(底部に10YR 5/6 黄褐色土を含む。)
11. 10YR 2/1 黑褐色 シルト 粘性やや弱 しまり密
(10YR 5/6 黄褐色土を粒状に少量含む。)
12. 10YR 2/1 黑褐色 シルト 粘性中 しまりやや疎
13. 10YR 2/1 黑褐色 シルト 粘性やや弱 しまり密(10YR 5/6 黄褐色土を少量含む。)
14. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまり密(10YR 5/6 黄褐色土を含む。)
15. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまり疎(10YR 5/6 黄褐色土を含む。)
16. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまりやや疎
17. 10YR 5/6 黄褐色 シルト 粘性中 しまり中
18. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性やや強 しまりやや密
(10YR 5/6 黄褐色土を粒状に含む。)
19. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性やや弱 しまり中(10YR 5/6 黄褐色土を含む。)



9号住居3号カマド煙道断面

1. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性やや弱 しまりやや密
2. 10YR 5/8 黄褐色 シルト 粘性やや弱 しまりやや密
3. 10YR 4/6 褐色 シルト 粘性やや弱 しまり中(10YR 2/1 黑褐色土を含む。)
4. 10YR 4/6 褐色 シルト 粘性中 しまりやや密
5. 7.5YR 3/3 暗褐色 シルト 粘性中 しまり疎(焼土・燃焼部)
(炭化物、10YR 4/6 褐色土を含む。)
6. 7.5YR 3/3 暗褐色 シルト 粘性中 しまり疎(焼土・燃焼部)

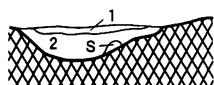
F | — L = 267.300m — | F'



9号住居焼土

1. 5YR 4/6 赤褐色 シルト 粘性やや弱 しまり密

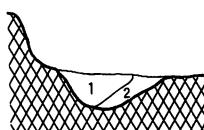
G | — L = 267.200m — | G'



9号住居1号土坑断面

1. 10YR 2/1 黑褐色 シルト 粘性弱 しまり疎(焼土粒、炭化物を含む。)
2. 7.5YR 4/4 褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密
(焼土を多く含み、炭化物も含む。)

H | — L = 267.400m — | H'



9号住居2号土坑断面

1. 10YR 2/1 黑褐色 シルト 粘性弱 しまり中(地山粒を多く含む。)
2. 10YR 2/2 黑褐色 シルト 粘性弱 しまり中(地山ブロックを多く含む。)

0 1:40 2m

第25図 9号竪穴住居跡（2）

4. 土 坑 (第26・27図) 写真図版 (17・18)

本遺跡で検出された遺構は9基である。これらの土坑については、縄文時代・平安時代に属するもの、また時代時期不明であるもを一括して、検出した遺構順番の通し番号で記載した。

第1号土坑

(位置) 9号竪穴住居跡の南東側に位置する。

(検出状況・重複関係) II層上面で検出した。9号竪穴住居跡と重複する。新旧関係は、9号竪穴住居跡より新しい。

(規模・形状) 検出時の不手際もあり、規模・形状については不明である。検出面からの深さは33cmである。

(埋土) 褐色土を主体とする。

(底面・壁) IV層を底面とし、ほぼ平坦である。壁は外傾する。

(出土遺物) 土師器甕小片が埋土中位から出土。

(時代時期) 重複関係から9号住居使用時以降の土坑と考えられる。

第2号土坑

(位置) 8号竪穴住居跡の南東に位置する。

(検出状況・重複関係) II層上面で検出した。8号竪穴住居跡の焼土・炭化材を切る。8号竪穴住居跡より新しい時代と考えられる。

(形状・規模) 検出時の不手際もあり、詳細については不明であるが、残存している焼土・炭化材を頼りに推定すると、不整な橢円形を呈すると思われる。

(埋土) 褐色土を主体とする。

(底面・壁) IV層を底面とし、ほぼ平坦である。壁はやや外傾する。

(出土遺物) なし

(時代時期) 出土遺物がなく詳細については不明である。重複関係から8号竪穴住居跡以降の土坑と考えられる。

第3号土坑

(位置) 6号竪穴住居跡の東側に隣接し、II F3aグリッドに位置する。

(検出状況・重複関係) II層上面で検出した。4号土坑と重複する。断面観察から4号土坑を切る。

(形状・規模) 検出時の不手際もあり、詳細については不明である。検出からの深さは45cmである。

(埋土) 黒褐色土の単層からなる。

(底面・壁) II層を底面とする。直立ぎみに外傾する。

(出土遺物) なし

(時代時期) 出土遺物がなく詳細については不明である。

第4号土坑

- (位置) 6号竪穴住居跡の東側に隣接し、Ⅱ F 3 a グリッドに位置する。
- (検出状況・重複関係) Ⅱ層上面で検出3号土坑と重複する。新旧関係は3号土坑より古い。
- (形状・規模) 平面形は不整な楕円形、断面形は深鉢状を呈する。規模は開口部径217×165cm、底部径62×40cm検出面からの深さ110cmを測る。
- (埋土) 上位は黄橙色土、中位は炭化物を含む黒色土と黒褐色土が交互に堆積、下位は暗褐色土と明黄褐色土で構成されている。自然堆積と思われる。
- (底面・壁) Ⅳ層を底面とし、若干の凹凸が見られる。外傾して立ち上がる。
- (出土遺物) なし
- (時期) 出土遺物がなく、詳細については不明である。

第5号土坑

- (位置) Ⅱ E 5 c グリッドに位置する。
- (検出状況・重複関係) Ⅱ層上面で検出した。重複はない。
- (形状・規模) 調査区境界で検出されたため、詳細については不明である。断面形は、ほぼ碗状を呈する。計測可能な部分で、南北軸122cm、東西軸45cm、底部径南北軸72cm、東西軸18cm、深さ71cmを測る。
- (埋土) 褐色土が主体。自然堆積と思われる。
- (底面・壁) Ⅳ層を底面とし、ほぼ平坦である。壁はやや外傾して立ち上がる。
- (出土遺物) なし
- (時期) 出土遺物がなく詳細については不明である。

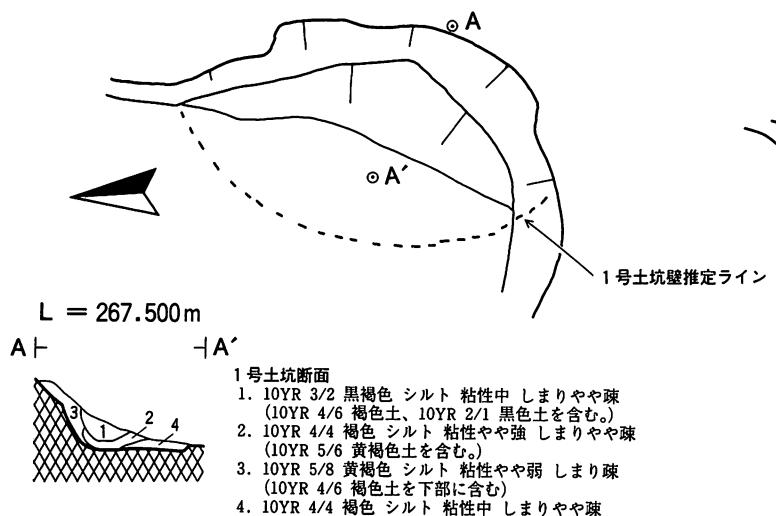
第6号土坑

- (位置) I G 2 e グリッドに位置する。
- (検出状況・重複関係) Ⅱ層上面で検出した。重複はない。
- (形状・規模) 平面形は小判形状を呈し断面形は皿状を呈す。規模は、開口部径172×138cm、底部径135×100cm、深さ29cmを測る。
- (埋土) 黒褐色土と炭化物を含む黒褐色土の2層からなる。自然堆積と思われる。
- (底面・壁) Ⅳ層を底面とし、ほぼ平坦である。壁は直立ぎみにやや外傾する。
- (出土遺物) 埋土上位から条痕が認められる縄文時代早期の土器が出土。
- (時期) 埋土上位から縄文時代早期の土器が出土しているが、流れ込みと考えられる。時代時期は不明である。

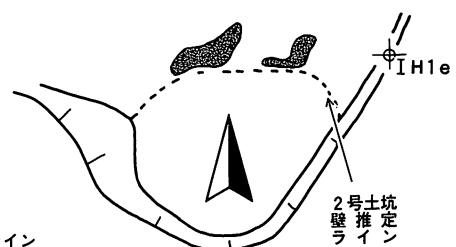
第7号土坑

- (位置) Ⅱ F 2 b グリッドに位置する。
- (検出状況・重複関係) Ⅲ層上位で検出した。遺構周辺で縄文時代早期の土器が出土している。重複はない。
- (形状・規模) 平面形は、楕円形、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径74×68cm、底部径64×54cm、深さ12cmを測る。
- (埋土) 暗褐色土の単層からなる。自然堆積と思われる。
- (底面・壁) Ⅳ層を底面とし、ほぼ平坦である。壁は直立ぎみにやや外傾する。

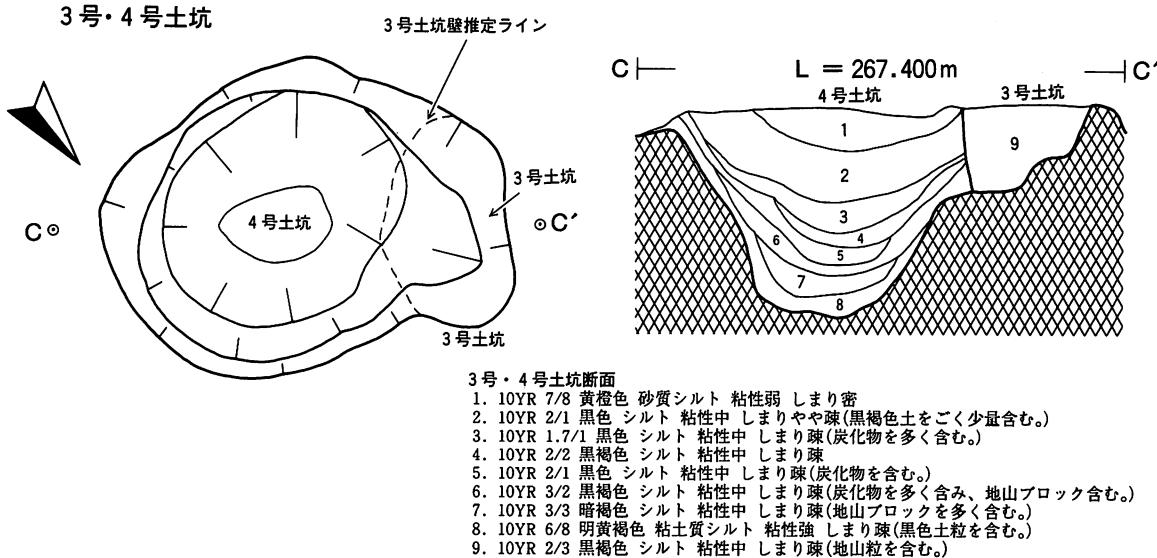
1号土坑



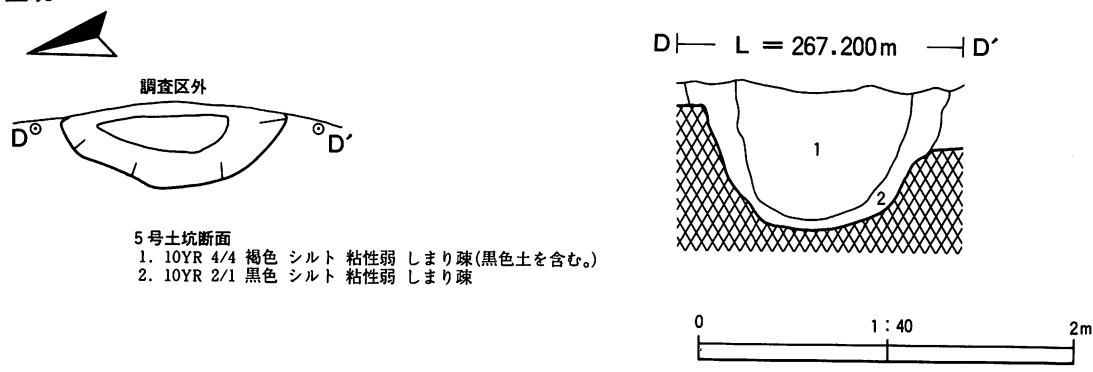
2号土坑



3号・4号土坑

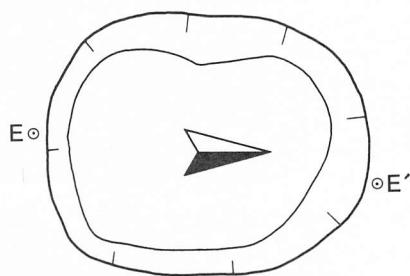


5号土坑

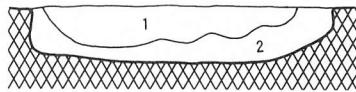


第26図 土坑 (1)

6号土坑



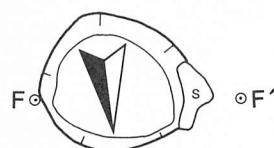
E | — L = 267.800m — | E'



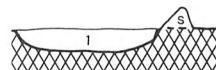
6号土坑断面

1. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや疎(黄褐色土バミスをまばらに含む。)
2. 10YR 2/3 黒褐色 シルト 粘性やや弱 しまり中(黄褐色土粒バミスを多量に含み、炭化物をまばらに含む。)

7号土坑



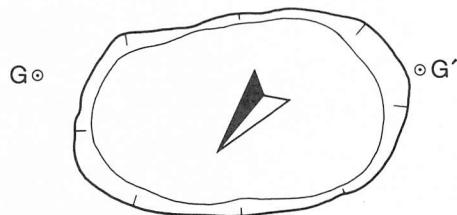
F | — L = 267.500m — | F'



7号土坑断面

1. 10YR 3/3 暗褐色 シルト 粘性弱 しまり密(縄文早期の土器が周辺にあり。)

9号土坑



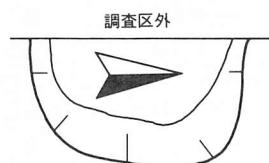
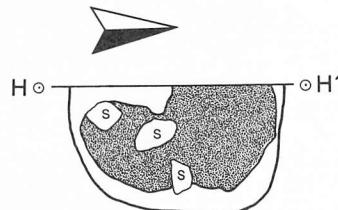
G | — L = 267.800m — | G'



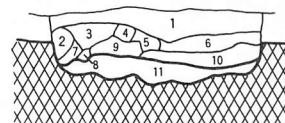
9号土坑断面

1. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり密(地山ブロックを多く含む。炭化物を含む。)
2. 地山

10号土坑

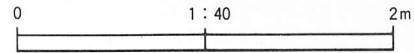


H | — L = 267.800m — | H'



10号土坑断面

1. 10YR 3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり密
2. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性やや弱 しまり密(焼土含む。)
3. 10YR 2/1 黒色 シルト 粘性やや弱 しまり密
4. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性やや弱 しまり密
(10YR 5/6 黄褐色土をブロックで含む。)
5. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまりやや密(焼土を含む。)
6. 10YR 3/2 黑褐色 シルト 粘性中 しまりやや密
(焼土、10YR 5/6 黄褐色土を含む。)
7. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり密
8. 5YR 5/6 明赤褐色 シルト 粘性弱 しまり密
9. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまりやや密(焼土、石を含む。)
10. 5YR 3/6 暗褐色 シルト 粘性やや弱 しまりやや密(黒色土・炭化物を含む。)
11. 10YR 5/6 黄褐色 粘土質シルト 粘性中 しまり密(貼り床・焼土粒・炭化物を含む。)



第27図 土坑 (2)

(出土遺物) なし

(時期) 検出面・周辺の遺物の出土状況から縄文時代早期の可能性が考えられる。

第9号土坑

(位置) II G 5 a グリッドに位置する。

(検出状況・重複関係) II層上面で検出した。重複はない。

(形状・規模) 平面形は小判形、断面形は皿形を呈する。規模は開口部径178×107cm、底部径155×92cm、検出面からの深さ19cmを測る。

(埋土) 炭化物を含む黒褐色土の単層からなる。自然堆積と思われる。

(底面・壁) IV層を底面とし、ほぼ平坦である。壁はやや外傾して立ち上がる。

(出土遺物) なし。

(時期) 出土遺物がなく詳細については不明である。

第10号土坑

(位置) I H 2 d グリッドに位置する。

(検出状況・重複関係) 宅地の基礎部分内で、若干の攪乱が認められた。II層面で検出した。重複はない。検出時上面に炭化物が認められた。

(形状・規模) 調査区境界で検出したため、詳細については不明であるが、断面形は皿形を呈する。計測可能な部分で、平面径は東西軸64cm、南北軸110cm、検出面からの深さは16cmである。

(埋土) 黒褐色土と黒色土からなる。焼土、炭化物を含む。

(底面・壁) 貼り床が施されている。壁は直立ぎみにやや外傾する。

(炭化物) 炭化物は鑑定結果から栗の木である。

(出土遺物) 上面で土師器甕の底部が1点出土。

(性格) 焼土を伴う土坑、または、炭窯の可能性が考えられる。

(時期) 出土遺物・周辺の遺構との関係から平安時代と考えられる。

5. 柱穴状ピット群 (第28図) 写真図版 (18)

(位置) I G 4 d ・ I G 4 e ・ I G 5 d ・ I G 5 e ・ I H 1 d ・ I H 1 e グリッドに位置する。

(検出面) II層上面 (埋土) 黒褐色土の単層からなる。柱穴痕跡は認められなかった。

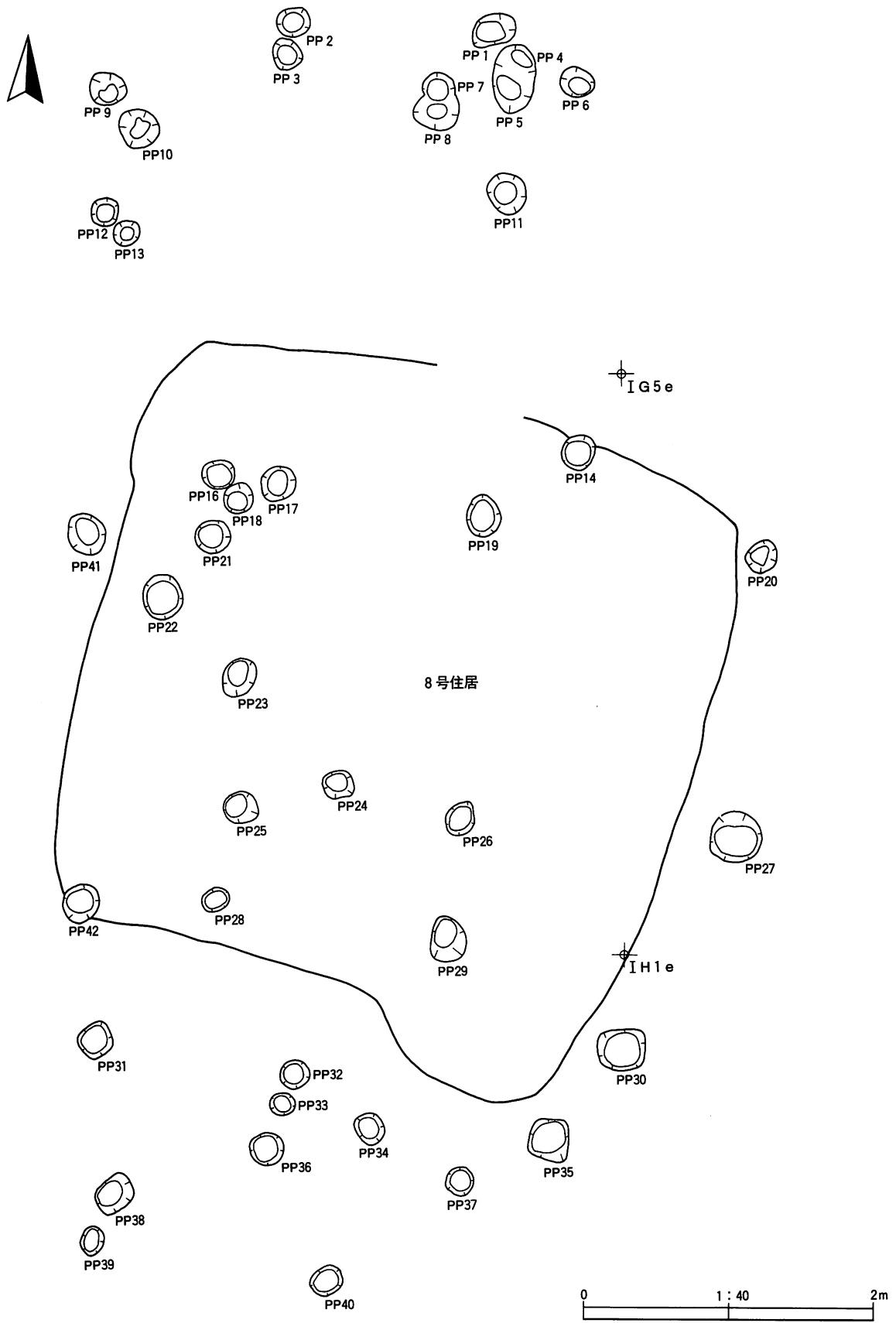
(重複関係) 8号竪穴住居跡より新しい。 (出土遺物) なし。

(時代時期) 出土遺物がなく、時代時期については不明である。

6. 縄文時代早期中葉の土器・石器集中区 (第29図) 写真図版 (18・19) 遺物 (第35・36図)

II層下面・III層上面において、縄文時代早期中葉に属する土器・石器が出土した。出土した区域で時代に伴う遺構は確認することはできなかった。土器片は約50片・石器は約150点出土した。器種はほとんどがチップ・フレイク類である。遺構は検出されなかった。

剝片石器が集中して出土している事から、石器を作成した場所の可能性が考えられる。



第28図 柱穴状ピット群

表2 柱穴状ピット群

番号	開口部径(cm)	深さ(cm)
PP1	30×20	16
PP2	22×20	28
PP3	20×20	22
PP4	25×20	41
PP5	30×30	10
PP6	23×20	17
PP7	23×20	19
PP8	32×20	22
PP9	25×22	14
PP10	28×27	38
PP11	28×27	24
PP12	20×18	12
PP13	18×18	22
PP14	25×23	12
PP16	22×20	14
PP17	24×24	16
PP18	21×20	18
PP19	30×24	16
PP20	23×20	20
PP21	25×22	17

番号	開口部径(cm)	深さ(cm)
PP22	30×27	4
PP23	25×23	16
PP24	23×18	5
PP25	25×22	30
PP26	25×25	9
PP27	35×35	19
PP28	20×16	14
PP29	32×22	21
PP30	32×28	19
PP31	26×25	30
PP32	20×20	27
PP33	18×15	58
PP34	22×20	38
PP35	33×32	36
PP36	23×23	43
PP37	20×19	35
PP38	30×25	19
PP39	20×17	17
PP40	23×23	9
PP41	28×27	15
PP42	26×25	18



II E 3 a

II E 3 c

• 67

• 77

• 62
• 74
• 60
• 61

• 2

• 12

• 75

• 7

• 73

• 8

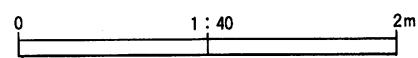
II F 1 a

II F 1 c

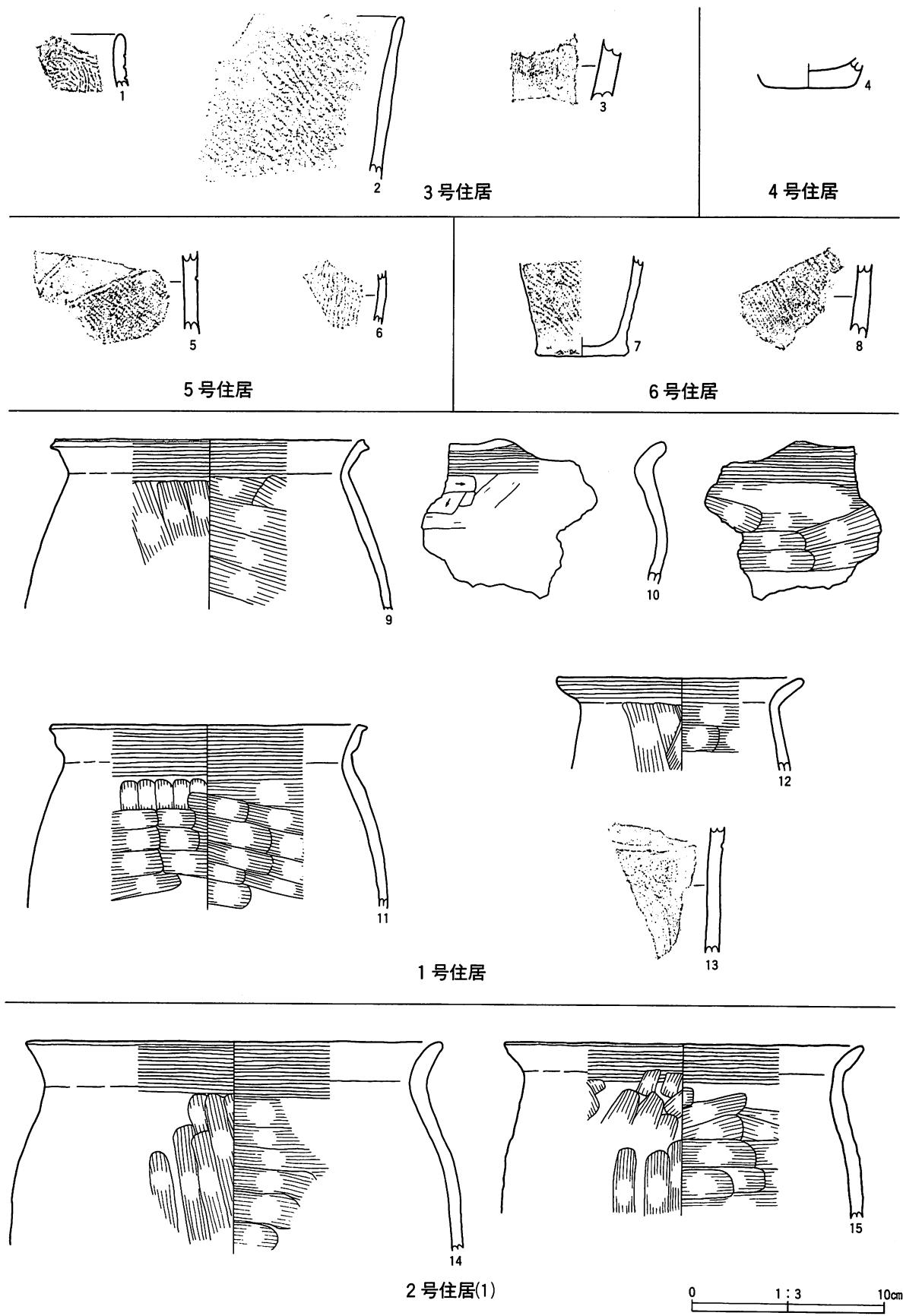
• 71

• 10
• 9

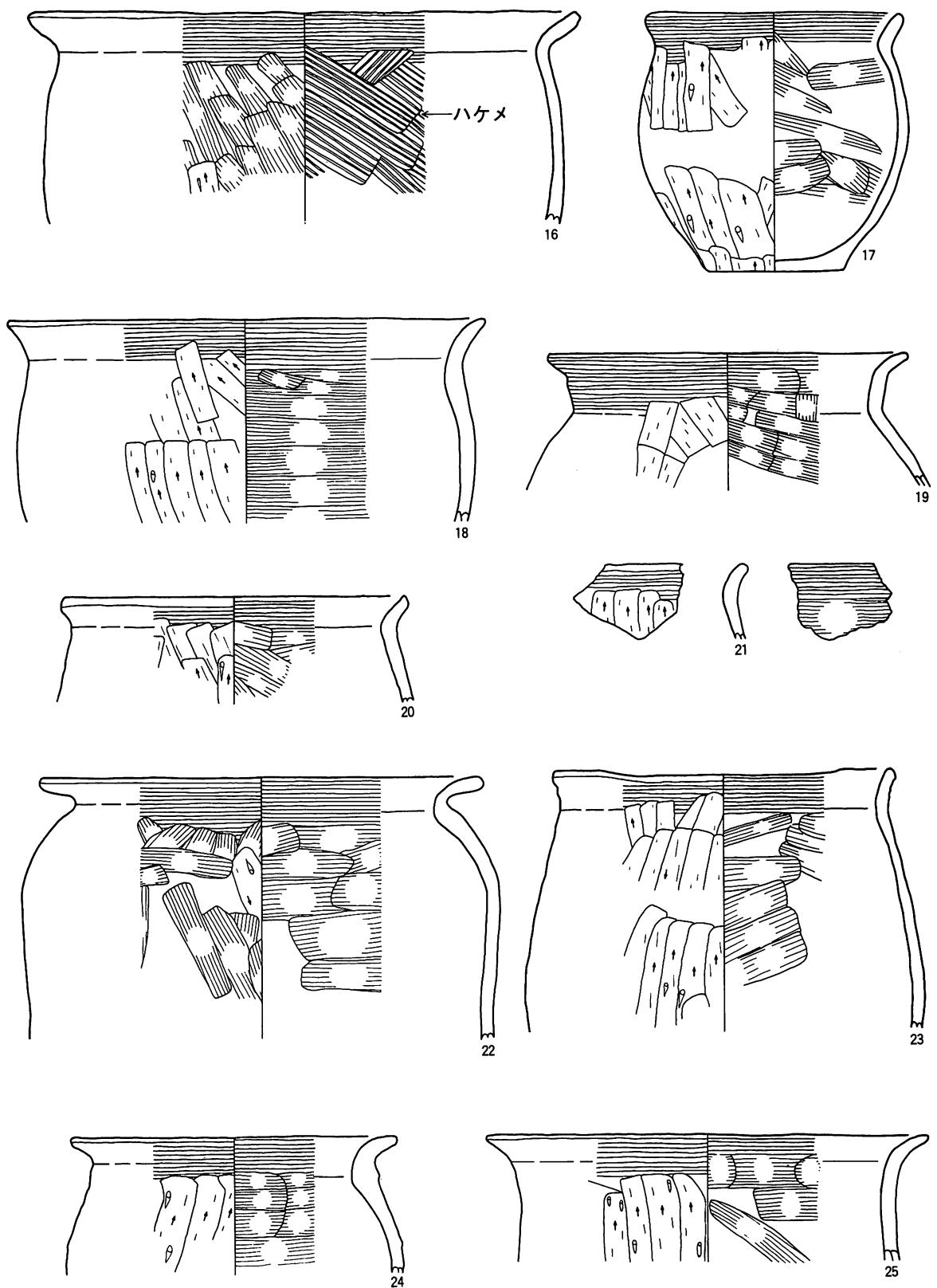
- 土器・石器出土状況
- 土器
- △ 石器



第29図 繩文時代早期土器・石器出土状況



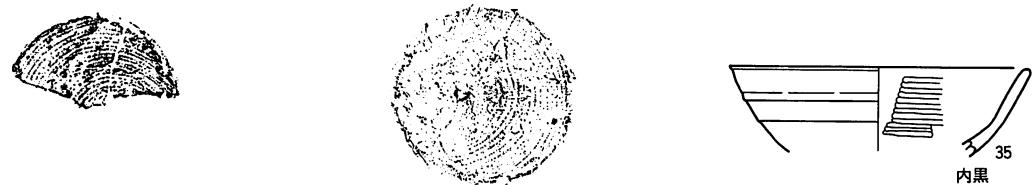
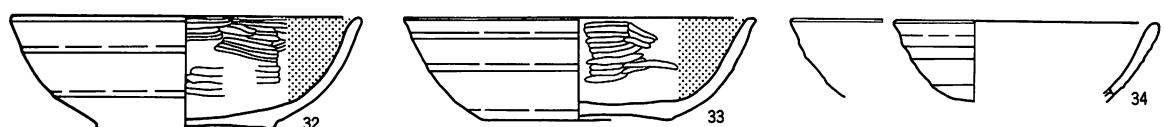
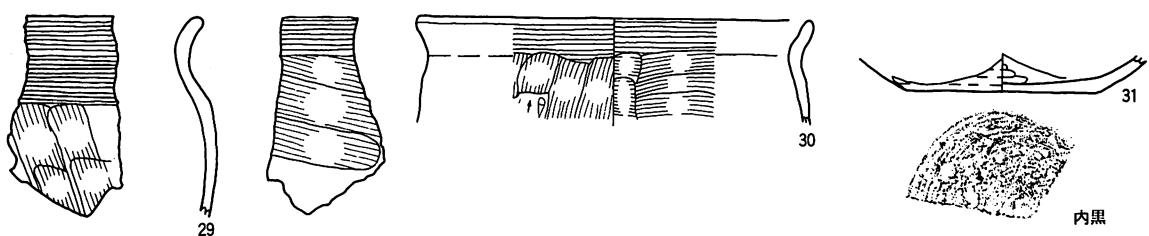
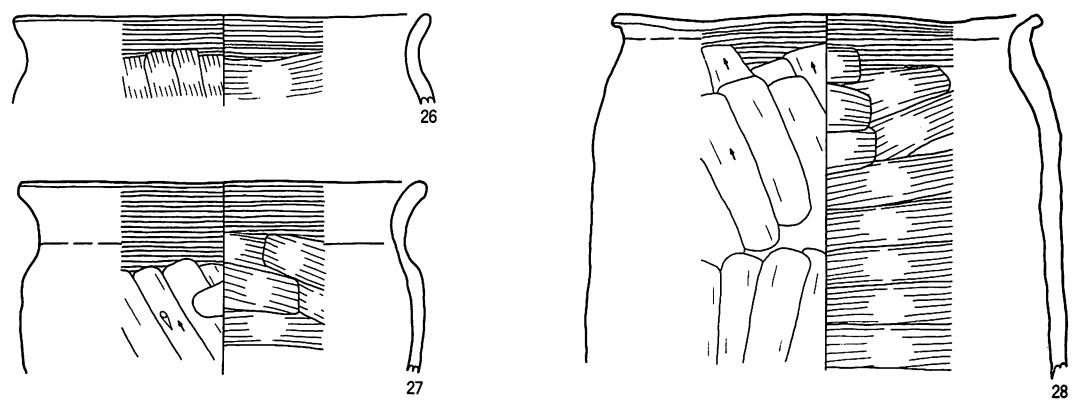
第30図 遺構内出土遺物（1）



2号住居(2)

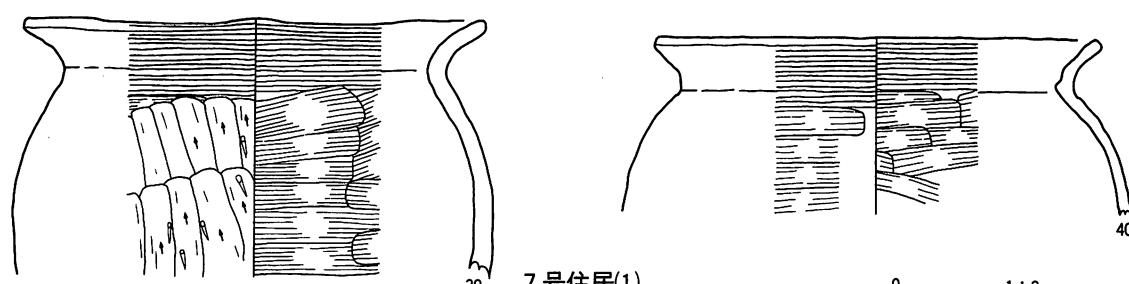
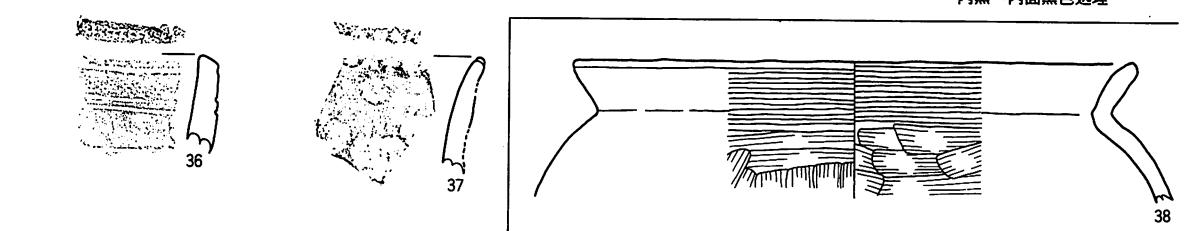
0 1:3 10cm

第31図 遺構内出土遺物 (2)



2号住居(3)

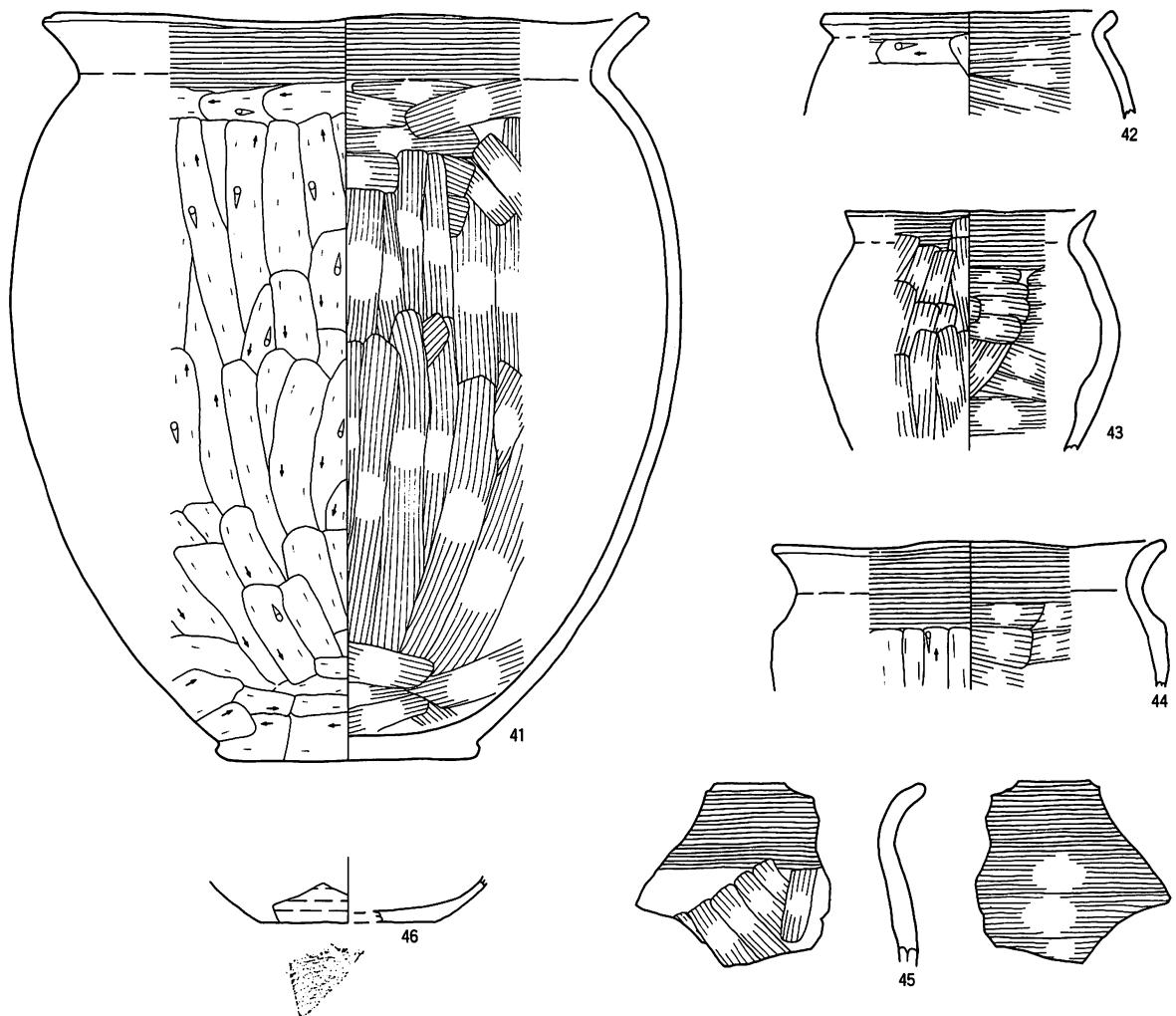
内黒=内面黑色処理



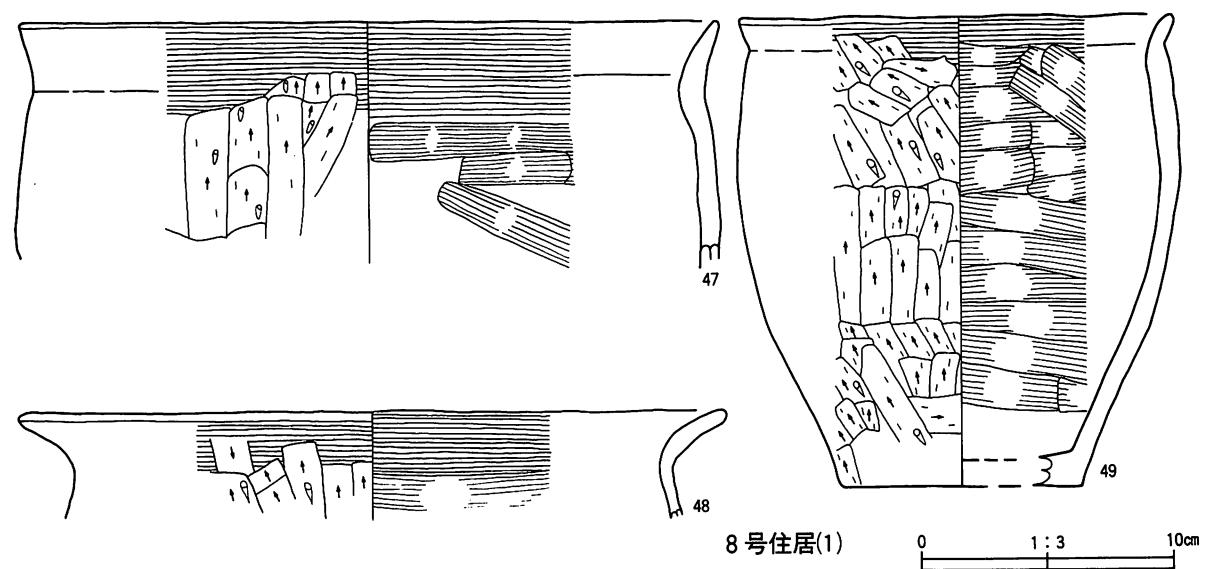
7号住居(1)

0 1:3 10cm

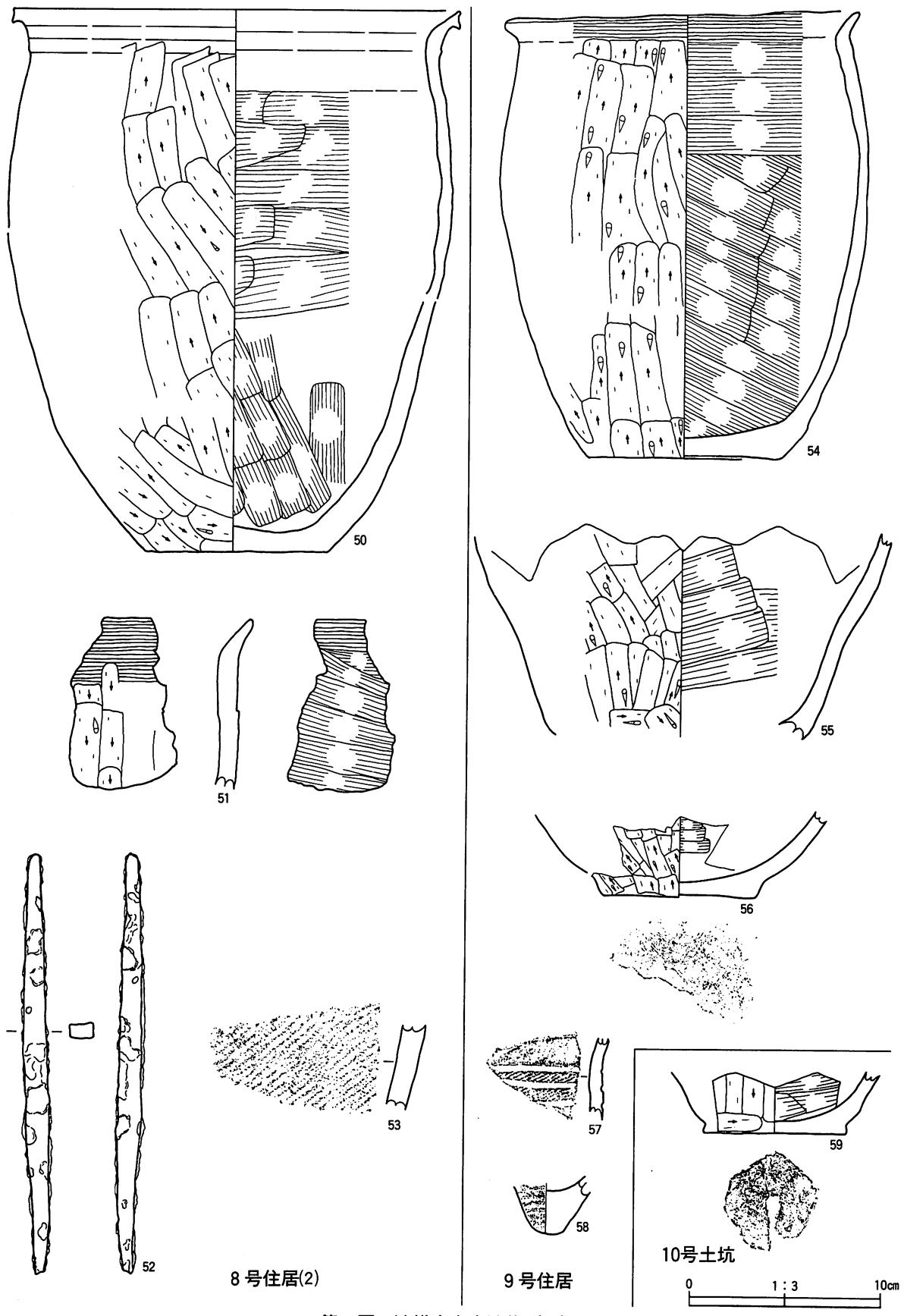
第32図 遺構内出土遺物 (3)



7号住居(2)



第33図 遺構内出土遺物 (4)



第34図 遺構内出土遺物（5）

V 遺構外出土遺物

今回の調査で遺構外から出土した土器の総量は、大コンテナ（42×32×30cm）0.5箱弱である。ほとんどが、Ⅱ・Ⅲ層中からの出土で時代は縄文時代の早期中葉・前期初頭・後期初頭～前葉である。これらの土器を従来の土器編年・胎土等に従って下記の通りに分類した。

1. 土器

(第Ⅰ群土器) 縄文時代早期の土器を一括した。(第35・36図 60～76) 写真図版(第23)

60～62は同一個体である。Ⅲ層からの出土で、縄文時代早期中葉の土器とフレイク・チップが集中する区域から出土したものである。二条の爪形圧痕が口縁部と平行に施される。口唇部も爪形の圧痕が施され、内外面の器面調整はミガキが施される。縄文時代早期中葉と考えられる。

63～70は同一個体である。沈線文・刺突列によって文様が構成される。口唇部は刺突列が施される。64・67の頸部が屈曲することから、キャリパー形の土器と推定される。内外面の器面調整はミガキによる。物見台式に相当すると思われる。縄文時代早期中葉と考えられる。

71は格子状に貝殻腹縁文が施され、口唇部に刻目をもつ。内外面の器面調整は摩滅しているため不明瞭であるが、ミガキが施されたと思われる。72は口縁部と沿う沈線と二条の沈線間に貝殻腹縁文が施されている。内外面の器面調整はミガキが施されている。口縁部の形状から波状口縁を呈すると推測される。

73～76は深鉢胴部と思われる。73は外面の調整が貝殻による条痕と思われる。74～76は外面縦方向のミガキによる調整が施されている。内面は横方向のミガキによる調整が施されすすの付着が認められる。

75・76は同一個体である。

(第Ⅱ群土器) 胎土に纖維を含む土器。(第36図 77) 写真図版(第24)

77の1点のみの出土。胎土は多量の纖維、石を含む。外面は単節縄文が施されている。原体・胎土の雰囲気から縄文時代早期末葉～前期初頭と思われる。

(第Ⅲ群土器) 縄文時代後期初頭～前葉の土器を一括した。(第36～38図 78～82・86)

文様は沈線・隆帯・鱗状突起等で構成され、磨消縄文が施される。81・82は外面に赤色顔料が施されている。胎土の雰囲気・赤色顔料が施されていることから、同一個体と思われる。86は馬立I遺跡IV群土器・駒板遺跡Ⅲ群a土器群に比定されよう。口縁部は山形口縁を呈し、山形口縁部は4単位で構成されると思われる。口縁部は山形口縁部から懸垂する隆帯とX状の隆帯が施される。隆帯が懸垂する部分2単位、X状の隆帯が施されている部分2単位の合計4単位で構成される。隆帯頂部は縄文が施されている。X状の隆帯が施される山形口縁の口唇部のみに原体回転が施されている。口縁部無文帯の調整はミガキによる。頸部は口縁部と平行に隆帯が施され、隆帯頂部は縄文が施されてる。胴部は沈線・磨消縄文により文様が区画され、文様区画先端は鱗状突起をもつ。文様帶は5～6単位と思われる。胴部下半は単節縄文が施されている。内面調整は口縁部はミガキ、胴部はナデによる。時代時期は縄文時代後期初頭の土器と考えられる。

(第Ⅳ群土器) 粗製土器・器種・部位不明の土器を一括した。(第36図 83～85) 写真図版(第24・25)

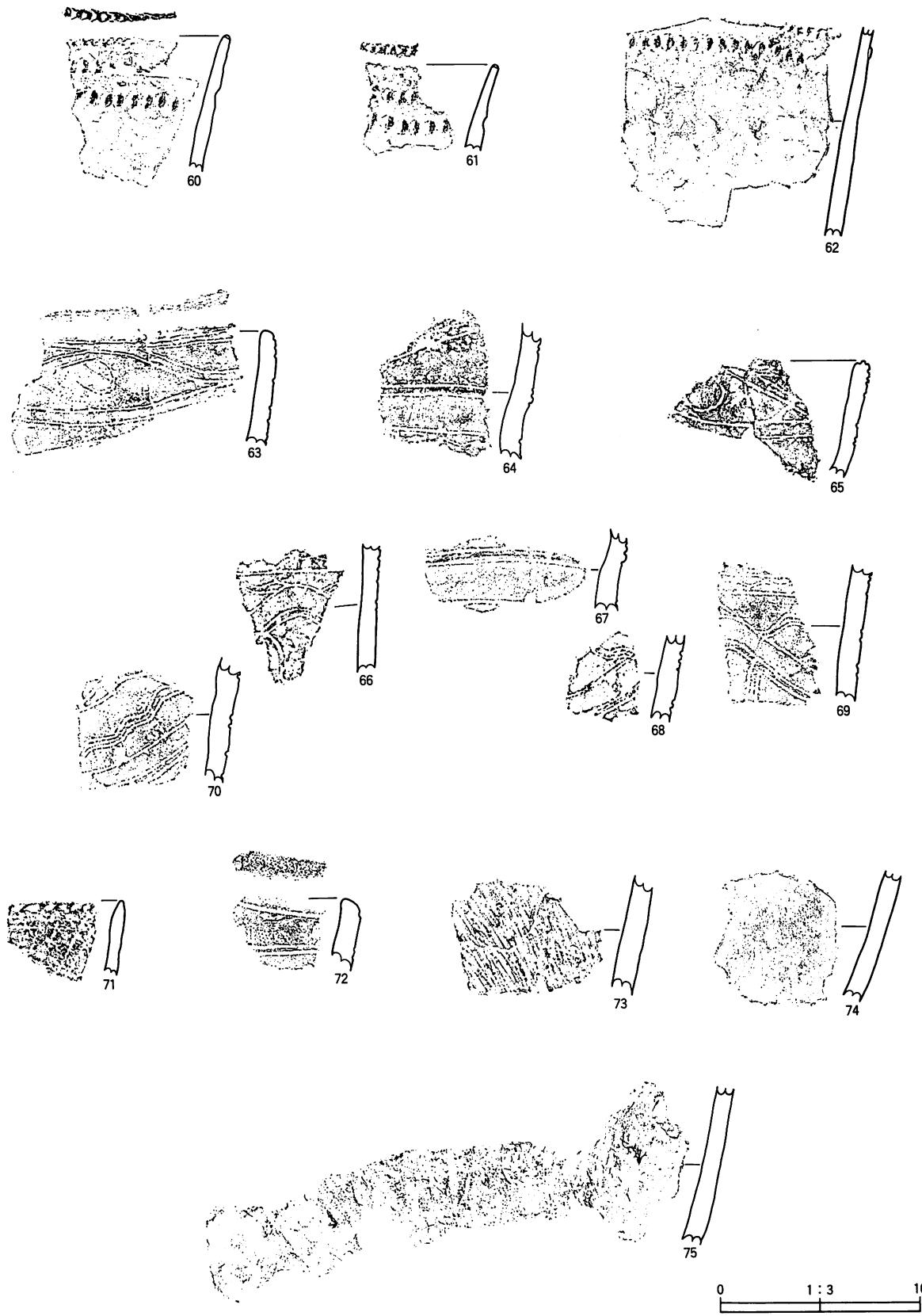
83・84は、単節縄文が施される粗製土器の口縁部である。胎土には纖維を含まない。85は器種・部位不明であるが、深鉢の突起等の可能性も考えられる。これらの土器は層位・胎土・周辺から出土している土器と考え合わせて、縄文時代後期初頭～前葉の土器の可能性が考えられる。

2. 石器（第39・40図）写真図版（第26）

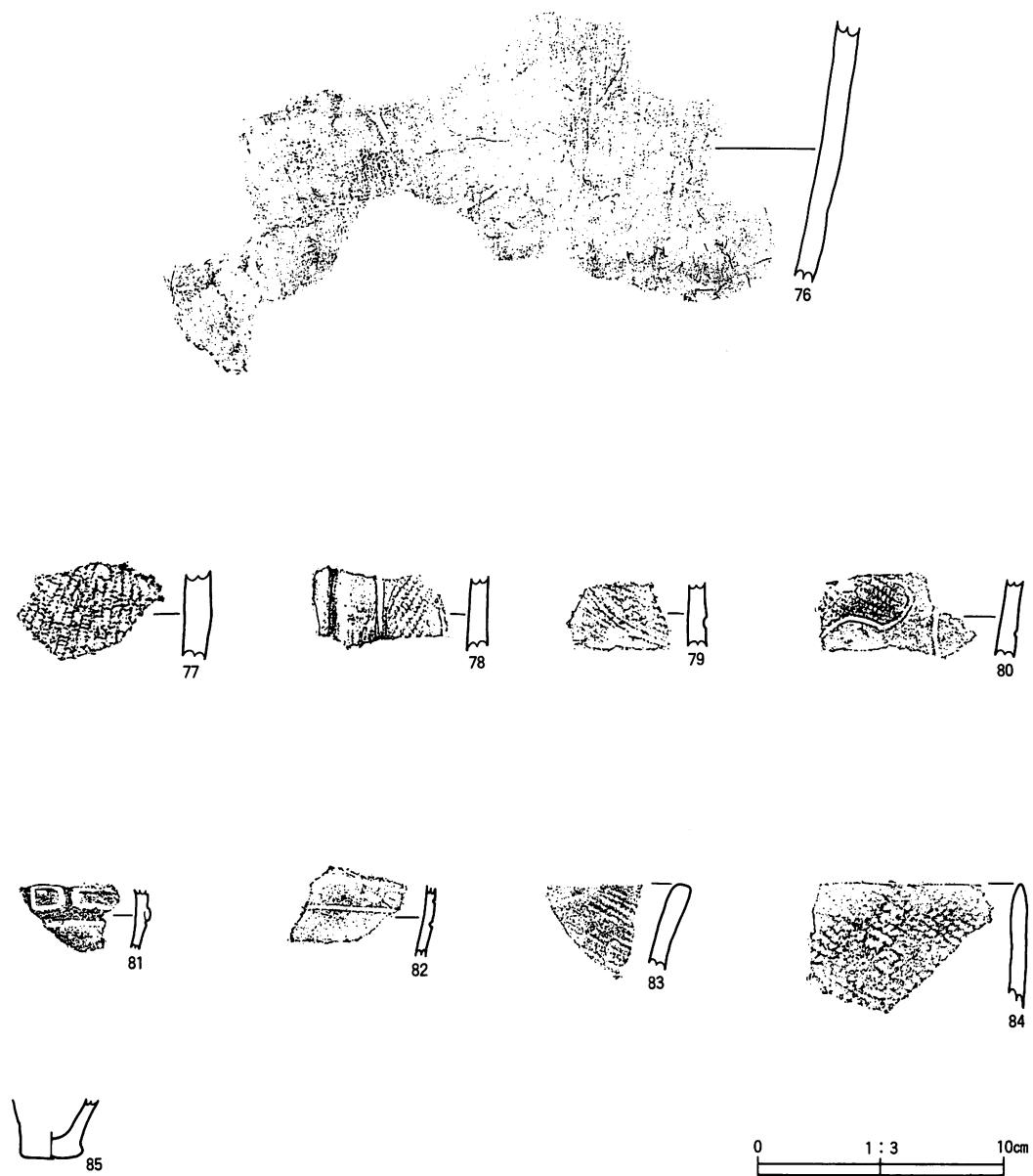
遺構外から出土した石器類はおおよそ150点である。前記した縄文時代早期の土器が出土した集中区でチップ・フレイク類の出土が大半を占める。本報告書に掲載した遺物には定型石器・縄文時代早期と考えられるチップ類等を実測掲載し、他の剝片石器については割愛した。本報告書で図示した石器は13点である。

1・2は無茎属の石鏃である。1はⅡ層から出土している。2は縄文時代早期の土器が出土した集中区Ⅲ層から出土している。3は石籠である全面に剝離調整が施されている。6・7は明確な使用痕が認められない剝片である。7は縦長の剝片石器作成段階の剝片と推定される。6～10はいずれも縄文時代早期の土器が出土した集中区Ⅲ層から出土している。11は磨製石斧である。12は表面に敲打痕・裏面に擦痕が認められる。13は磨石である。

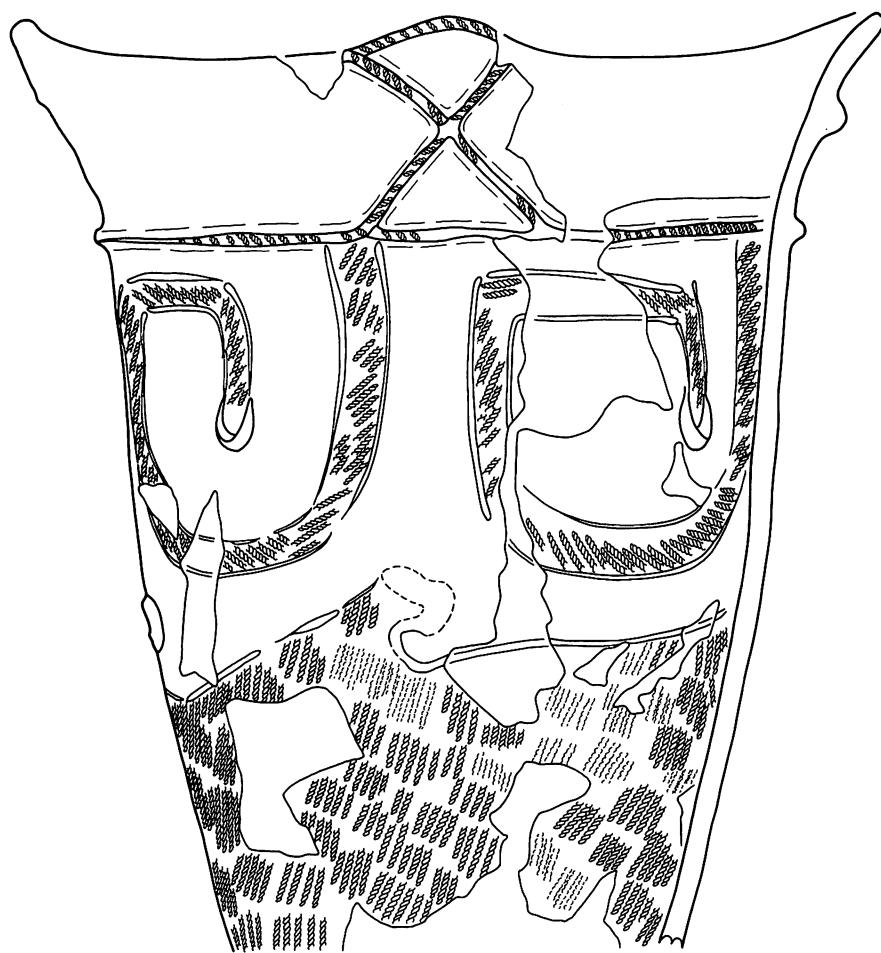
2・6～10・12は縄文時代早期の土器が出土した集中区Ⅲ層から出土していることから、同一層から出土した土器片と考え合わせると時代は縄文時代早期中葉に属すると思われる。



第35図 遺構外出土遺物（1）



第36図 遺構外出土遺物（2）

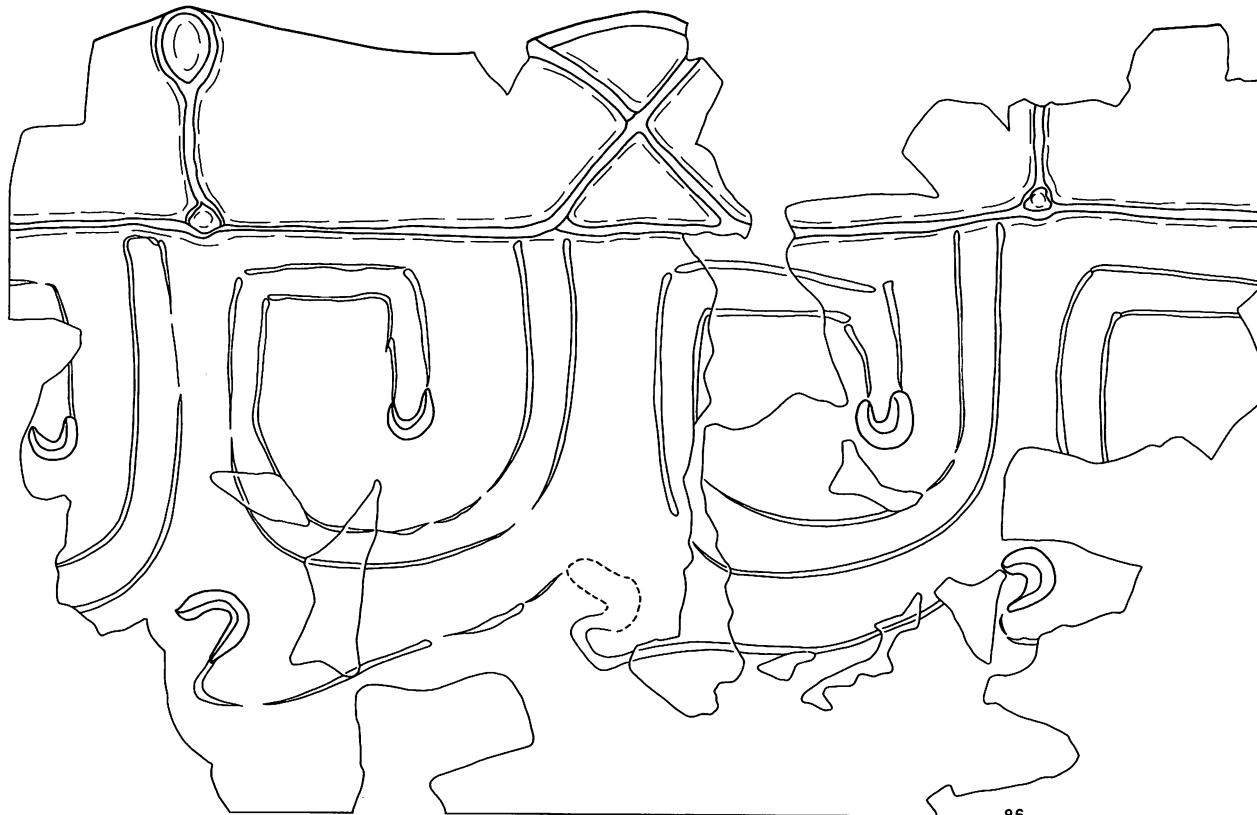


86

0 1 : 3 10cm

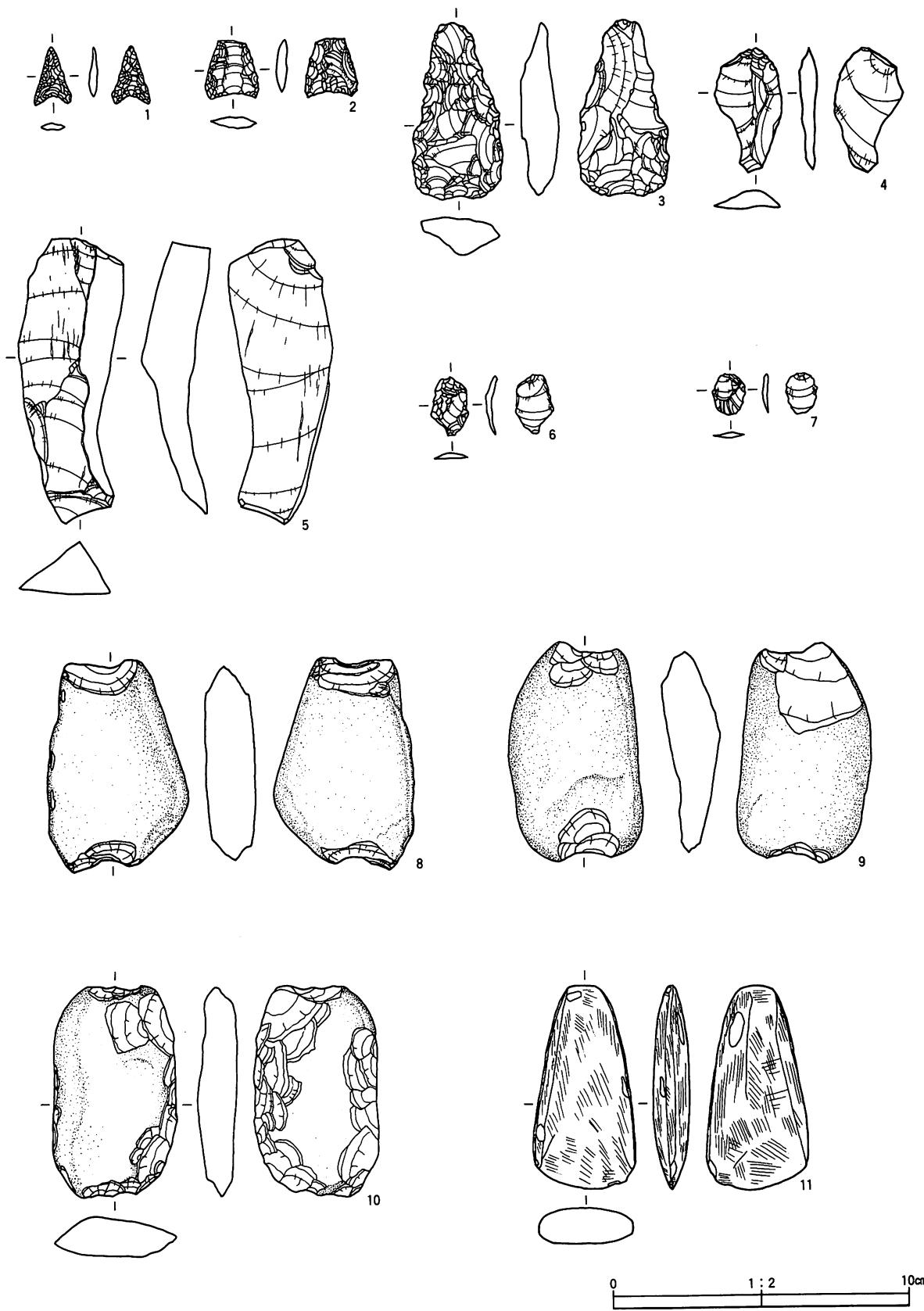
第37図 遺構外出土遺物（3）

第38図 遺構外出土遺物(4)

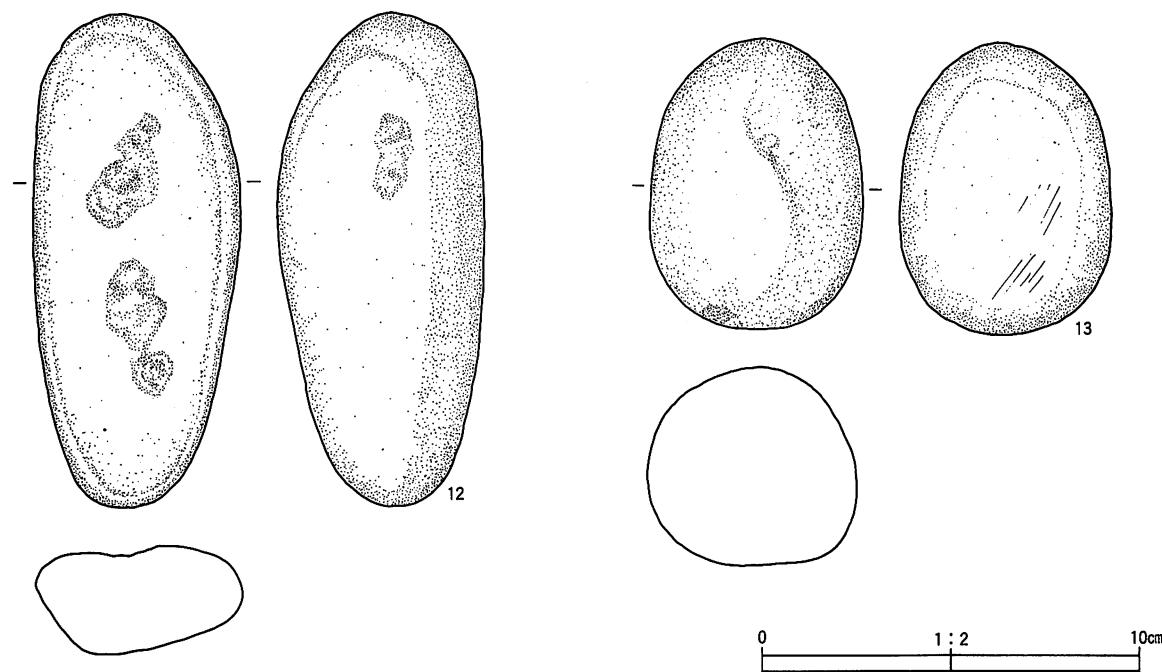


86

0 1 : 3 10cm



第39図 遺構外出土遺物（5）



第40図 遺構外出土遺物（6）

表3 成谷遺跡土器観察表

番号	出土地点・層位	種類	器種	部位	内面調整(口縁部)	内面調整(胴部)	外面調整(口縁部)	外面調整(胴部・底部)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	備考
1	3号住・石囲炉内	縄文	深鉢	口縁部	ナデ		縄文・沈線					III	波状口縁
2	3号住・床面	縄文	深鉢	口縁部	ナデ		L R 縄文					IV	
3	3号住・土坑	縄文	深鉢	胴部		ナデ	貝殻条痕					I	
4	4号住・埋土内	縄文	小型土器	底部				底面ケズリ		4.7		IV	
5	5号住・床面?	縄文	深鉢	胴部		ナデ		LR 縄文・沈線・磨消縄文				III	
6	5号住・石囲炉内	縄文	深鉢	胴部		ナデ		撫糸文L				IV?	
7	6号住・埋土内	縄文	小型土器	胴～底		ナデ		L R 縄文		4.7		IV	
8	6号住・土坑埋土	縄文	深鉢	胴部		ナデ	L R 縄文?					IV	
9	1号住・燃焼部	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(16.1)				
10	1号住・カマド燃焼部	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ					
11	1号住・床面	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(16.6)				
12	1号住・床面	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(13.0)				
13	1号住・煙道埋土	縄文	深鉢?	胴部		ナデ		沈線・磨消縄文				III?	
14	2号住・床面	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(21.8)				
15	2号住・床面	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(18.8)				
16	2号住・袖	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ナデ一部ケズリ	(27.0)			外面すす付着	
17	2号住・床面	土師器	甕	口～底	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(12.8)	12.9	12.9	内・外面すす付着	
18	2号住・2号煙道埋土・床面	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(23.7)				
19	2号住・床面	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(18.8)			頸部外面ケズリ・内面ナデ	
20	2号住・床面	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(17.0)				
21	2号住・床面	土師器	甕	口～頸	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ				頸部外面ケズリ・内面ナデ	
22	2号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ・ケズリ	(21.8)			すす付着	
23	2号住・袖 2号住カマド燃焼部	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(16.6)				
24	2号住・1号カマド燃焼部	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(16.2)				
25	2号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(22.0)				
26	2号住・2号煙道埋土	土師器	甕	口～頸	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(16.4)				
27	2号住・土坑埋土	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(14.8)			外面すす付着	

番号	出土地点・層位	種類	器種	部位	内面調整(口縁部)	内面調整(胴部)	外面調整(口縁部)	外面調整(胴部・底部)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	備考	
28	2号住・燃焼部	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(16.8)				胎土に石を多く含む粗い調整	
29	2号住・2号土坑埋土中位	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ					頸部外面ナデ・内面ハケメに近いナデ	
30	2号住・埋土	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ・ケズリ	(15.6)				口縁部内面すす付着	
31	2号住カマド袖脇	土師器	坏	底部		ミガキ		ロクロ・回転糸切り		(7.4)			内面黒色処理	
32	2号住・埋土下位	土師器	坏	口～底	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ・回転糸切り	(14.0)	(7.0)	4.3		内面黒色処理	
33	2号住・床面	土師器	坏	口～底	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ・回転糸切り	(14.1)	(7.6)	4.0		内面黒色処理	
34	2号住・床面	土師器	坏	口	ロクロ		ロクロ						内面二次火熱	
35	2号住・埋土	土師器	坏	口	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ	(12.0)				内面黒色処理	
36	2号住・床面	繩文	深鉢	口縁部	ナデ		貝殻腹縁文・沈線					I	貝殻文	
37	2号住・埋土上面	繩文	深鉢	口縁部	ナデ		ナデ?					I	口唇部刻	
38	7号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(22.8)				頸部外面ナデ	
39	7号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(18.0)				頸部外面ナデ・内面ハケメに近いナデ	
40	7号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(17.3)				頸部外面ナデ	
41	7号住・カマド構成土器	土師器	甕	口～底	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(29.7)	(10.5)	29.4		胎土良好	
42	7号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(11.5)					
43	7号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	17.3				外面すす付着	
44	7号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(15.7)				内外面すす付着	
45	7号住・床面	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ					胎土に石を多く含む粗い調整・残存状況不良	
46	7号住・カマド	土師器	坏	底部		ミガキ		ロクロ・回転糸切り		(7.0)				
47	8号住・カマド袖脇	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(27.8)				胎土に石を多く含む粗い調整	
48	8号住・カマド袖脇	土師器	甕	口～頸	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(27.2)				頸部外面ケズリ・内面ナデ	
49	8号住・カマド右	土師器	甕	口～底	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	17.3	(9.5)	19.7		胎土に石多く含む粗い調整	
50	8号住・カマド袖左脇	土師器	甕	口～底	ロクロ・ケズリ	ナデ	ロクロ	ケズリ	(23.4)	28.3	9.4			
51	8号住・1号土坑	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ					胎土に石を多く含む粗い整形	
52	8号住・埋土下位	鉄製品	不明							長さ21.9	幅1.3	重量72g		
53	8号住・カマド燃焼部	繩文	深鉢	胴部		ナデ	R L 繩文						II	
54	9号住・カマド	土師器	甕	口～底	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	18.5	23.4	12.9		外面すす付着・内面二次火熱	
55	9号住・カマド袖脇	土師器	甕	胴～底	ナデ	ナデ		ケズリ					胎土に石を多く含む粗い調整	
56	9号住・1号土坑埋土・2号煙	土師器	甕	底部		ナデ		ケズリ・底面木葉痕		(8.0)				

57	9号住・1号土坑埋土	縄文	深鉢	頸部	ナデ		縄文・沈線				III	
58	9号住・埋土	縄文	深鉢	底部				尖底・条痕か			I	
59	10号土坑上面	土師器	甕	底部				内面ミガキ・木葉痕				
60	III層	縄文	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	爪形刺突				I	口唇部爪形圧痕
61	III層	縄文	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	爪形刺突				I	口唇部爪形圧痕
62	III層	縄文	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	爪形刺突				I	口唇部爪形圧痕
63	II E 2 b II層下位	縄文	深鉢	口縁部	ミガキ		沈線・刺突				I	口唇部刺突
64	II E 3 d III層	縄文	深鉢	口縁部	ミガキ		沈線・刺突				I	
65	II E 1 a III層	縄文	深鉢	口縁部	ミガキ		沈線・刺突				I	口唇部刺突
66	II E 3 a III層上面	縄文	深鉢	頸～胴		ミガキ		沈線			I	
67	III層	縄文	深鉢	頸部	ミガキ		沈線・刺突				I	
68	III層	縄文	深鉢	胴部		ミガキ		沈線			I	
69	II E 4 a III層	縄文	深鉢	胴部		ミガキ		沈線			I	
70	II E 3 a III層	縄文	深鉢	胴部		ミガキ		沈線			I	
71	III層	縄文	深鉢	口縁部	ナデ		貝殻腹縁文・刻目				I	縄文早期寺ノ沢式か
72	II E 2 b II層	縄文	深鉢	口縁部	ナデ		貝殻腹縁文・沈線				I	口縁部貝殻腹縁文・縄文早期・波状口縁・寺ノ沢式か
73	III層	縄文	深鉢	胴部		ミガキ		貝殻条痕か			I	
74	III層	縄文	深鉢	胴部		ミガキ		調整縦方向			I	
75	III層	縄文	深鉢	胴部		ミガキ		調整縦方向			I	
76	II E 4 a III層	縄文	深鉢	胴		ミガキ		調整縦方向			I	
77	III層	縄文	深鉢	胴部		ナデ	L R 縄文				II	織維含
78	I F 5 e II層	縄文	深鉢	胴部		ナデ		R L 縄文・沈線・隆帯			III	
79	II E 1 a II層下位	縄文	深鉢	胴部		ナデ		L R 縄文・沈線・磨消縄文			III	
80	II E 1 a II層下位	縄文	深鉢	胴部		ミガキ?		R L 縄文・沈線・磨消縄文			III	
81	不明	縄文	壺か	胴部		ナデ		沈線・隆帯・赤色顔料			III	赤色顔料付着
82	II E 1 a II層下位	縄文	深鉢?	胴部		ナデ		沈線			III	赤色顔料付着
83	II E 1 a II層下位	縄文	深鉢	口縁部	ナデ		L R 縄文				IV	
84	不明	縄文	深鉢	口縁部		ナデ	L R 縄文				IV	すす付着
85	I e 1 e II層下位	縄文	?	?		ナデ		ナデ			IV	
86	II E 1 c II層	縄文	深鉢	口～胴	ナデ	ナデ	隆帯に縄文回転	沈線・鱗状突起・磨消縄文			III	

成谷遺跡石器観察表

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地
1	II D 4 b II層	石鎌	2.0	1.3	0.3	0.4	めのう	北上山地
2	III層	石鎌	(2.0)	1.3	0.4	1.4	頁岩	北上山地
3	II E 1 a II層下位	石籠	6.0	3.1	1.3	22.1	頁岩	北上山地
4	II E 4 b II層下位	フレイク	4.2	2.3	0.6	4.8	頁岩	北上山地
5	8号住埋土上面	フレイク	9.7	3.6	2.3	57.1	頁岩	北上山地
6	III層	チップ	2.0	1.3	0.4	0.5	頁岩	北上山地
7	III層	チップ	1.4	1.1	0.2	0.1	頁岩	北上山地
8	III層	石錐	7.2	4.8	1.7	82.6	頁岩	北上山地
9	III層	石錐	7.4	4.6	2.0	73.0	砂岩	
10	III層	石錐	7.2	4.3	1.3	47.3	砂岩	
11	II F 1 c II層	磨製石斧	6.9	3.0	1.3	43.6	頁岩	北上山地
12	III層	敲・磨石	13.1	5.5	2.9	289.7	砂岩	
13	II E 1 a II層下位	磨石	7.8	5.6	5.3	338.0	石英安山岩	北部北上山地

※ 出土地点について第29図参照

VI　まとめ

今回の発掘調査について、縄文時代・平安時代の竪穴住居跡を中心に、項目毎に若干述べてまとめとしたい。

1. 竪穴住居跡

本遺跡での調査では縄文時代の竪穴住居跡が4棟・平安時代の竪穴住居跡が5棟検出された。検出された竪穴住居跡はすべてⅡ層上面で検出されたものである。

(1) 縄文時代の竪穴住居跡

●平面形について

耕作地の造成による削平・攪乱等により、石囲炉は検出するものの、壁を明確に検出するに至らなかった。比較的残存状況が良好な4号竪穴住居跡は、調査区境界面で検出したことから、明確な判断は出来ないが、平面形はほぼ円形を呈するものと推測できた。4棟の竪穴住居跡の石囲炉の特徴が類似することから、平面形も同類のものと推測される。

●石囲炉について

4棟ともに平たい礫を立て、構築されており、掘り方が認められる。平面形は共に方形状を呈している。3号竪穴住居跡を除くと石囲炉の内の焼土は良好に形成されていなかった。

●柱穴について

明確な柱穴を検出するに至らなかった。4号竪穴住居跡については、外柱の可能性が考えられる。

●出土遺物について

遺構内の出土遺物は、時代時期を明確にできる遺物が出土しなかった。沈線・磨消縄文等が特徴と言える。

●時代時期について

遺構からの出土遺物は、時代時期を判別する資料としては十分ではなかった。そこで、遺構外出土遺物の中で時代時期を判別する資料として図版第37・38遺物番号86の土器（5号竪穴住居跡の石囲炉から南に約3m離れた地点Ⅱ層から出土）が他の遺物と比較して明確に馬立I遺跡IV群、駒板遺跡III群に比定される。このことから、他の遺構外の出土遺物と考え合わせて、縄文時代後期初頭～前葉の竪穴住居跡の可能性が考えられる。

(2) 平安時代の竪穴住居跡

●規模について

平面形は概ね正方形を呈する。規模等は下記の表でまとめた。

1号竪穴住居跡	規模 3.6×3.7m	床面積 約 9.9m ²	カマド 1基	備考
2号竪穴住居跡	規模 4.3×4.7m	床面積 約 16.5m ²	カマド 2基	備考 焼失住居
7号竪穴住居跡	規模 4.4×5.1m	床面積 約 18.2m ²	カマド 3基	備考
8号竪穴住居跡	規模 4.2×4.2m	床面積 約 16.6m ²	カマド 1基	備考 焼失住居
9号竪穴住居跡	規模 3.6×4.1m	床面積 約 11.6m ²	カマド 3基	備考

規模・床面積について比較すると、比較的1号竪穴住居跡の規模が小さいが、他の竪穴住居跡の規模差はない。

●カマドの構築について

5棟のカマドのうち、1・2号竪穴住居跡のカマドは床面より若干高く粘土を盛り上げ、平たい礫を縦に埋め込み、礫を袖部としている。また、検出時に明確に残存していなかったが、カマド周辺で礫が散在して見られたことから、縦に埋め込んだ礫の上に天井石を構築していた可能性も考えられる。

7・8号竪穴住居跡については、床面より若干高く粘土を盛り上げ、平たい礫ではないが、礫を芯材とし粘土を覆う構築方法を行っている。9号竪穴住居跡については残存状況が良好でなく、燃焼部周辺に礫が確認されたが、礫を粘土等によって覆ったり、粘土や床面に埋め込む構築方法は認められなかった。

●煙道について

煙道の形態は、2・9号竪穴住居跡の1号カマド・7号竪穴住居跡の1号カマドについては、削平・当時の住民による破壊?により不明であるが、これらを除くと、全て剖貫式の形態である。

煙道の主軸方向は、下記の通りである。

竪穴住居跡	カマドの方向
1号竪穴住居跡	西
2号竪穴住居跡	1号カマド東・2号カマド西
7号竪穴住居跡	1号カマド東・2号カマド東・3号カマド北
8号壁穴住居跡	北
9号壁穴住居跡	1号カマド東・2号カマド北・3号カマド西

上記の表を見ると、2・7・9号竪穴住居跡に複数のカマドが構築されている。最後に構築するのは東向きである共通点が見られる。最後に構築された煙道については、形態が不明であるが、本遺跡で見られる剖貫式の煙道は住居の床面レベル付近又は下まで、掘り込んでいることから、仮に本遺跡の剖貫式の煙道と考えた際、削平・攪乱があったとしても、残存するはずである。このことから2・7号竪穴住居跡の1号カマドについては、煙出孔底面のレベルが床面より高いことから、燃焼部から煙出孔にかけてレベルが上がっていく特徴がある。9号竪穴住居跡は重複により詳細は不明である。2・7号竪穴住居跡1号カマド、9号竪穴住居カマドは本遺跡で明らかになった剖貫式の煙道と違う形態の煙道を構築した可能性が考えられる(掘り込み式か)。

●焼失住居について

本遺跡で検出された2棟(2・8号竪穴住居跡)の焼失住居の状況は共に床面に焼土・炭化材が確認された。どのような過程経て焼失したかについては、出土遺物で考えると平安時代の5棟の竪穴住居跡の中で、出土遺物が最も多のは2号竪穴住居跡である。生活時に家屋に火がついて、土器等を住居内に残したまま竪穴住居跡を放棄したため、他の平安時代の竪穴住居跡より遺物の出土量が多いという推測ができるかもしれないが、いずれの土器にも完形品がないことを考えると、前述した推測を積極的に肯定することはできない。

●土坑について

いずれの竪穴住居跡に付属施設として、土坑が確認された。2・7・9号竪穴住居跡の土坑は、北東側に位置する。2・9号竪穴住居跡は南西側に位置する。7・8号竪穴住居跡はカマド右脇に位置する。

それぞれの竪穴住居跡に共通点が見られる。

●柱穴について

本遺跡で検出されたいずれの堅穴住居跡に柱穴は検出されなかった。

●出土遺物について

本遺跡で検出された平安時代の堅穴住居跡から出土した遺物は土師器のみで、器種は壺と甕である。壺はすべてロクロ成形で、内面が黒色処理されているものと黒色処理されていないものに大別される。壺の出土数は6点で、2・7号堅穴住居跡からの出土である。壺に比べ甕の出土数が圧倒的である。甕の成形は、遺物番号50のみが、口縁部をロクロ成形し、その後外面をケズリ、内面をナデ調整が施されている。他の甕の調整は、口縁部はヨコナデ調整後、外面ケズリ・内面ナデと内外面共にナデ調整が施されているものに大別される。外面ケズリ調整の中には、他の遺物と比較して粗雑な調整が施されているものもある（遺物番号・28・49・54～56）。口縁部は、緩やかに外反するものと（遺物番号・21・23・26～28・30・47・49・54）とやや強く外反するもの（遺物番号・22・24・38～41・48）に大別される。

時代時期は、10世紀後半代の遺物と思われる。

●堅穴住居跡の時代時期について

5棟の堅穴住居跡の時代は出土遺物から10世紀後半代と思われる。しかし、7・9号堅穴住居跡の位置関係を考えると近接しすぎる事から、この2棟の堅穴住居跡については、時期差があるものと考えられるが、新旧を判断するには至らなかった。

2. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の総量は大コンテナ（35×40×30cm）2箱分で大半は土師器である。

1. 繩文土器

主に縄文時代早期中葉の土器・石器・縄文時代後期初頭～前葉の土器・石器が出土した。縄文時代早期中葉の明確な遺構は確認できなかったが、本遺跡周辺に同時期の遺構が存在する可能性は高いと考えている。

2. 土師器

堅穴住居跡からの出土が大半を占める。10世紀後半代の遺物と思われる。

3. 鉄製品

器種については、不明である。加工途中段階の遺物と思われる。

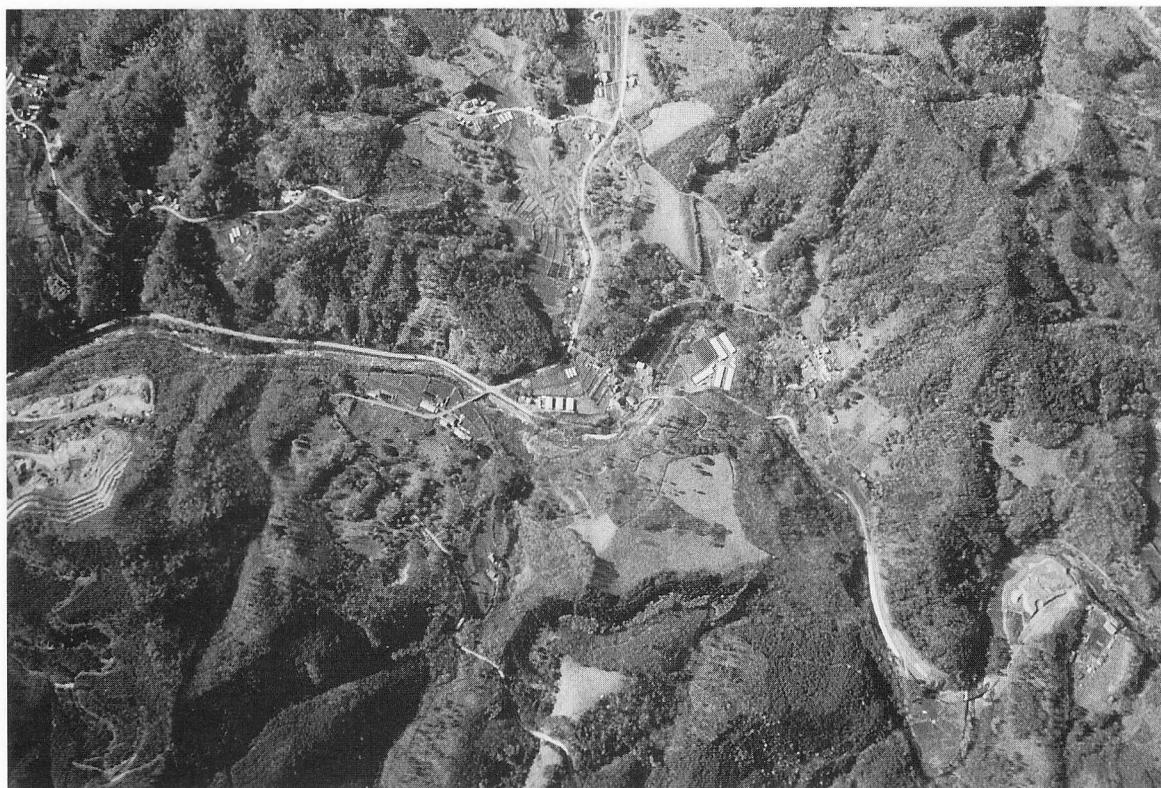
3. おわりに

堅穴住居跡等の遺構・遺物について、周辺の遺跡と比較検討するべきであったが、本遺跡のみの報告となってしまった。記載に誤りがあるかもしれないがご容赦願いたい。この報告書が広く活用され、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いである。

《参考引用文献》

- 相原康二（1981）：「岩手県南部における古代の土器編年思案」岩手県文化財調査報告書第60集
岩手県教育委員会
- 高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正（1982）：「岩手の土器」岩手県立博物館
- 鈴木恵治他（1985）：「駒板遺跡発掘調査報告書」（財）岩文振
- 田鎖壽夫他（1987）：「馬立I・太田遺跡発掘調査報告書」（財）岩文振
- 鈴木道之助（1991）：「石器入門事典」
- 八木光則（1992）：「古代斯波群と爾薩体の土器様相」
- 斎藤邦雄（1995）：「大日向II遺跡発掘調査報告書第2次～5次」（財）岩文振
- 早坂悟・濱田宏（1999）：「芋田II遺跡発掘調査報告書」（財）岩文振
- 工藤徹（1999）：「大平遺跡」（財）岩文振

写 真 図 版

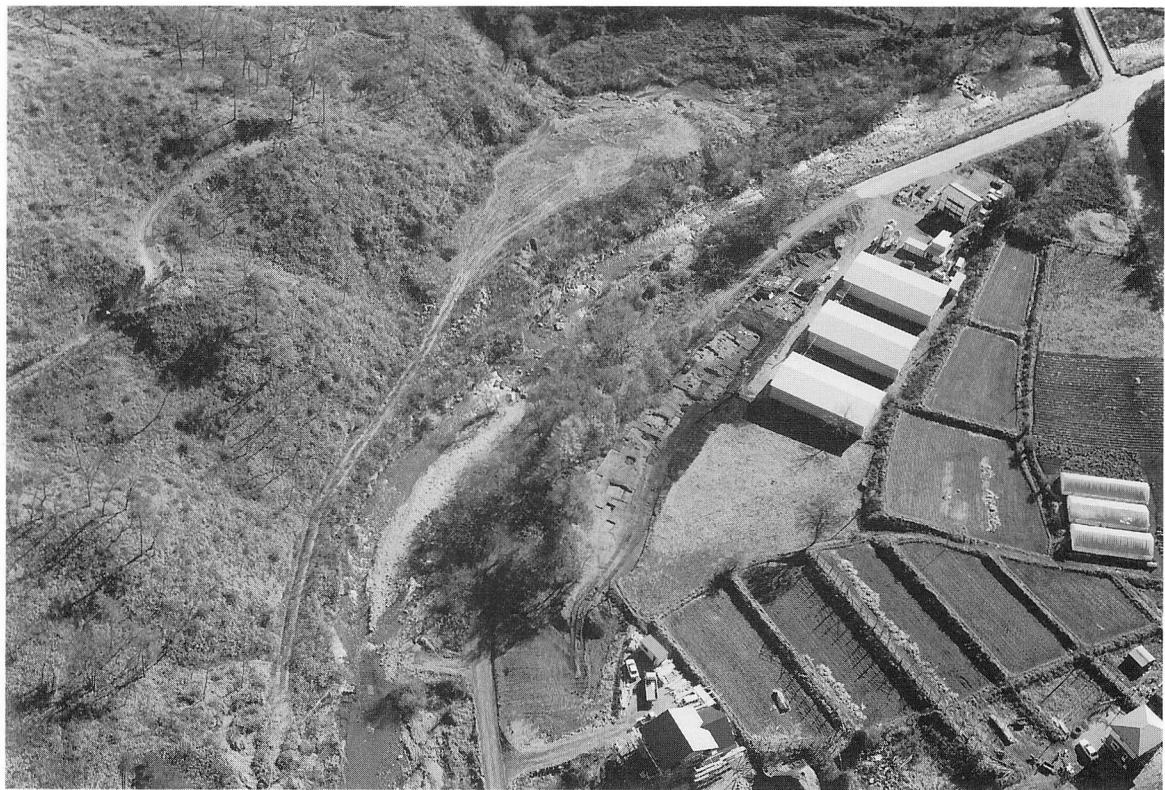


空中写真遺跡全景 真上から

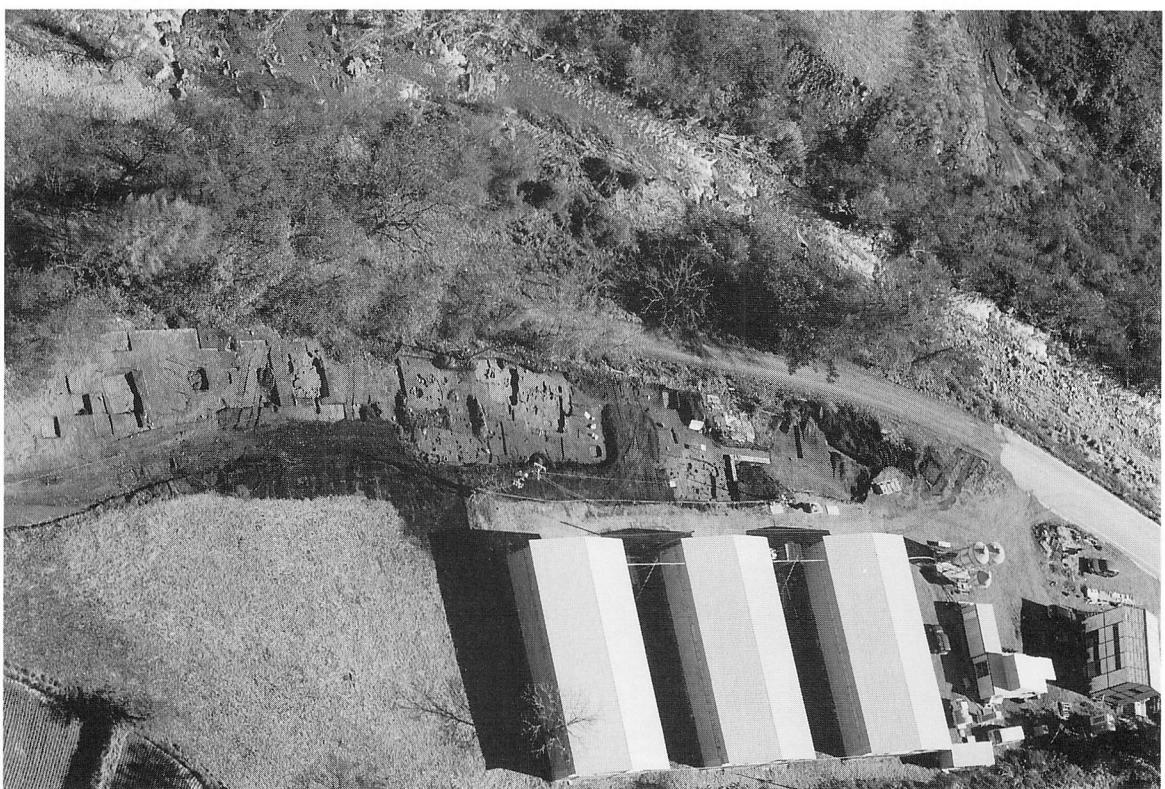


空中写真遺跡全景 西から

写真図版1 遺跡全景



空中写真遺跡全景 北西から

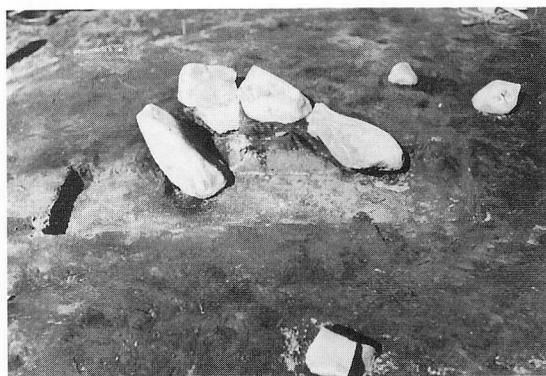


空中写真遺跡全景 南から

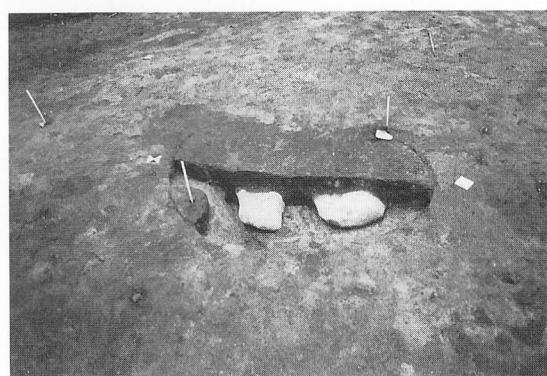
写真図版2 遺跡全景



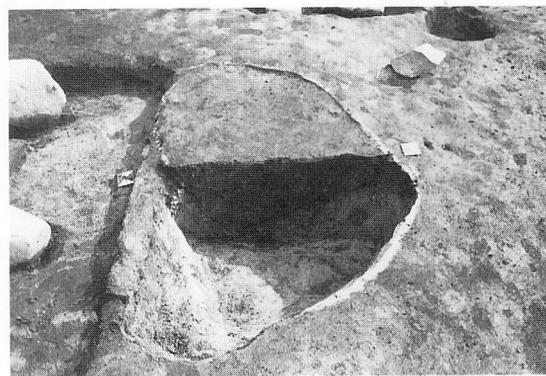
炉検出状況 南西から



炉断面 南から



3号住居内 1号土坑断面 北西から



3号住居内 2号土坑 西から



3号竪穴住居跡全景 南から

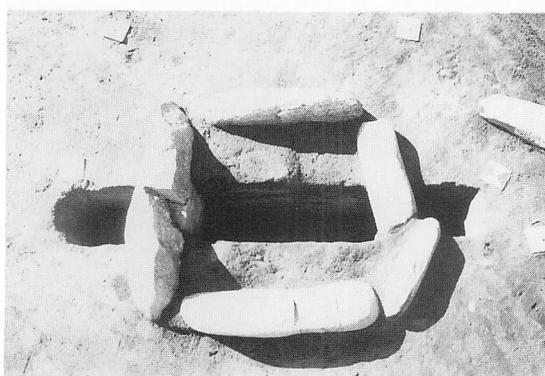
写真図版 3 3号竪穴住居跡



4号竪穴住居跡 平面東から



4号竪穴住居跡 断面東から



4号竪穴住居跡炉断面



1号土坑断面

写真図版4 4号竪穴住居跡



4号竪穴住居跡 完掘 南東から



5号竪穴住居跡 西から

写真図版5 4・5号竪穴住居跡



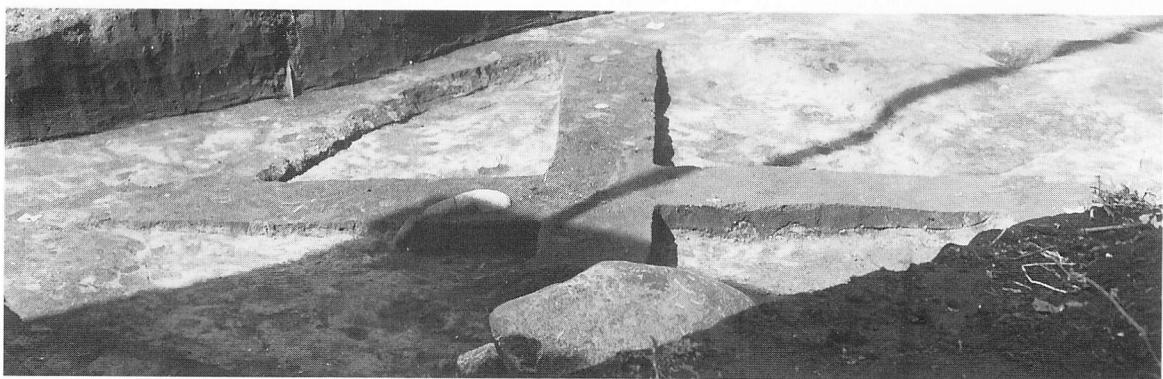
5号竪穴住居跡 炉近景 西から



5号竪穴住居跡 炉断面 南から



6号竪穴住居跡 平面 北東から

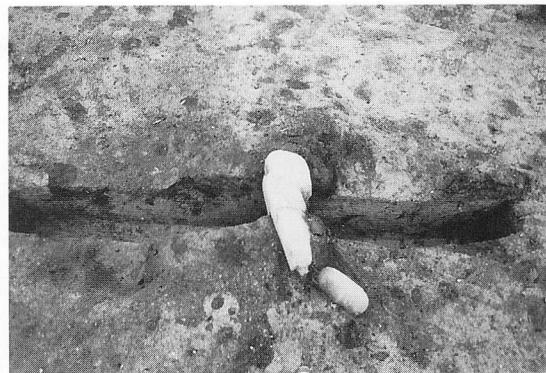


6号竪穴住居跡 断面 南東から

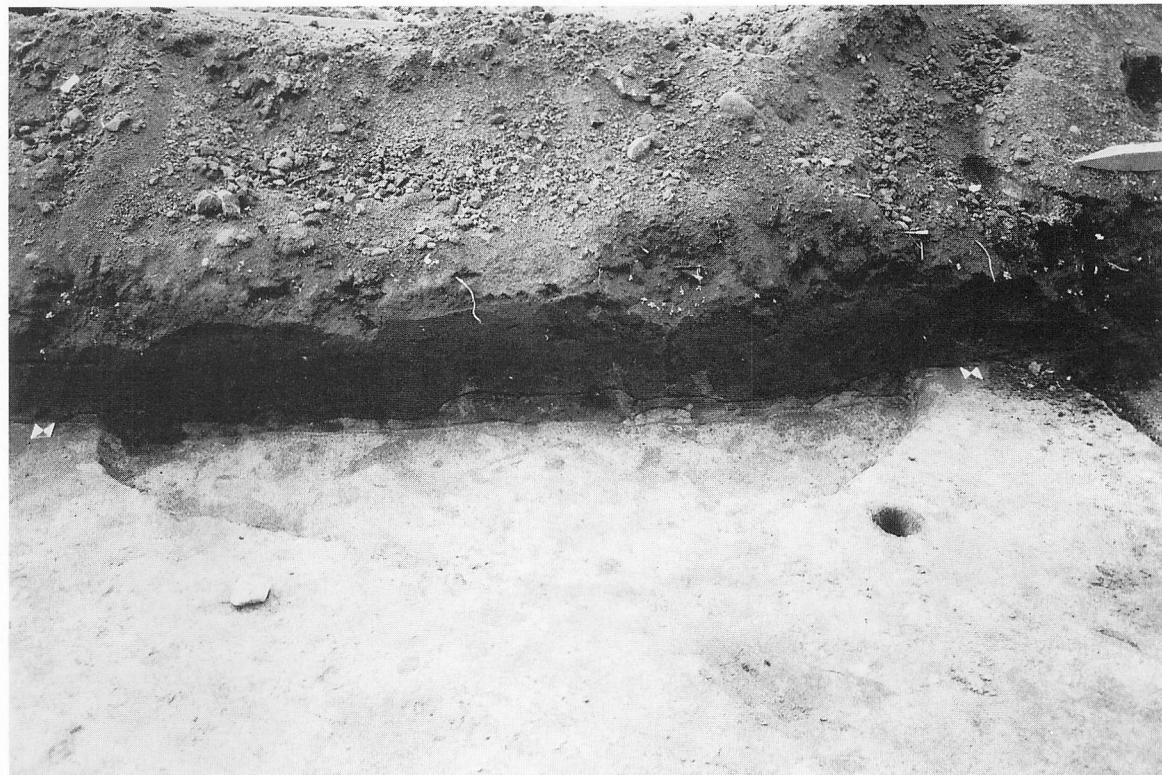
写真図版6 5・6号竪穴住居跡



6号竪穴住居跡 炉近景 南から



6号竪穴住居跡 炉断面 南西から

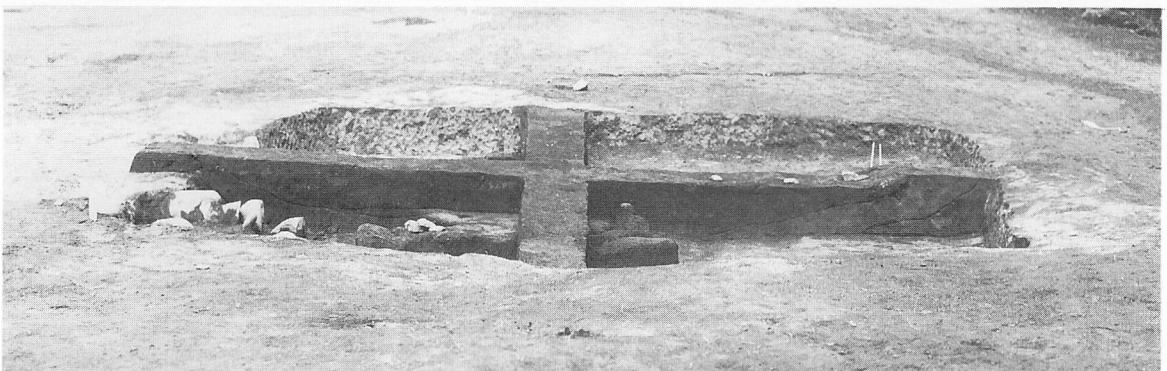


1号住居状遺構 東から

写真図版7 6号竪穴住居跡・1号住居状遺構



1号竪穴住跡 平面 東から



1号竪穴住跡 断面 南から

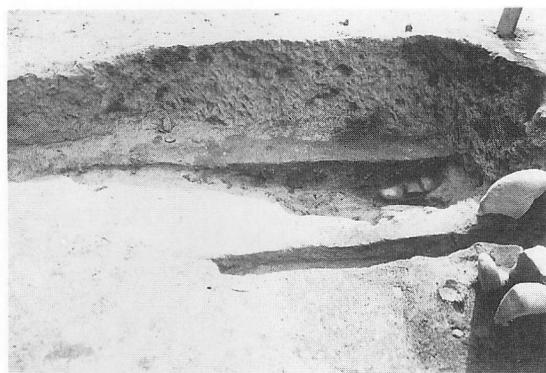


1号竪穴住跡 カマド近景 東から



1号竪穴住跡 カマド礫除去後 東から

写真図版 8 1号竪穴住跡



1号竖穴住居跡 土坑・燃焼部断面 北から



1号竖穴住居跡 1号土坑完掘 東から

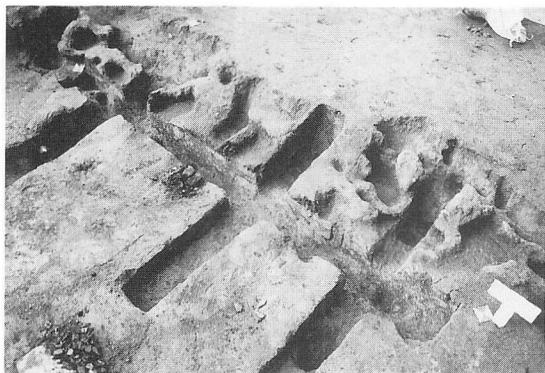


2号竖穴住居跡内焼土、炭化材検出状況 西から

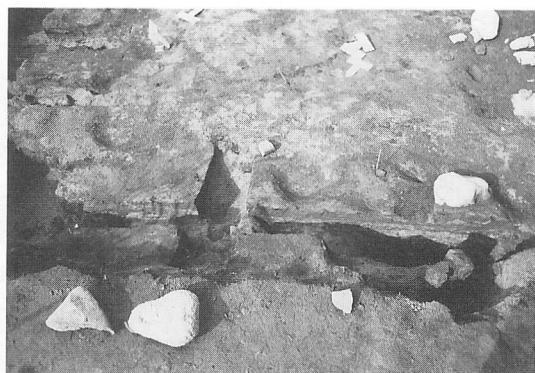


2号竖穴住居跡 断面 南から

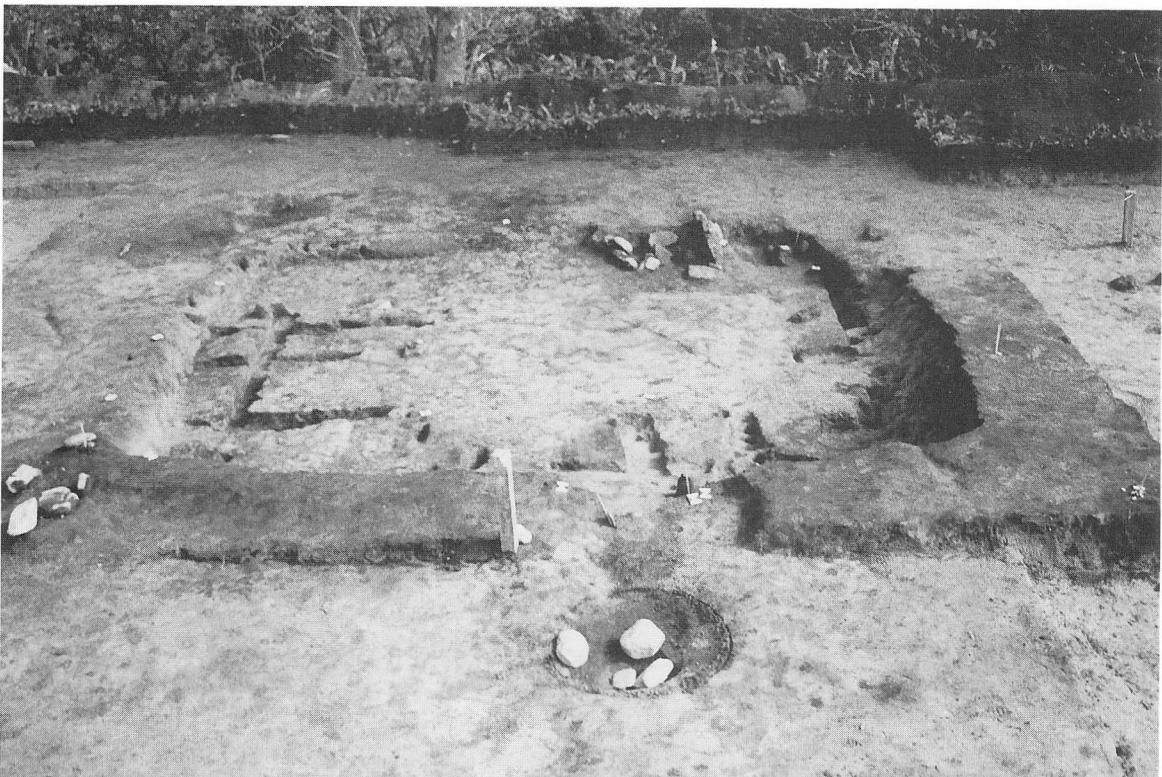
写真図版9 1・2号竖穴住居跡



2号竖穴住居跡 焼土・炭化材断面 東から



2号竖穴住居跡 烧土断面 南から



2号竖穴住居跡 完掘 西から

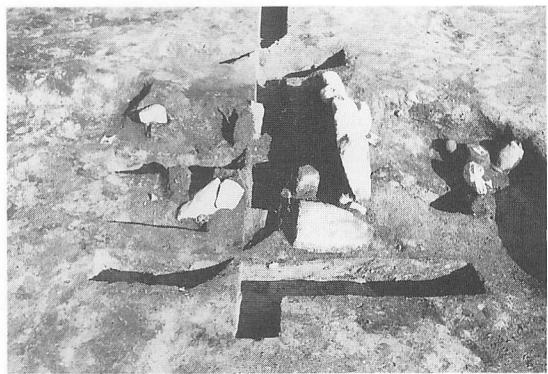


2号竖穴住居跡 1号カマド 近景 西から

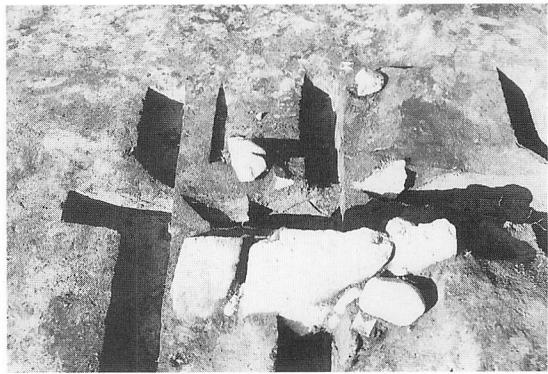


2号竖穴住居跡 1号カマド 断面 西から

写真図版10 2号竖穴住居跡



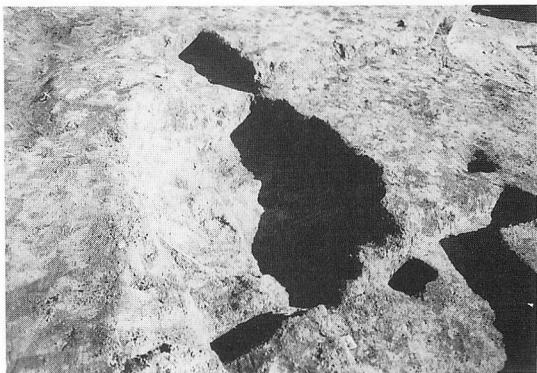
2号竪穴住居跡 1号カマド 断面 西から



2号竪穴住居跡 1号カマド 断面 南から



2号竪穴住居跡 2号カマド煙道 完掘 東から

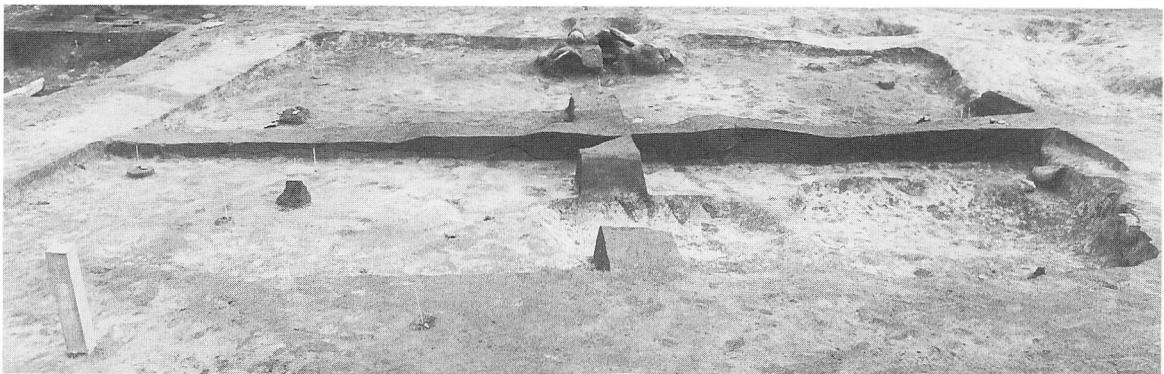


2号竪穴住居跡 2号土坑 完掘 西から

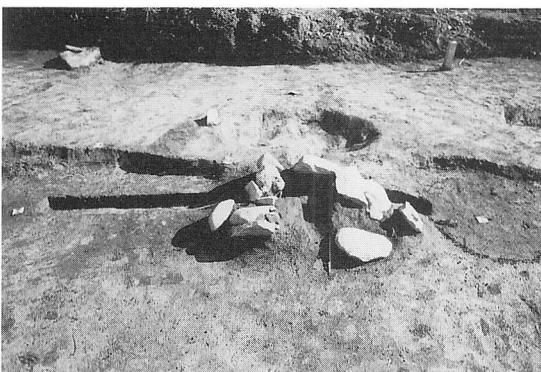


7号竪穴住居跡 平面 西から

写真図版11 2・7号竪穴住居跡



7号竖穴住居跡 断面 西から



7号竖穴住居跡 1号カマド近景 西から



7号竖穴住居跡 1号カマド 断面 北から



7号竖穴住居跡 1号カマド近景 磕除去後 西から



7号竖穴住居跡 2号煙道検出状況 西から



7号竖穴住居跡 3号煙道検出状況 南から

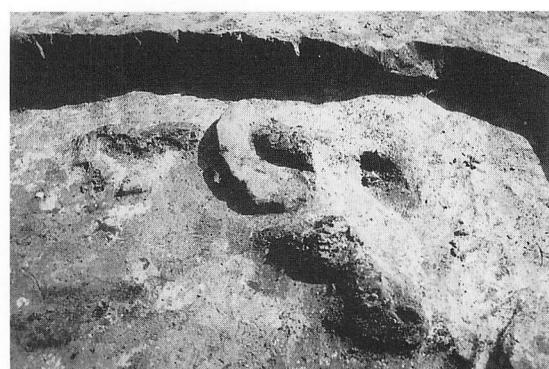


7号竖穴住居跡 3号煙道断面 西から

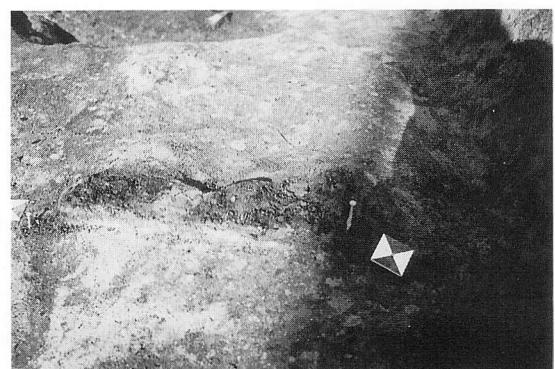
写真図版12 7号竖穴住居跡



8号竪穴住居跡 焼土・炭化材・炭化物 南から



焼土・炭化材近景 真上から



焼土・炭化材 断面 南から



8号竪穴住居跡 断面 東から

写真図版13 8号竪穴住居跡



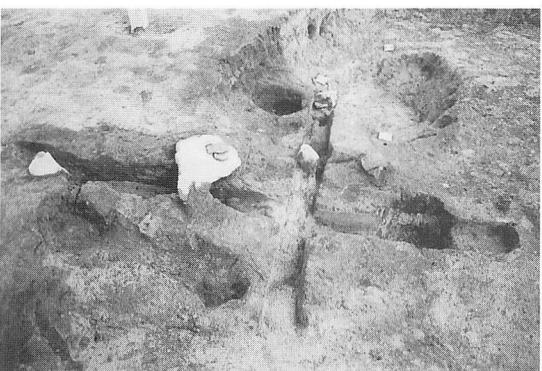
8号竪穴住居跡 完掘 南から



カマド近景 南から



カマド断面 南から



カマド煙道断面 西から



カマド完掘 南から

写真図版14 8号竪穴住居跡



9号竪穴住居跡 平面 西から



9号竪穴住居跡 断面 西から

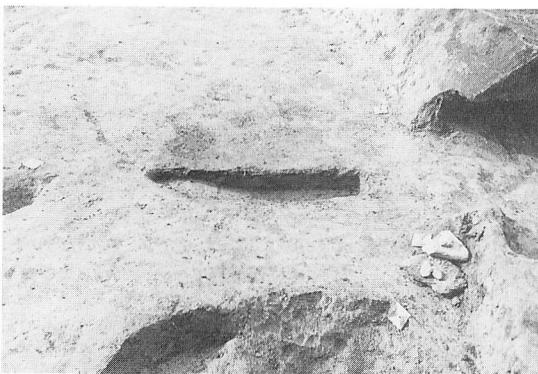


9号竪穴住居跡 1号カマド近景 西から

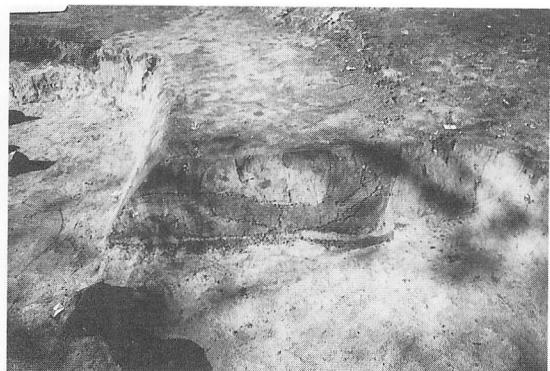


9号竪穴住居跡 1号カマド断面 南西から

写真図版15 9号竪穴住居跡



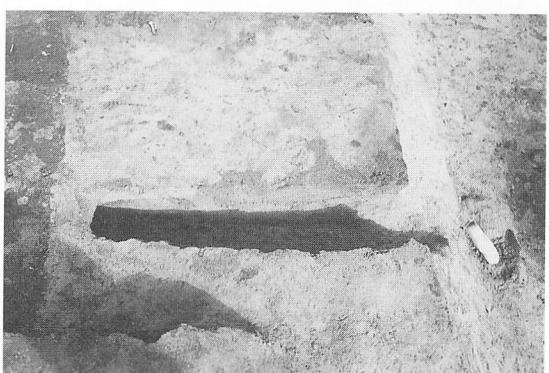
9号竪穴住居跡 2号カマド燃焼部 断面 東から



9号竪穴住居跡 2号カマド煙道断面 東から



9号竪穴住居跡 3号カマド燃焼部 東から



9号竪穴住居跡 3号煙道 断面 南から

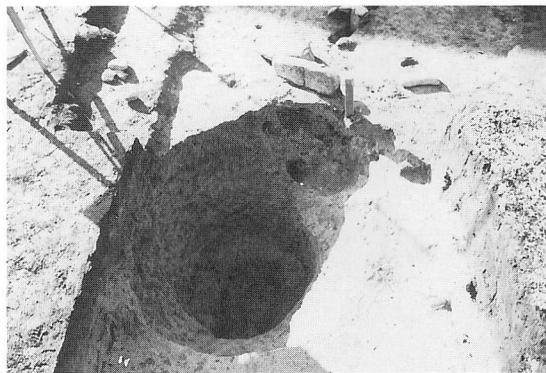


9号竪穴住居跡 完掘 西から

写真図版16 9号竪穴住居跡



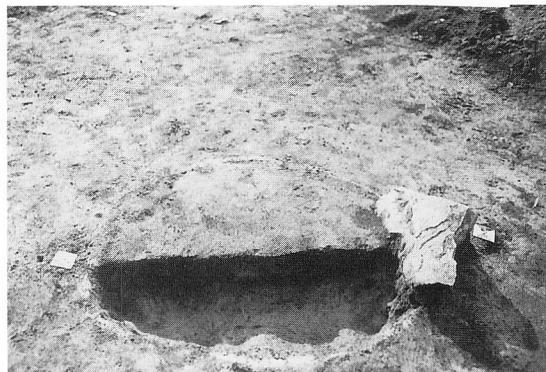
3・4号土坑断面 北東から



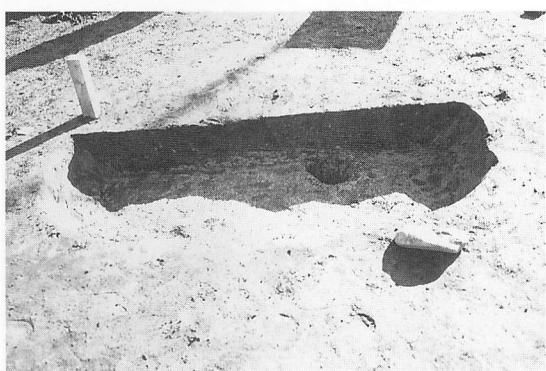
3・4号土坑完掘 北東から



5号土坑完掘断面 西から



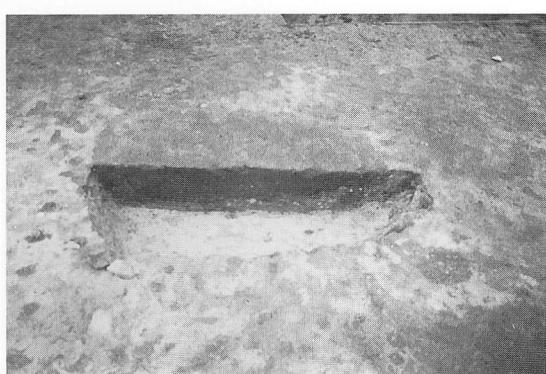
7号土坑断面 南から



9号土坑断面 西から



9号土坑完掘 西から



6号土坑断面 西から



6号土坑東から完掘

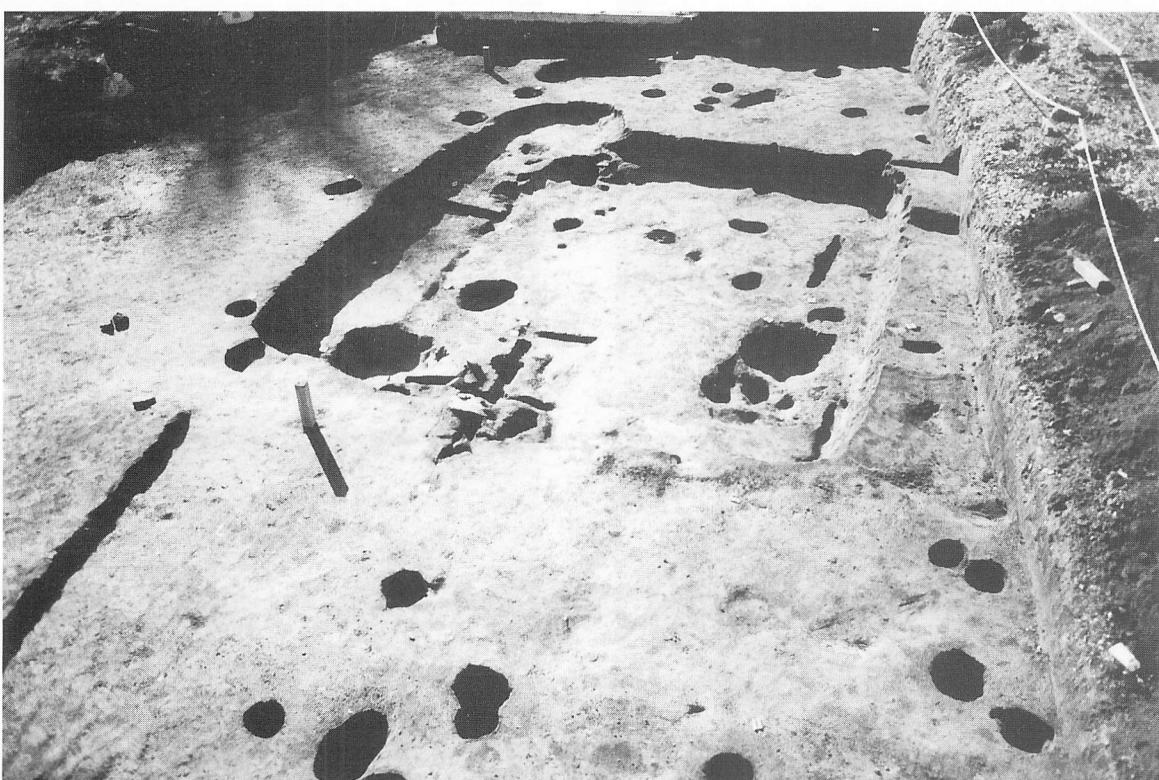
写真図版17 土坑



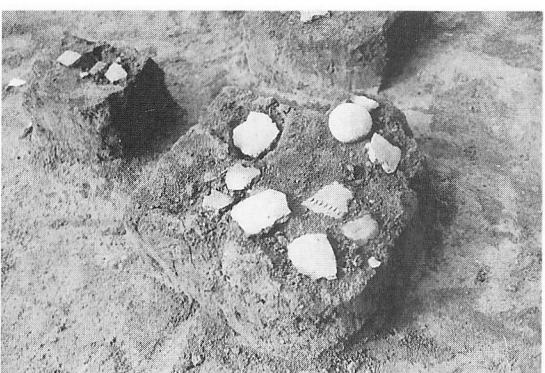
10号土坑焼土検出状況 東から



10号土坑完掘 東から



柱穴状ピット群 北から



縄文土器（早期）遺物出土状況 真上から



縄文土器（早期）遺物出土状況 真上から

写真図版18 10号土坑・柱穴状ピット群



縄文土器・石器（早期）出土状況 南から



作業風景

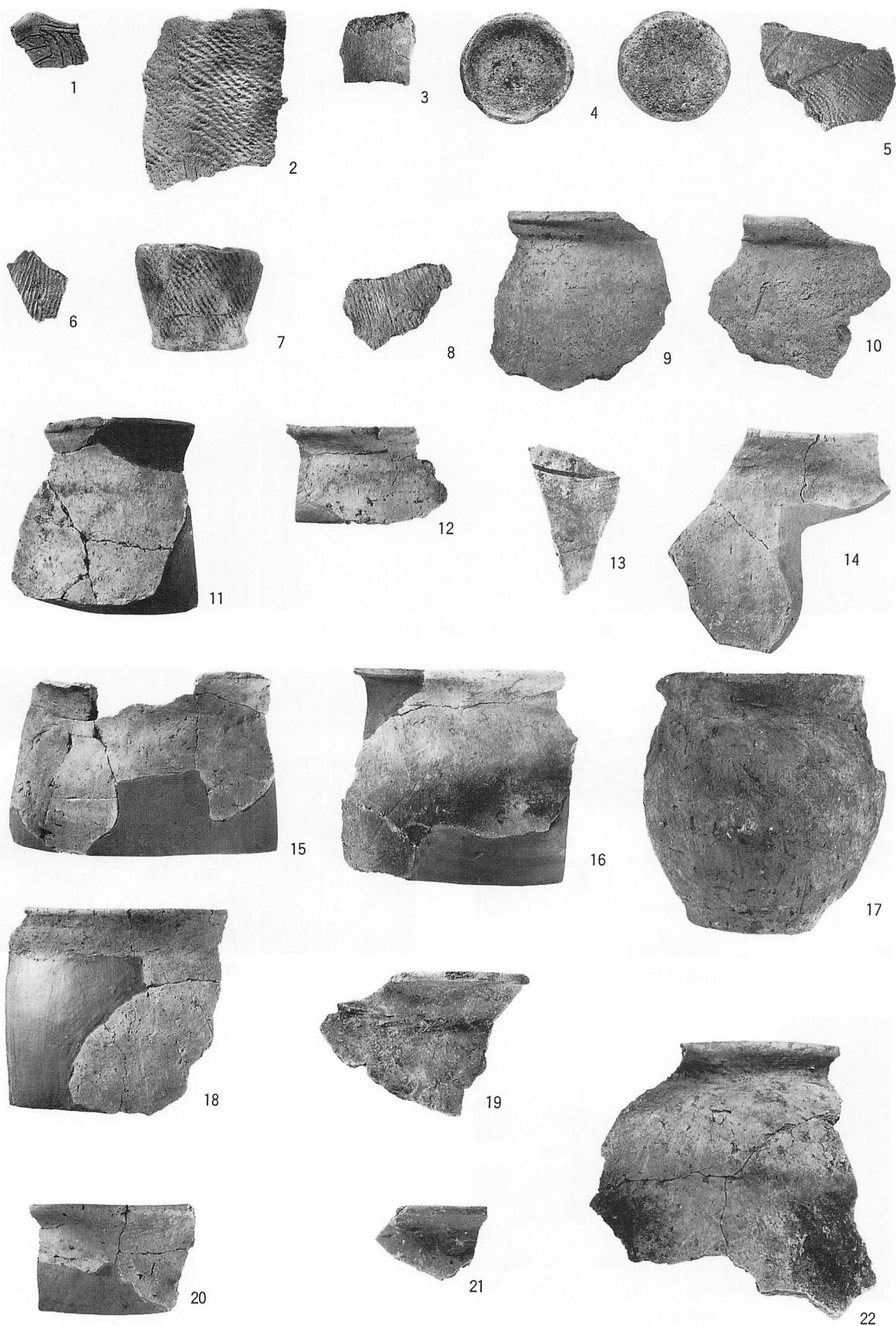


作業風景

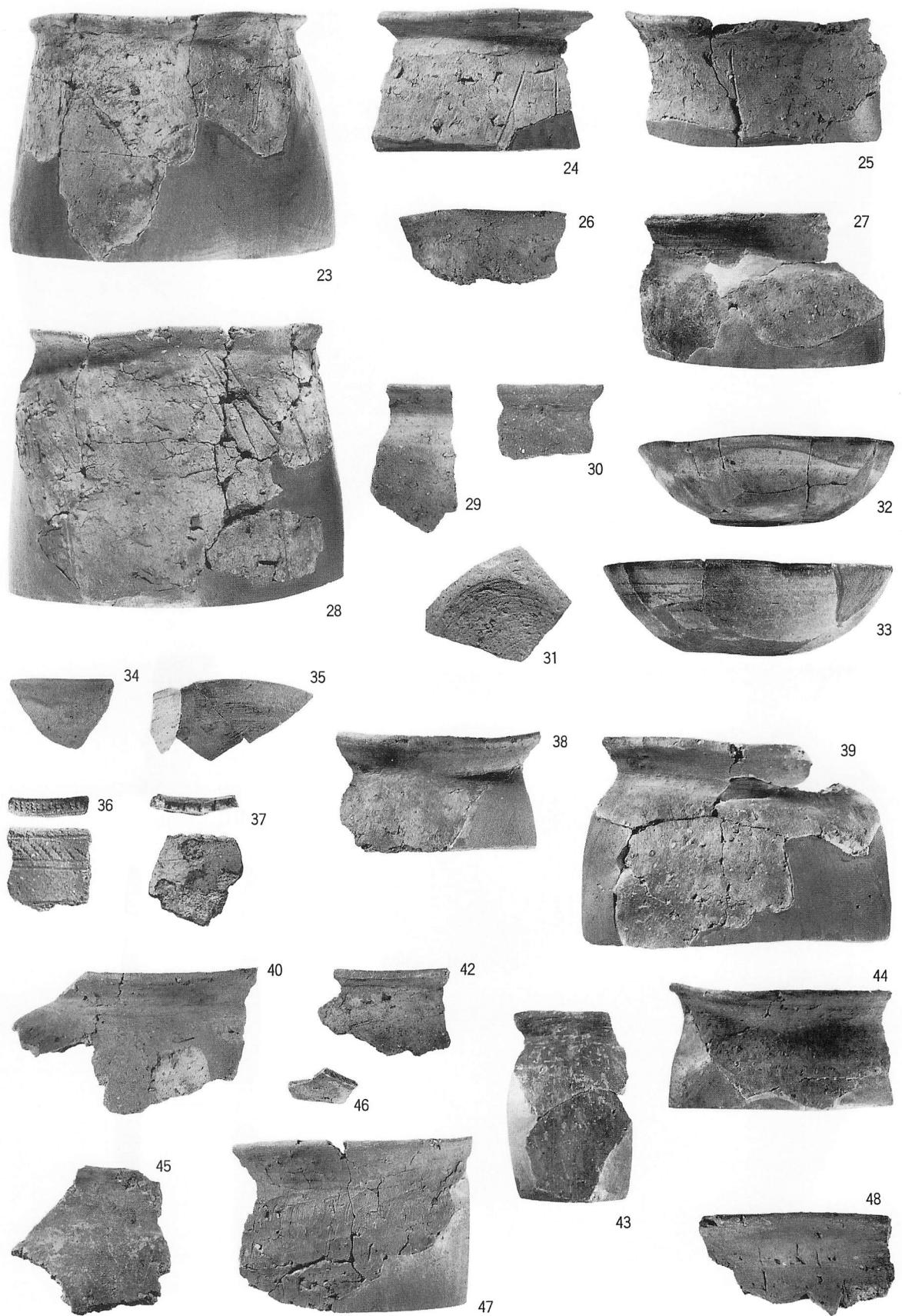


作業風景

写真図版19 縄文時代早期土器出土状況



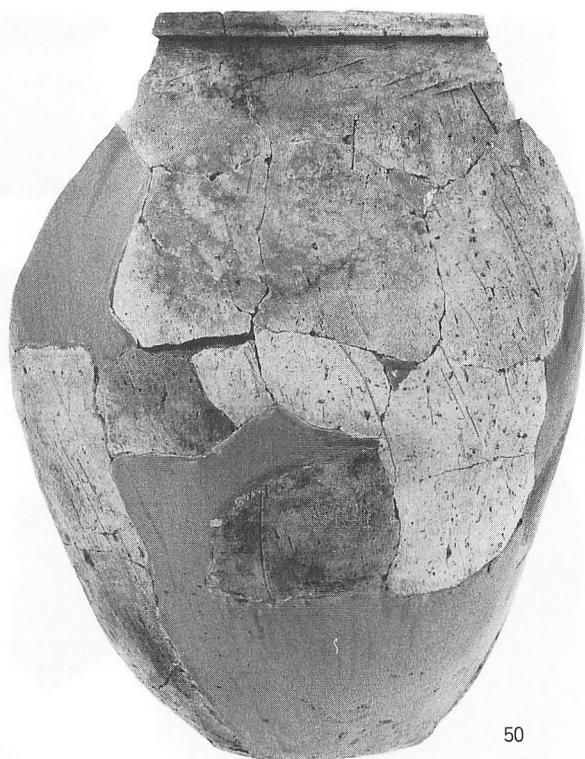
写真図版20 遺構内出土遺物(1)



写真図版21 遺構内出土遺物(2)



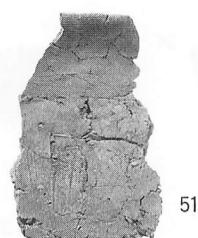
49



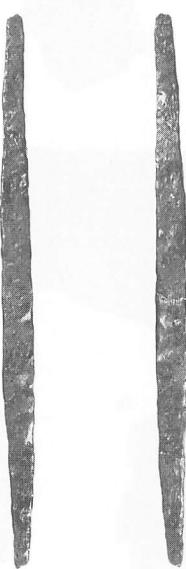
50



41

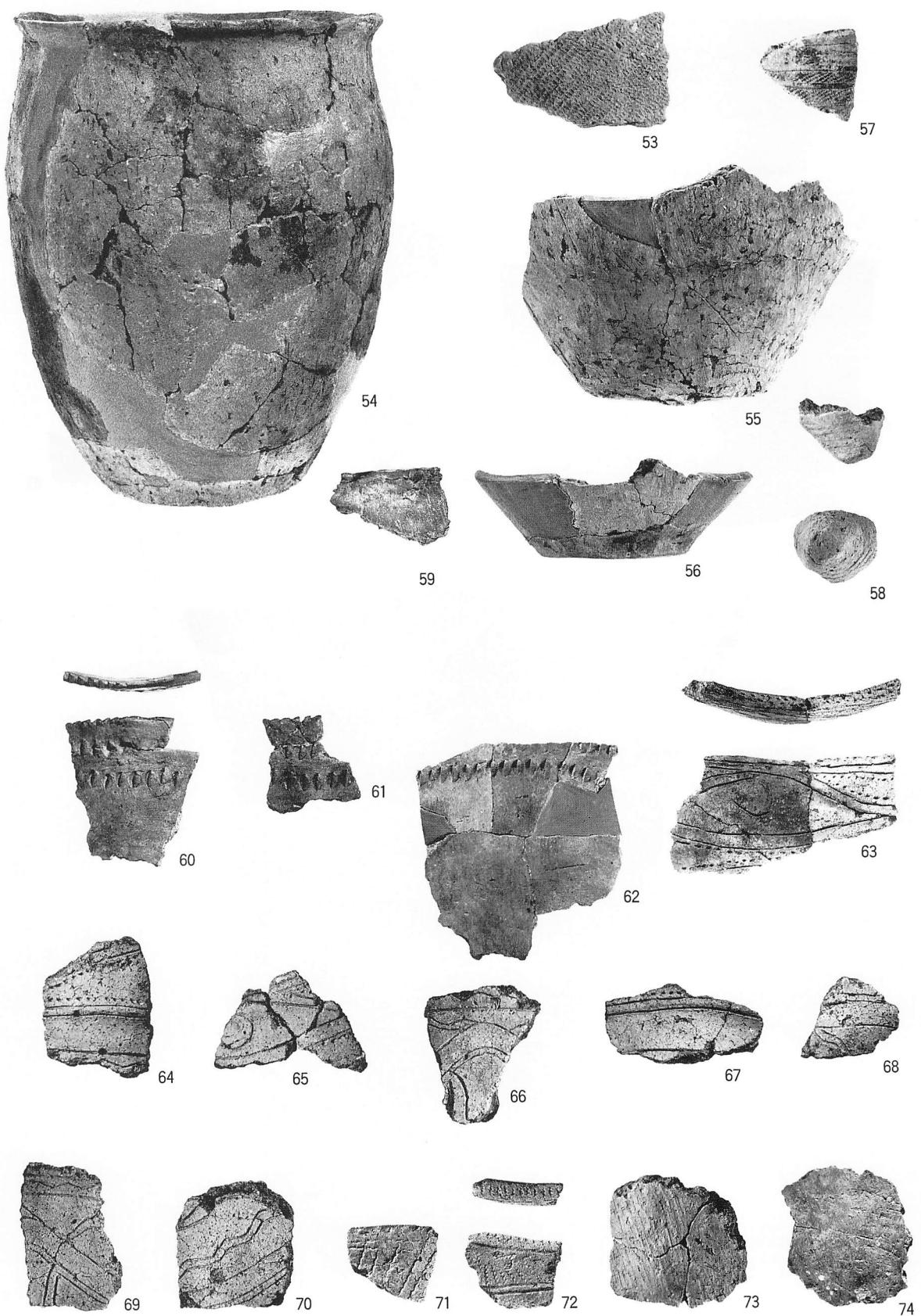


51

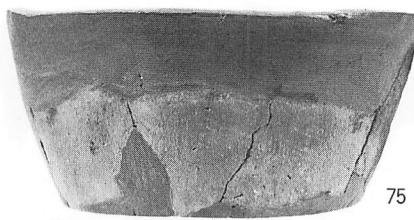


52

写真図版22 遺構内出土遺物(3)



写真図版23 遺構内出土遺物(4)・遺構外出土遺物(1)



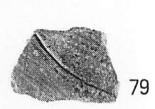
75



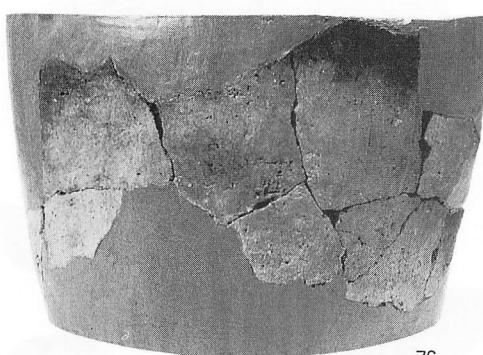
77



78



79



76



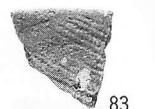
80



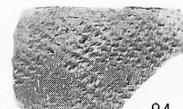
81



82



83



84



85



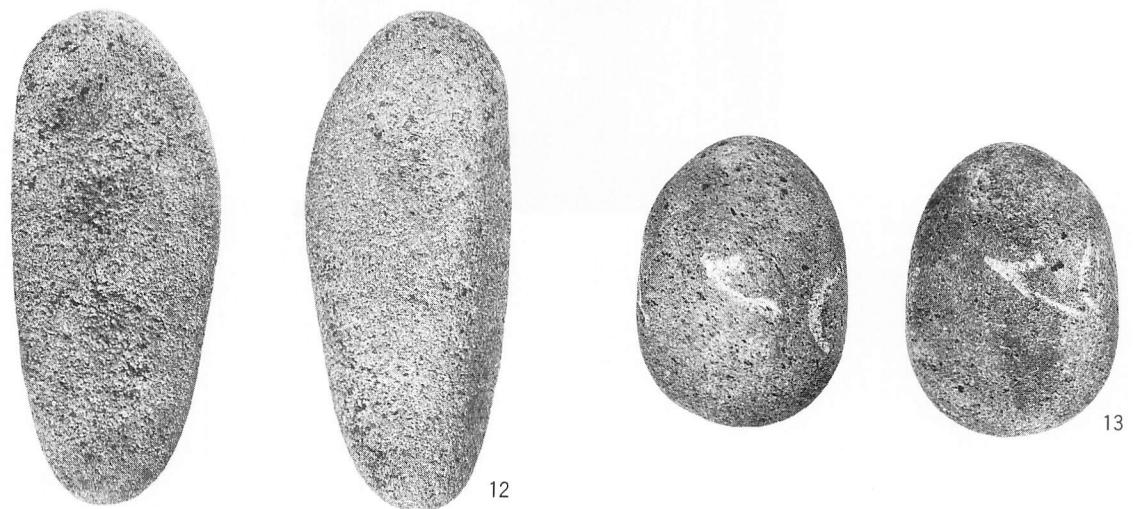
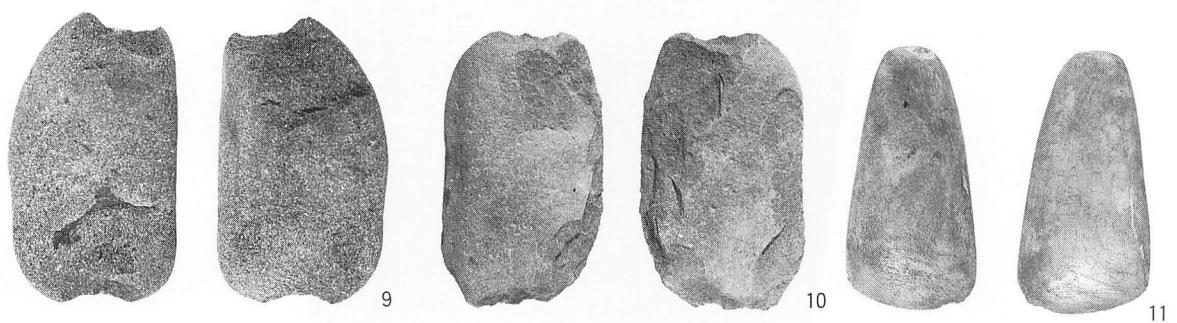
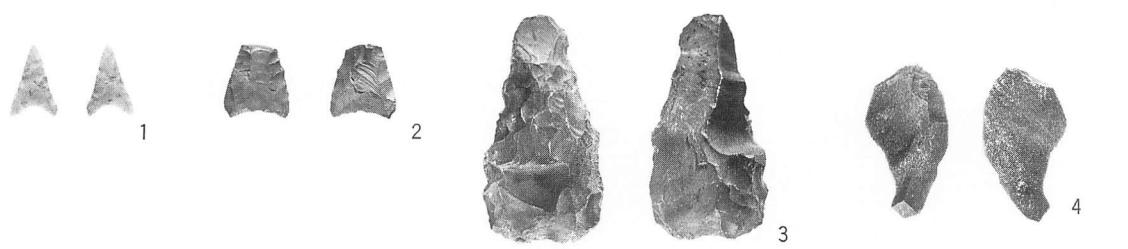
86

写真図版24 遺構外出土遺物(2)



86

写真図版25 遺構外出土遺物(3)



写真図版26 石器

報告書抄録

ふりがな	なりやいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	成谷遺跡発掘調査報告書							
副書名	山形村道緊急地方道路整備県代行工事関連発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第356集							
編著者名	菊池貴広、佐々木進悦							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001							
発行年月日	西暦2001年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なりやいせき 成谷遺跡	いわてけんくのへぐん 岩手県九戸郡 やまとむらおおあさかわい 山形村大字川井 2-38-2 ほか	03209	JF46-1066	40度 07分 58秒	141度 35分 37秒	1999. 9.1~11.11	2,240m ²	「山形村道 緊急地方道 路整備」事 業に伴う緊 急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
成谷遺跡	集落地	縄文時代 (後期)	竪穴住居跡 4棟	集石遺構 1基	縄文土器(早・後期) 土師器	縄文時代後期の竪穴住居跡4棟	平安時代の竪穴住居跡 5棟うち2棟焼失住居	
		平安時代	竪穴住居跡 5棟	炭窯 土坑 9基	石器(早・後期)			

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

【職 員】		所 長 伊 藤 民 也				副 所 長 櫻 田 次 男			
		長	伊	藤	民	也	副	所	長
[管 理 課]									
課	長	川	浪	清	徳		嘱		託
課	長	山	崎	善	光		〃	〃	
課	補	立	花	多	加		〃	〃	
主	查	日	影	睦	志		〃	〃	
主	事								
[調査第一課]									
課	長	佐	木	清	勝				
課	長	佐	木	透	文				
課	長	佐	小	内	登				
課	長	佐	赤	石	充				
課	長	佐	吉	田	一				
課	長	佐	小	原	郎				
課	長	佐	小	笠	健				
課	長	佐	金	原	一				
課	長	佐	金	野	進				
課	長	佐	東	居	人				
課	長	佐	阿	子	彥				
課	長	佐	海	林	則				
課	長	佐	阿	部	人				
課	長	佐	羽	柴	之				
課	長	佐	小	寺	男				
課	長	佐	曾	原	稔				
課	長	佐	長	村	則				
課	長	佐	溜	池	人				
課	長	佐	菊	上	男				
課	長	佐	井	本	治				
課	長	佐	吉	北	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治				
課	長	佐	北	田	敬				
課	長	佐	北	田	浩				
課	長	佐	北	田	治		</		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第356集

成谷遺跡発掘調査報告書

山形村道整備県代行工事関連遺跡発掘調査

印刷 平成13年1月25日

発行 平成13年1月31日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001 FAX (019) 638-8563

印刷 株式会社 長内印刷

〒020-0122 盛岡市みたけ三丁目3-28

TEL (019) 643-5343